
N . P . S

樹純我純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N・P・S

【Nコード】

N6832R

【作者名】

樹純我純

【あらすじ】

ときのわたる

土岐野渉はよくデジャヴを感じていた。しかし、そんな些細なことと関係なく、仲の良い友人達と学校生活という毎日を過ごしていた。

しかし、そんな渉の事を超能力者と呼ぶ少女が現れ、渉の今まであった毎日がおかしくなっていく。——自然超能力者と人工超能力者との能力バトルファンタジー

序（前書き）

今こんな時、という言い方は失礼ですが、小説載せようかと思ひます。

一応見やすく整理したつもりですが力不足も含め中途半端な文になっています（言い訳じゃないですよ！？）

そんなでも読んでいただけたら感想、指摘等々お待ちしております。

序

序

「危ない！」

俺は彼女を突き飛ばした。

彼女には必要ないとわかりつつ、そしてその結果自分がどうなるかもわかってはいたけど、考えるまでもなく突き飛ばしていた。このことに気づいたのは彼女の表情が呆然から驚きそして――

耳元で振動がした。それも直に触れて。

「うひあいお?!」

俺は変な声をあげて起きた。

寝てた、とはいえ恥ずかし、と思いつつ部屋を出た。

「あら、おはよ。今日は早いわね？」

「今度の文化祭の企画考えるから明日は早い、って言わなかったっけ？」

ふと動きを止め、炊飯器をみて、

「…どうだったかしら。とりあえず朝ご飯はパンね。お弁当には間に合うわよ。」

あいかわらずうちの母親はとぼけ方が古い。あれでごまかしてるつもりなんだからたいしたものだ。

と思いつつ、食パンが焼けるまでテレビをつけ朝から流されているニュースをみる。

今、死体が奇形となって発見される連続殺人、家が数件巻き込まれるほどの放火事件等が立て続けに起きていた。

「怖い事件よね。まあ、この辺じゃ聞かないけど」

はい、母がと焼いた食パンとジャム、バター、味噌汁をテーブルに並べてくる。

「パンに味噌汁…」

まあいいか、とパンにバターとジャムを塗り食べる。味噌汁をすすつてると、

「…ん？」

パンに味噌汁の組み合わせ。確か前にも…。この後は確か、

「おおおはよう…うい!？」

突然後頭部への一撃

吹き出す味噌汁

俺は二度目の奇声をあげた。

朝から見事な頭突きを決めてくれた妹に制裁をくだし、家を出た。

「しかし、最近よく感じるなあ」

俺は昔から既視感、デジャヴをよく感じる。

デジャヴ―実際には一度も体験した事もない出来事を、すでに体験した、見た、と感じる事、らしい。

昔は小さい頃によくデジャヴを感じたけど、その時はデジャヴなんて知らなかったから、一日が二回ある、なんて思ってた。

「おーはよ！ 涉くん」

そんなことを考えてたら後ろから俺のクラスメイトで近所に住んでいる伊集院が近づいてきた。

「おう、おはよ」

「今日はちゃんとさぼらずに起きたんだね」

「別にさぼってるわけじゃないよ。ただ朝が苦手なだけ」

「ほんと？でも、クラスで何の出し物にするか、て案を考えてきてって言った次の日に限って来ないじゃない」

「はい、そうです、さぼってます。でも、どうせ案が浮かんでないんだから行っても仕方がないだろ」

「だめだよ、そうやってみんなが考えたら話が進まないでしょ。そういう時は朝ちゃんと来てみんなで考えないと」

「はいはい、朝の会議に行かないとお前と一緒に登校できないもんな」

などと軽口を叩いてみる。

すると伊集院は顔を真っ赤にして、顔をそらした。

「そ、そうやってすぐ茶化すんだからー」

俺はそんな反応に軽く吹き出し、伊集院がそんな俺の背中を鞆でたたく。

別に幼なじみ、ていうわけじゃない。

中学の頃からこっちに引越してきて、学校は違ったけど、高校は同じになっただけ。

だから、付き合いはそんなに長くないし、クラス分けて同じになっ

た時に向こうから話しかけてきてわかつたくらいだ。

そこからこうして朝に会った時は一緒に登校することになっている。

「でも残念でした。まだ出し物決まっていなから今日の朝みんなで考えよう、てなったんだよ？」

「な、そういうことは昨日のうちに言ってくれよ」

「だーめ。そしたらまたさぼるでしょ。だからわざと内緒にしといたの」

「くそ、この天然系ムツリお嬢様タイプめ！」

「むつつり？。なんで？」

「あー、俺も受け売りだから意味はわかんね」

そう言ったら？て顔をされた。

でも、何となくわかる気がする。俺とはこんな感じだが、学校ではそんな話さないし、静かでないにもお嬢様みたいな雰囲気出している。しかも名字が伊集院。まあ珍しいと言えば珍しい名字ではある。

で、なぜかそいつ自称情報屋の中では、頭の中では常日頃妄想とかしてるみたいな感じになっているらしい。

実際はただ少し人見知りなだけなんだと思う。

そんなやりとりをしつつ涉たちは教室に着いた。教室にはすでに何人かいてそのうちの男子一人が涉に近づいた。

「よお涉。朝早いのに伊集院さんと登校とは、なあ、ほんととはつき合ってるんだろ。俺にはわかる、わかるよ。確かに伊集院さんはお前には不釣り合いで隠したいというのもわかる、がそもそも隠してるといっつか一緒にとうこう……?!」

俺はめんどくさくなったので、マシンガントークをかます友人、自称情報屋佐藤に貫手を入れてみた。思ったよりきれいに決まり、佐藤はむせかえった。

「おーい、だいじょーぶかー」

「なんで?! なんで貫手放ってきた本人がしかも棒読みで心配してくるわけ!?!」

「つかお前こそなんでいるわけ? 委員会でも係りでもないだろ?」

「それは、ちゃっかり自称情報屋の俺がアドバイスに来たわけ。文化祭の出し物決まってる一年の中でうちのクラスだけだぜ」

「げ、そうなの」

「そ、だから俺が他のクラス、ひいては全学年とかぶらないように、更には! なんの出し物がより客を集めるか、を進言するためにいるのである。どうだ、えらいだろすごいだろ褒めたたえたまえ、いややはり一家に一台クラスに一人、このおれ……」

長くなりそうなので再び貫手を放ち黙らせる。

「……あのなあ、なんで、なんでよりによって貫手なわけ？」

「んー、気分」

「はあ、お前なあ。あんま俺にひどいことばっかすると変な噂流すぞ」

「じゃあ、メンバー揃ったから始めるぞ」

俺達はバカなやりとりをひきあげ、真ん中に寄せた机の席に着いた。

朝の会議の結果、謎解き迷路という企画で落ち着いた。

佐藤は、「やっぱ今の時代は、こう、メイド喫茶。いや、あえての冥土喫茶でどうだ！？店員のアまりのかわいさにお客さんがその記憶を冥土の土産にして帰って行くという……」などと言いつつ出したが、衣装その他諸々含め反対があり、結局多数決で決まった。

そして、その日の昼休みに実行委員がその旨を伝え、明日から準備に取りかかること、また材料のダンボール等を各自持つてくる事も伝えた。

序（後書き）

今回、序、ということでも全くバトル要素など書いてません。
次からはバトルとヒロイン出てきます。

憧れのあとがきがこんな事しか書けないなんて…

一人目 私の名前は…（前書き）

若干のバトルシーンとボーイミーツガールのな？

能力とかでかぶっているのは勘弁願います（一応調べたんですが…）
。

一人目 私の名前は…

放課後、

帰宅組と部活組、それと準備組に分かれる中、帰り支度をする涉にほづきを持った佐藤が話しかける。

「お？もう帰るのか？てか文化祭の方はさぼりか？」

「違うつての。委員は迷路のさらに詳細を考えて、係りの方は段ボールを集めに行くんだよ。で、俺は集める方」

「だったら伊集院さんと一緒に行けばいいじゃねえか。段ボール持つてあげたら好感度アップ間違いないぜ。イベントは大事にしなきゃダメだぜ。いいな、文化祭、いいな、幼なじみ」

「幼なじみは違うつていつてるだろ」

「いいのいいの、そういう設定の方が萌えんじゃん！」

「はいはい、それに伊集院さんは今日は習い事らしいからどのみちいないよ。じゃな」

「え、なにそのあらたなもえ要素！くわしくおしえろー！！」

佐藤は教室の扉まで追ってきたが、「はい、ゴミ箱じゃんけんするよー。ださなきゃまけよ、じゃんけん…！」という声に追うのをあきらめた。

とりあえず近くのスーパーにでも寄ってみるか。たしか家にもいくつかあったはず…。

そんなことを考えながら渉が歩いていると、いつの間にか目の前に同じ高校の制服を着て顔をうつむけた女子生徒が道の真ん中に立っていた。

タイのカラーが緑、だから三年生？でも道の真ん中でなにやってるんだ？

渉は避けようと道の脇を通ろうとすると、

「やっと、見つけた…」

少女がつぶやいた。

「いいえ…やっと見つけてくれたわね」

「？」

俺に言ってるのか？

「まさか、こうでもしないと気づいてくれないなんて、やっぱりあの幻惑者がいるわね。…」

渉は立ち去ろうとしたが、立ち去れなかった。

少女のさらに数メートル後ろに二人の男が立っていたから。

一人はこれといった表情はないが、もう一人はうつすらと笑いを浮かべている。

そして二人ともこちらを、女子生徒の方を見ている。

すると笑っている方が内ポケットに手を入れ、再びその手を出した時、その手には拳銃が握られていた。

それは考え事に耽^{ふけ}っている彼女に向けられ迷わず引き金が引かれた。

涉はその瞬間体のすべての動きが止まった気がした。

銃声、そして、苦痛をこらえたうめき声に血が垂れる音。

涉は目の前の光景に目が釘付けになった。

それは少女がよろめきつつも無傷で立ち、撃った男が腕を押さえてしゃがんでいた。

この場面の状況、それは少女の体に当たった銃弾が跳ね返り銃を撃

った男の腕をかすめていった、というの一連の流れの結果だった。

「いつつってー！くそ、話がちげーじゃねえかよリンゴ！あいつらは体は鍛えてないから銃弾とか効くんじゃなかったのかよ。」

しゃがんで怪我した男が叫んだ。

対してリンゴ、と呼ばれた男がこたえた。

「まれだが、きっとバリアのような能力が発動してたんだろ。ったく、ハチミツよお、一度拳銃を撃ちたいなんて…旦那じゃないんだからやめとけ。キャラかぶるぞ。」

ほら立て、と軽く蹴る。うー、いてー、と涙目になりつつ、ハチミツと呼ばれた男が立ち上がった。

「あなたたち、この町の住人じゃないわよね？」

「は、そんなの見りゃわかるだろ。」

「いや、この場合、みえてないからこそわかる、だろう？」

「そう、なら…！」

渉の前から少女が消えた。いや、消えた時にはすでに腕に傷を負ったやつ、ハチミツが吹っ飛び、塀をぶち破り、ハチミツの位置に少女がいた。

「なっ！」

一体なにが…

涉はなにが起きたかわからないが少なくとも塀をぶち抜いた男は確実に死んだだろうと思った。

「がー、くそーさつきから俺ばかり狙いやがって!」

「!!!!生きてる?!」

「彼らは能力を手に入れると同時に肉体も強化されてるのよ。自分の能力で自滅しないように」

「能力?自滅?」

「さて、説明はその辺で済んだか?こっちからも行くぞ!」

無傷の男、リンゴはそう叫び、気付くと指の間に爪楊枝を指の隙間に二本ずつ、計十二本挟んでいた。

「行け」

リンゴが指を広げるとその爪楊枝全てがあり得ない速度で少女に向かっていった。

「!」

少女は咄嗟にしゃがんだ。はずれた爪楊枝はそのまま真っすぐ電柱に当たり粉みじんに砕けた。

グラビティ

「重力操作？…にしても爪楊枝があなたの武器？まさかそんなもので私を殺す気？」

「いや、これでも普通の人間なら頭蓋くらい貫通するとおもっけどな。銃弾弾き飛ばすような奴殺せるとは思っちゃねえよ。」

第一あんたの能力がわかんねえし。いや、わからないのがあんたらNPらの能力か」

く、とそれを聞いて少女の顔が軽く歪む。

「まあ、そんなデタラメなあんたでも。このスピードなら頭蓋は無理でも肉くらい貫通するだろ」

と言って男は腰につけていたウエストポーチから爪楊枝をケースごと取り出した。

さすがの数に少女が目を見開いた。

「なっ！」

「さてと、いきなりだが数増大。こんだけ撃てば何発かは刺さるだら」

そう言っでリングは爪楊枝の入ったケースのふたをはずした。

その数何百本の爪楊枝が散弾銃のごとく放たれた。

が、爪楊枝の束は少女には当たらなかった。

少女は上にいた。

爪楊枝が放たれると同時に地面を蹴り、数メートル跳んでいた。

避^{かわ}した！

渉がそう思い、少女もそう思った瞬間、

「もらったー！ー！！」

と声が聞こえ、熱の塊が少女に直撃した。：

空中で爆発が起こり、散った熱の塊が降ってきた。

渉は降ってくる熱の塊をよけつつ、少女の姿を探した。

いた。

あれだけの一撃を喰らいながらも、少女はその姿をとどめ、落ちてきた。

しかし、無事ではなく、制服は所々焦げ付き、スカートから伸びる太腿や手指に火傷のあとがあった。

「そっちは火炎操作^{パイロキネシス}だったのね。油断したわ」

「へっ！そんなしよばい火なんかと一緒にすんな。俺の能力は溶岩^{ルト}操作！どんなものも焦げ溶かし、グズグズにしてやんよ。あてっ」

「このほか。いちいち相手に能力を言うなつての。…やつらには相手の能力を封じる奴がいるらしいだからよ。が、おまえは違うみたいだな。」

ちなみに俺の能力は指向操作^{スヘッドシューター}、詳しくは言わねえが、重力操作^{グラビティ}と勘違いしてるなら間違いなくお前の負けだ」

「結局リンゴも名乗ってんじゃねえか」

「少なくともおめーみたいに能力はばらしちゃねえだろうが」

そんな遣り取りの中、少女は腕を組み、顎に手を当て、

「なるほど、火炎操作なら私なら燃え移らないただ熱いだけけど、溶岩操作だと塊、があるから直撃すると火傷だけじゃなくて普通にダメージが残るわね。そしてあの男の能力、指向操作は多分、物体の速さとその向きを操り、発射することができる。あれなら上下だけでなく、すべての方向に物体を飛ばすことができるみたいね。重力操作と違って私自身には能力の影響を受けない分ましで地味な能力っぽいけど、案外やつかいね。でも…」

と、つぶやいていた。

さすがにそのつぶやきの長さの異常に気づいた二人が少女の方をみた。

「……………」

「…れはまだわから…」

「……………」

「……………隙有り」

ハチミツ男が溶岩^{メルト}を放った。

「…！いきなり何すんのよ！人が考え事してるときに！」

「いやお前こそ今の状況わかってんのか？」

「はっ！しまった、つい考え込んでた。治せって言われてもなかなか治らないものね。気をつけなくちゃ」

うん、と自己完結を終えた少女は、

「それじゃあ、いくわよー！」

と二人の敵に向かっていった。

今度は目で追える速さで動いていた。

「へっ！そんなに遅ければただの的だぜ。」

おら！のかけ声とともに複数の熱の塊が飛ばされた。

それらを少女は見えないスピードで避け、一気に距離を詰めた。

「まだだ。」

リンゴは少女が詰めた場所を先読みして、すでに鉛筆を三本構えて、発射していた。

鉛筆を地面にたたき落としたような音が耳が痛くなるくらいに響いた。

鉛筆は少女に当たらず、そしてリンゴの背後に少女がはまわっていた。

「どうやらまっすぐにしか飛ばせないみたいね。」

「つくそー!!」

リンゴは再び発射しようとするが、それより先に少女の拳が背に刺さった。

少女の一撃によって生まれた風が渉の方まできた。が、リンゴはその直撃を喰らっても吹き飛ばずに耐えていた。

…こいつ、能力はともかくやるわね。でも、今の一撃でかなり削れたはず。

少女は放った拳を引こうとするが、引く前にリンゴに掴まれた。

「しまっ…」

「吹き飛ばー！！！！」

リンゴは吐血しながらも叫び、少女は斜め上、空に吹き飛ばされた。

吹き飛ばされた少女は空中で体制を直し猫のような姿勢で家の屋根に着地した。

「おいリンゴ、大丈夫か」

「ああ、今ので結構使っちゃったが。
こうなったら目標そいつからなるべく引き離すぞ」

そう言つて、リンゴ、ハチミツの二人も軽い動作で近くの屋根に跳び移った。

そして屋根に乗った三人はそのまま戦闘を続行して渉から遠ざかっていく。

「ま、待てっ。」

なんだかわからないけど追わないと…！

渉は見えなくなりつつある三人を追うが、走る先にまた人が現れた。

そいつは今までそこにいたかのように突然現れた。

背が高く黒いコートを着て、黒のシルクハットをかぶっている。紳士、というよりは全身で闇を表現した、そんな格好だった。

…こいつもあいつらの仲間か？

渉は警戒してつい足が遅くなる。男が右手をこちらに向けた。その右手は白い手袋に覆われ、そして、銀色に光る拳銃が握られていた。

拳銃！？

銃声が響いた時、渉は銀に光る銃の奥に光を反射したためがねをみた気がした。……

「うわっ！?!」

渉は布団から跳ね起きた。

…なんだかすごく疲れる夢を見た気がする。

「叫んで起きるのも、これで二日連続か。今何時だ…」

時計をみると、ちょうど起きるのに良い時間だった。

まだ五分は寝れるな、そう思ったとき、

「渉ー、喜美^{きみ}さんが迎えにきたわよー。いい加減起きなさいー」

と、下から声が聞こえた。

ん？喜美^{きみ}って…伊集院か。でも迎えなんて頼んでたっけ？

……ああそうか、結局あれからも朝さぼろうとしてたから迎えにくるようになったんだっけ。

俺は伊集院に待つように言って急いで起き、学校へ行く支度をした。

一人目 私の名前は…（後書き）

物語的にはここから渉の生活がおかしくなっていくわけです。はい。

ちよつとこれを書いている状況をばひとつ。

今の投稿は書き溜めを載せている状態だけと思ったたより修正がひどい。

と、作業中も地震がきたりとなんとも……

とりあえずこれを書きつつ現実逃避へ。

一人目続（前書き）

というわけで続きます。

投稿の仕方が下手でサブタイがひどいことになってますが、内容はその通り続きます。

まあ言うことはそれだけですので本文をどうぞ。

（もうちょっとましなこと書かんかい）

一人目続

「…にしても迎えに行った時まで寝てたなんて…本当迎えにきてよかった」

「違うつて。迎えにきた時には起きてたつて」

「ちょうど、でしょ！もう、明日から文化祭なんだからしっかりしてよね」

「へいへ…、待てよ伊集院。文化祭はまだ先だろ」

「え？何言ってるの、今日は前日準備の日で背景とか実際に教室にセツトしたりするよ？」

「……だっけ？」

「しっかりしてよね！最近ぼつ、としすぎ！」

「あれ、あの日からもうそんなに経ってたか」

…あの日っていつだ？確かあの日は…

「なあ、伊集院」

「ねえ、なんで今日は名前で呼んでくれないの…」

「えっ？」

「こないだから、その…名前で呼んでくれてたのに…」

「こ、こないだって、いち?っ…!」

…な、なんだこれ。噛んだし。

「……ばっ!」

そういつて、伊集院は顔面を真っ赤にして、走っていった。

残された(?)俺はただ呆然と立っていました。

じゃなくて、これって追いかけるべきか、いやそもそも名前で呼んでって…

これはあれか。いつも佐藤の奴が言ってるような状況なのか…。

などと、渉は混乱しつつも学校へ向かった。

教室へ入るのにこんな勇気がある日が来るとは。

渉は教室の扉の中へ入るのを渋っていた。

「よお、扉の前で何やってんだ。てかテンパってるし」

「おお?! 佐藤か。なあ、伊集院がどんな様子か教室に入ってみてくれないか」

「ふん? はいはい! りょーかいそゆことね。なんだよそれならそうと一言俺に言ってくればいつでも…」

「いいからはやく!」

「なら一緒に入ろうぜ! めんどくせー」

「なっ! ちよっ!」

佐藤は逃げようとする渉と肩を組み扉を開けた。

「おはよう! 諸君」

「おう、はよう」

「おはよ」

「OH! 葉よう!」

佐藤の挨拶にそれぞれが挨拶する。(待て、最後のは挨拶か?)
そして、肩を組んだまま伊集院の前に進んだ。

「伊集院さん、おはよう!」

「あ、おはようございます。佐藤くん」

「いいねえ、朝から元気で! 今日も頑張っていこう!」

「はい。今日の準備頑張ろうね。」

「おう！なんならよそのクラスの奴も手伝わせるから何でも言っ
てね！では！」

「……………」

そんな佐藤と伊集院との遣り取りの間渉はずっと黙っていた。
そうして渉と佐藤は席についた。

「さてと。ここからは内緒モードといきますか。で、何があった？
ありゃあ間違いない。間違いなく何か些細だけど大切な約束なよう
なもの忘れられたときの感じだ。何を忘れた？」

「何で今のでそこまでわかるんだよ?!」

「で、何があったって？」

佐藤はなぜか楽しそうに俺の肩を肘でつついてきた。何がそんなに
楽しいんだ？

「それは……………」

渉が言い渡むと、佐藤は勝手に推論を言い始めた。

「じゃあ、俺から当てようか？そうだな、今日は一緒に登校してな
かったから待ち合わせに遅れたとか、はたまた他の女子と話してた
かまたは登校中に伊集院さんとイベントとつにゅ…」

「わかった！わかった言う！言うから！」

これ以上何を言うかわかったもんじゃない！

そして涉は登校の際あった出来事を話した。

「なーる。はいわかった、おまえが悪い」

「いや、まあ、そうだけど」

「というかなんでそこまでしかイッテナイワケ？まだ名前で呼ぶとかなんとかってそこかよ！お前ゲームだったらプロリーグ以前の問題だよ！」

「てかツツコムところそこかよ！」

「はあ、まあいいや。原因は分かったとして。どうする？」

「どうするって…」

「つまりどうしたいかってこと」

「どうしたいかってそれは…」

その時ちょうど鐘がなり、担任が入ってきた。

「はい、じゃあ今から準備に取りかかるぞー。ゴミだしか時間決まってるからちゃんと放送を聞くように。後は委員が指示出して動

くように」

「はい。じゃあみんなまずは教室の掃除からお願いします」

おー、とかうえーとかかけ声があがり、全員が机を下げ始めた。

「まあいいや。続きは作業中にな。うおっしやー！早く準備して早く帰るぞー！」

と叫んで全体のモチベーション上げ下げしつつ、佐藤は自分の席に去っていった。

「でさっきの続きだが。どうしたいか考えたか」

文化祭準備の中、佐藤と渉は並んで作業しつつ話を再開した。

「……別にどうもする気は、ないよ」

「でもよ、俺が言うのもなんだがここんとこの二人の仲、てっきり本当につき合い始めたのかと思ったぜ」

「それが、俺ここんとこの記憶が曖昧なんだけど」

「曖昧っていつから？」

「あれからだから、ちょうど一週間前。」

待てよ、そのあれってのはいつのあれだ？朝も言ってなかったか？

「お前なあ、記憶喪失なんて今どきっておい、戻ってこーい」

「あ、ああ」

「まあいい。で、今までの事をふまえ俺からのアドバイスはひとつ、それは…」

「それは…」

佐藤が間をあけるのでつい言葉を繰り返してその先を促す。

そして、佐藤が口を開くタイミングに教室の扉が勢いよく開かれた。

「いた！」

そこにいたのは息を切らした三年生の姿だった。身長は女子の中でも高めで肌は白、その体は運動部なのか足、肩など引き締まっているのがわかる。顔は走ってでもいたのか頬が赤く上気している。

かわいいというより美人、の外見もそうだがそんなことより目を引くのはぼろぼろの制服だった。

三年間着てもそこまではならないだろうというくらいすり切れいて、至る所（特に腕）が破けていた。更にはその白い肌の所々に明らかに火傷とわかる赤い痕がその白さに反して痛々しく残っている。

その三年生はまっすぐと渉へ近づいてきて腕をつかみ引っ張っていかれ、連行される形のようになった。

「ちよっ、ちよっといきなり…！」

渉は佐藤に助けを求めようとしたが、

「って、なんだよ！このタイミングでエスケープ！どんだけヘタレだよ！そりゃねえだろ！何のために溜めたと思って…！」

「訳わかんない事言っでないで止めてくれよ！」

どういう事だ？逢い引きかよ！、とか新たなフラグ立ててんじゃねーよ！とかならわかるがエスケープ？明らかに三年の、しかも女子の先輩に連行されてるのに？

しかし、この状況の異変はそれだけではなかった。佐藤だけでなく他の生徒全員が気づいてない。渉に声をかけるクラスメートも、

「なんだ、サボタージュか？」

「おーいどこ行くの？迷路の壁の設置終わった？」

「渉、暇だったらついでに工具貸し出しで金槌三つ、たのんでいいか？」

等と、明らかにこの先輩を無視、いや気づいていない。

そう、なんていうか、渉の腕を掴んでいる三年生がいる、のに気づいていない。視えていない。存在していない。

渉が何かおかしいことに気づき始めたときには、校舎から少し離れた自転車置き場にいた。

そこで渉を引っ張ってきた三年生と向き合った。そして渉はあらためて三年生をみた。

ぼろぼろの制服。

火傷の痕。

つぶやきながら考える仕草。

！！！！

「でも幻惑にはまってる限りこちらと見えている世界が違っわけだし……」

「あ、あの……」

「ん？」

「もしかしてこないだの、えと、銃弾はじいたり屋根に跳び移ったり……」

「あなた、私のこと覚えてるの？」

「ええ、はい。だいぶ前のことでしたから忘れていたんですけど。」

「そう、でもだいぶ前の事じゃないわよ。あなたと私が会ったのは昨日よ。」

「は？」

「本当はだいぶ前から話しかけていたんだけど、幻惑者の術中で私が視えていなかったみたい。何とかして君と話せないかと幻惑の間を探していたんだけど君が学校に通っているならこの姿でなら気づいてもらえると思ったんだけど。それがやっと昨日の事よ」

「それなら、今日はまだ文化祭の前日じゃないはず！ あれは確か……！」

「それも幻惑の一つ。今のあなたの周り、時間も人も環境も全て幻惑者が作り出した偽物。普段通りに見えても不自然な部分とか矛盾があつたはず」

確かに心当たりはあった。さっきの事といい突然日にちが飛んだ事といい。

「じゃあその話が本当ならここは今、夢の中とか、なのか？」

「それは違う。敵の幻惑はもつと高度なものよ。聞いて。私は幻惑にかかってないから全て普通に視えているわ。そして今、私から視たこの町にはあなたしかいないの」

なっ、と俺はさすがに絶句した。

「そんなっ！母さんや俺の妹、他にも佐藤や伊集院までも幻だっというのかよ。だったら、俺が食べていた朝飯や弁当は！」

「それは私に実際に見てないからわからない」

「都合がよすぎる。それにしたら本物の俺以外の人たちはどこへ行った？そしてあんたが幻覚じゃないとも言いきれない」

「どこへ行ったかもわからないし、証拠もない。けど、君の幻惑を解く方法ならある」

「なに？」

「それは幻惑者を倒す事。そしてその幻惑者の核を取り除く。そうすれば君の幻惑も解ける」

「……………」

こうなってくるともはや子供向けのファンタジーだな…。

「能力の特徴上、幻惑をかけられた時、君は幻惑者に会ってるはずよ。多分記憶が飛んだり、物事に矛盾を感じた直前とかに」
「記憶が飛ぶ…？」

たしか、確か…戦いの場に遭遇して、そして…

「！」

渉が何かを思い出しそうになったとき、少女に緊張が走った。

「いた！けどっ！最後にこれだけ、いい、何かおかしな事を感じたりしたら私を思いだして！私の名前は…」

その時、聞き覚えのある銃声のような音が鳴り響いた。

「なんだ！？」

渉は音の鳴った方、校庭に振り向いたが、そこでは文化祭の出し物の予行練習が行われていただけだった。

渉が顔を戻した時には、目の前に誰もいなかった。

……あれ、俺は何でこんな所にいるんだ？

「おーい、わたるー」

渉が見上げると佐藤が窓から呼んでいた。

「個人練習もいいけど舞台ができあがったから一回最初から最後まで通すって監督様が言ってるぞ。早く来いよ、主役！」

「あ、ああ。今行く」

…そうだ。俺はクラスの劇の練習をここでしてて、それで…それで？
誰かと話してた気がするが、まあいいか。

そして渉は劇の練習のため、クラスの教室に戻っていった。

「…はい、ありがとうございます。あとは明日に最終フェイズに入ですか？…はい、では予定通りで。例の少女はどうしますか？…
………はい、では全力で。いえ、やっと下っ端を抜けてからの初任務、必ず成功させてみせます。はい、では」

リンゴは自分の直々の上司であり、かつ今回の計画の首謀者との連絡を終えた。

「で、旦那は何だつて言ってた？」

「予定通り、明日には《洗脳》が完成するそうだ。そしたらこれを、
」

といってリンゴはポーチから腕時計のケース大の、中を衝撃から守るケースをちらとみせ、確認し、

「こいつをターゲットに埋め込むまでだ」

「でも、NP、ナチュラル・サイキッカーにそいつを埋めるなんて初めてじゃね？」

「だからこそ、この計画は旦那、ひいては俺たちの組織で注目されてるんだろうが。だから失敗は許されない。何としても」

「へーへー、気張ってるねえ。じゃああの女は？」

「あいつも間違いなくNPだろうが、今回はただの邪魔だ。計画さえ邪魔されれば生かすも殺すも自由、だそうだ」

「ひゅうー、なら俺が殺っていいか？借りを返してやるぜ」

「やめとけ、とは言わんが俺としてはこのまま近づけさせないにとどめたい。戦闘向きのNPだし、一人でいたが仲間がいるともわからない。それに単純に強い」

それを聞いてハチミツは半目になり、溜息をついた。

「はあ、リンゴ、お前ってば本当につまんね」

「あのなあ、つまないとかおもしれえとかそんな話じゃねえぞ。大体今まで何度か接触したが二人ががりで逃げられてんだぞ」

「わかってねえのはそっちだ。ああいうやつは古龍とかと一緒に何回か戦ってやつと殺せんの。実際向こうはボロボロ、こっちは快復済み。次くらいで殺せるって」

その時、ハチミツの携帯に着信が入った。

「ったく、こんな時に誰だ…って、ハートロックのあねさんじゃないですか！」

『ハローー 元気してる？ハッチー』

と、ハチミツの携帯から明るく艶っぽい声が聞こえる。

「ええ、元気元気ですよ！こないだの《ライブ》でもう元気ちょー！ー貰いましたから！」

『やだ、きてたの？もう 言ってくれたら終わった後に会えたのにあ の《ライブ》は全てハッチーとリンリンのおかげなのに』

「いやいや、それ程でもあるツスカ？いやあ、今隣にいるそのリンリンのせいで最後まで観られなかったんすよ。仕事からだ、とか言うて」

『あは リンリンらしいね！ところでえ、ついでにリンリンにも代わってくれないかな』

「ええ！いいスっよ！」

と言ってリンゴに携帯を差し出す。

「ほらよ、我らがアイドルが、ついでに、あんたに代わってほしいってさ」

リンゴはやや嫌な顔をしつつも受け取り、

「もしもし…」

『…おいこら、電話でろや』

「あ？着拒にしてるからわかんね」

『よけいタチわりいじゃねえか！ああ！？』

さつきと全く様子の違う電話越しの相手にリンゴは溜息をつきつつ用件を聞く。

「で、今度は一体なんだ？」

『ツチ、あんたの用意した信者候補達、あんまアタシになつかないんだけど。てか若い奴が多くないんだけど、おっさんとか主婦とかどうでもいいのばっか』

「そりやおまえの本性を見抜いてんじゃねえか？」

『うつつつざつ！死ね！あたしは完璧だつつの。こっちは協力してやってんだからもししくじったらアタシの信者どもに襲わせるかね』

「はいよ、言いたいのはそのだけか」

『そうよ、いい？今度アタシの信者の集めるときはもつと若い奴らにしなさい。じゃないとこっちのやる気も起きないし使い物にならないでしょ。わかったわねこの腐リンゴ！』

特に用はないと判断したのかリンゴは電話を切った。

「あー！何すんだよ！せつかくのあねさんからのコールが…ついでにくせに勝手に切ってんじゃねえ！」

「まったく、電話を切ってもうるせえな。あいつはこれから《ライブ

《の練習だよ》

「なに？…それならしょうがねえ。最後に応援の一つでも言えればよかったのに…。がんばれあねさん！」

「おまえもつくづくかわいそうな奴だな」

「ああ？なんか言ったか？」

「別に。それに俺たちの方も動くぞ。怪我は治ってるな？」

「あんたこそ重傷の方は治ったか」

ハチミツが皮肉気味に聞く。

リンゴは自分の体を見下ろす。そこには昨日少女の一撃をもろに喰らい吐き出した血の痕が付いたシャツがあった。吐血したということとは内蔵が傷ついたはずだがしかし、今では体の外、中、どちらも正常である。

一方ハチミツもあの後の戦闘で更に三回吹っ飛ばされたが体そのものは無傷であった。否、傷ついた二人の体は異常な速さで快復していた。

「便利なのはいいけど消費が激しいんだよなー」

「確かに。意外にもスピアの分もなくなった。だが、こっちの方が有利なのは変わらない。できるならやはりここで潰す」

そして、渉は文化祭当日を迎えた。

一人目続（後書き）

内容についていくつか。

今回は戦闘はないですが、渉と少女が接触します。あと佐藤が、佐藤が…！特になにも起きないんですけどね。

それで次で一人目、つまり一話分終了になる予定です。

一話終わると書き溜めがなくなってしまうんですが、できれば順調にね、その、続きを投稿できればと…（できるかなー）

一人目「……ほおずき」（前書き）

三部構成になりましたがそのラストです。（一話目なのに…）
続けて読んでくださってくる方はそのまま、また初めてみた方は一度前の話を読んでからどうぞ。

一人目「……ほおずき」

文化祭はなにもかもがうまくいっていた。

クラスの劇は結構な客入りで緊張しながらも、無事主役をやり遂げ、一日目を終了した。

二日目は役者は一日目とは交代し、俺は佐藤と伊集院―喜美と三人でいろいろな場所を回り文化祭を楽しんだ。

佐藤は俺たち二人に気を使ってくれたのか、あっちこっちと引っ張り回されたが、どこに行っても俺と喜美が隣（出し物によっては二人きり）になれるようにしてくれた気がする。

俺はこの時、心の底から楽しみ、悩んでいたことなど全く気にならなかった。

…あれ、何を悩んでたんだっけ…

「ん？どうしたの涉？」

…いや、なんか忘れてるような気がする…

「あのなあ涉。こういう時はたとえば大事な用事を思い出しても黙ってるのがマナーで奴だぜ」

「そつだよ。せっかくの文化祭なんだから楽しもうよ。昨日はずつと劇に出てたんだから今日は思いつきり楽しまないと！」

「そつ、まさに伊集院さんの言った通りだぜ」

…そつだよな。わりい、次はどこ行く？…

「けっこう色んなところ回ったよね」

「おつ、ならまだ行っていないおすすめがあるんだが…」

こうして二日間の文化祭も過ぎていき、残るは終縁祭、通称「お疲れ祭」だけとなった。

お疲れ祭は、体育館と校庭が解放されて、軽音部やアカペラ部等が文化祭中に人気のあった曲をアンコール演奏をしたりする。

それを聞いていてもいいし、演奏をBGMにして文化祭の余韻に浸って友達としゃべっていてもいい。そしてその中、俺は校庭の端の方で喜美と向かい合っていた。

「いいか、ここから先は俺は消えるがヘマはするなよ。今更な気もするが。それといくら人が少ないスポーツとはいえあーんなイベントやこーんなイベントはお前にはまだはや…」

ここまで聞いて俺は喜美に校庭に行こう、と誘われた。佐藤はほらきた、といわんばかりの顔をし、喜美は何か覚悟を決めたような、しかし、耳まで真っ赤にした顔でこちらを見た。

そして今、最初はねぎらいの言葉を掛け合っていたが段々と口数が

少なくともいきただ向き合っていた。

俺は喜美のその口が開かれるまで校庭を見た。

今立っているのは校舎の脇、蛇口の回す部分がとれているため水道があるところでも周りに人はいない。俺は校舎を背にしているので校庭の様子がみて取れた。

校庭の中心では文化祭で使わなかった廃材でかがり火を焚いていてそれを囲む者や友達と話す者、まだ元気があるのか走り回る者もいた。

他に校庭での出し物がたくさん並んでいる中、更にはボロボロな制服を着た三年生に長身の男が銀色に光る銃を突きつけている光景もあった。

そして、喜美に視線を戻すと目が合い、それで彼女は決心したのか、

…ちょっと待て、今何かおかしくなかったか？

自分の感じた違和感に涉は再び校庭を見渡す。

別に普通だ。文化祭に関係ないもの、怪しいものはない

校庭のかがり火

友達としゃべる女子

走り回る男子

銃を突きつける男とその先にいる女子生徒

！これは…

渉はこの光景に違和感を感じた。普通であれば間違いなく最後の光景をおかしいと感じるはずだが、渉は感じた違和感は別にあった。

渉が感じた違和感とは――そう、一度見たことがある光景、デジャヴに対してだった。

そして渉は、

「危ない！」

俺は彼女を突き飛ばした。

銃弾を跳ね返していた彼女には必要ないとわかりつつそしてその結果自分がどうなるかもわかっていたけど、気が付くまもなく突き飛ばしていた。このことに気づいたのは彼女の表情が呆然から驚きそして -

そして、俺の意識は途絶えた。

――風が強く吹く中、校庭を見下ろす。そこには物影があっても人影がない。

…この感覚は、

―右を見ると同じく校庭を見下ろす少女。彼女はこちらを向き何かを言っている。

…聞こえない。しかも周りが暗すぎてよく視えない。

―少女が再び校庭を見下ろすと背後に回り少女の背中が見える。

…何をする気だ？

少女は気づかない。手が背中に伸び一つの動作を推測させる。

…やめろ、

手は少女の背中に触れ、

…やめろ、

少女は気づき振り向くが、

「やめろ―!!」

渉は自分が叫んだのを聞いた。どうやら実際に声に出していたらしい。

「気がついた？」

首を後ろに回すと例の少女がいた。彼女は既に、制服を脱ぎ私服に着替えていた。

「ここは？」

「ここは学校の屋上。君が私をかばってくれたおかげでやられずにすんだみたい」

「そうだ、俺、撃たれて…」

渉は立ち上がり自分の体を見下ろすが銃痕どころか血すら付いてなかった。

「実際には撃たれてないわ。どうやらあの銃声が幻惑をかけるきっかけになってるみたいね」

「幻惑のきっかけ？」

「私の話どこまで覚えてる？あいつが君に幻惑を視せてた幻惑者よ」

あの男が…？

そのとき渉は自分が前にあの男を見たことがある事、そしてその前に彼女が自分の目の前で戦っていた事を思い出した。

「俺、確かあいつを見たことがある」

「ほんと！？」

「ああ、確か先輩が初めて俺の前に現れて二人の不良みたいな奴と戦った後に会った」

「あの時か…やっぱり君から離れるんじゃないかった。……あ、それと私はここの生徒じゃないよ？」

「えっ、そう…なんですか」

「なんで敬語？制服は君に気づいてもらうために着ただけ。まあ、さすがにもう着れないけど」

「といって、今はぼろきれとなって捨て置いてある制服を見る。」

「ま、あれは置いといて、今の状況を説明しといた方がいいかな」

「ぜひ。あなたは一体何者で、あいつらも何なのか、どう見ても普通の人間じゃないですよね？」

「普通の人間じゃないときたか…まあそうなんだけど。あんまり時間がないから手短に言うけど私や彼らはいわゆる“超能力者”でやつらは君を狙っていた。そして私は彼らから君を保護するためにこっししてきた、て言っつてわかるかな」

「多分、素で聞いてたなら何かのゲームか小説か、本気で言ってるなら頭を疑いますが、この間のことがありますからとりあえず信じ

ます」

とにかく渉は一番の疑問をぶつけた。

「どうして俺が狙われてるんですか。しかも、えっと、その幻惑？
までかけられて一体何が目的なんですか」

「いや敬語はいいって。それは、あなたも私と同じ超能力者、だからよ」

「えっ」

「彼らがなぜあなただけを狙うか、正確なことはわからない。けど、私が来たのは、君、というかこの町に超能力者がいる、と言われて来たの。」

君だとわかったのはこの町に君一人しかいなくて奴らに狙われてたからだけど」

と、説明が続いていたが、渉はほとんどスルーしていた。

「けど、おれ、超能力なんて一度も…」

「ん？何かない？ふつうと明らかに違うこととか。体験とか」

といわれても全く思いつかない。せいぜいがデジャヴをよく感じるだけで、それも別に特別なことでは…

「そういったことは全く…それに、」

「しっ！」

俺が言おうとした時、学校の一階の半分の部屋が爆発し、もう半分の教室の窓ガラスが全部割れた。

「…本当はあの人と合流するまでここにいたかったんだけど。どうやら学校の中を探し始めたみたいね。屋上にもすぐ来る。話はここまで。こっち来て」

彼女は緊張を含んだ声で渉を屋上の端に呼んだ。今更気づいたが、屋上に張られているフェンスの一部が事故で車がぶつかったかのごとくひしゃげていた。

「なっ、これは」

「ああ、これは私が下から跳んだときにぶつかっただけ」

「ぶつかっただけって…しかも下から跳んだ?!この学校は四階もあるのに!」

「それよりこれからなんだけど。私はここで時間を稼ぐからあなたは自分の家まで逃げて。そしたら眼鏡をかけた男の人が君を迎えに行くから。あとはその人に付いてって」

「逃げるって、まさかここから飛び降りろって事!」

「それは私が下に降ろすから」

「ならそのまま一緒に逃げれば…」

「もう少し暗ければそれでも良いんだけど。ここにいたのはばれるだろうしあれのせいでここからなら逃げた方向がすぐにわかる。あなたが逃げるためには私が時間を稼がなきゃ。」

といって校庭のかがり火を指す。

「なら俺も一緒にここに残る！」

「それはだめ！私はあなたを保護するために来たの。それに能力者相手じゃ今の君はかなわない」

「そんなのやってみなきゃッ！っう！」

渉は急な激痛に頭を抱えた。

これは、さっき、の？

「大丈夫？！まさか、幻惑者！？」

なんて言われてるが、その間にも先ほどのデジャヴの続きが渉の頭の中に流れていく。

「っはあ、はあ、」

どうやら渉はうまく呼吸すらできてなかったらしい。

「大丈夫？……何も変化はなさそうね。とにかく落ち着いたならあなたを下に降ろすね」

そういつて彼女は校庭を見下ろす。

自分も呼吸を整えつつその隣に並ぶ。

校庭にはかがり火と出し物の他に黒く影になつてゐる部分、おそらくクレーターのようなものがあつた。が、それ以外は全く同じ。

その時、後ろの屋上の扉が乱暴に開く。

「みつけたぞー！」

「しまった！降ろす前に見つかった！？」

首だけ振り向く彼女。

「地面殴つて目くらましされて、足跡もなく消えたと思つたらまさか屋上に飛び乗つたとはな！」

ハチミツの後にリンゴが続いて現れた。

少女はくつ、と唇をかみ、再び校庭を見る。

「逃がすかよ！溶塊！」
メルト

ハチミツが熱の塊を構える。

「ごめん」

そして、渉は少女の背中を押した。

彼女はこちらに顔を向け背中から落ちていった。

下は校庭の端で土ではなくコンクリ、さすがにこの高さから落ちれば彼女でも無事ではないかもしれない。

「あつ！てんめ」

そう…

「待て！そいつを捕まえればそれで十分だ」

だからこそ…

渉は後ろを気にせず、身を乗り出し下を見た。

ゴッ！という音とともに下からものすごい熱風がやってきた。

熱風が過ぎたときには彼女は空に浮いていた。

自分の目線より一メートル上の位置だが、実際には彼女は屋上の外

であり、その高さは校舎の五階があるであろう高さである。

渉に向かっていた蜂蜜とリンゴも動きを止め、彼女を見た。

「なんだありや……」

その言葉はそれを見たもの全員が思った言葉だろう。

彼女は確かに浮いているが、その体には赤い膜のようなものがかっ
っており、そして手足の延長とでもいうかのように巨大な手と足が
付いていた。彼女は浮いているのではなくその赤く巨大な足で立っ
ていたのだ。

彼女はまっすぐと屋上の方を見て、手を振り上げた。すると、赤く
巨大な手も同じ動作で持ち上がった。

「くっ、ふざけやがって……それがおまえの超能力か！この化け物
！」

そう叫び構えていたハチミツは熱の塊を投げつけた。
しかし、それは赤く巨大な腕に直撃はしたものの何のダメージも残
せず散っていった。

そして、腕が振り下ろされる。

もし本物の腕、もしくは同じ大きさの物体であれば、校舎が崩れ涉も無事ではなかったろう。

だが、腕が振り下ろされ、屋上にぶつかっても崩れることなくただ熱い熱風となった衝撃波がぶつかってくるだけだった。

「のわっ」

「がっ！」

「ぐう…」

赤い腕に飲み込まれるようになった二人はそうはいかなかった。

ハチミツは屋上に叩きつけられ、リンゴは扉に押しつけられた。

「どうなってんだ…？力が、抜けて…」

「まさか今の一撃でフラスコが空に…？馬鹿な…」

二人は力の入らない声でつぶやいて気を失った。

涉は腕と足が消え赤い膜をまとっただけとなって屋上に降りてきた彼女に話しかけた。

「その、大丈夫か？」

「今のつて私がやったの…？こんな能力初めて使った」

「突き飛ばしてごめん」

「えっ？いや、まああの高さなら落ちても平気だったし、それより何で押したの？」

「なんていうか、押した後に何が起きるか何となくわかってたというか…」

少女の疑問に涉が歯切れ悪く答えていると、

「全く…とんでもないものを見たと思って駆けつけてみればこの有様か」

銃声が響き、もう一つ声が増えた。

黒のロングコートに黒のシルクハット、そしてあげた白い右手には銀に光る拳銃。

「あなたが、最近の変死事件の犯人であり殺し屋…そして今回の計画の首謀者である幻惑者ね」

「元殺し屋だ。あのような殺し方をする殺し屋などいない。するとしたらそいつは愉快犯か、あるいは、狂人だけだ」

そして幻惑者は倒れた仲間の二人を見下ろし、

「しかし、なるべくなら二人だけで成功させてほしかったんだが、

こうなつては仕方がない」

次の瞬間には渉と少女の腕がねじ上げられていた。

「あとはおれが片付けるとしよう」

一瞬で回り込まれたことに二人は驚いた。渉は腕の痛みで動けなかったが、少女の方は捕まれた腕を振りほどくと同時に殴りかかった。

それに対して幻惑者は、まず渉を蹴り飛ばし、少女の拳を両手ではじいた。そして、体勢を崩した少女の腹に掌底をたたき込む。

「かつ！」

少女は驚きと衝撃で口から音が漏れた。

幻惑者はその隙に追撃に入る。

姿勢が低くなっている少女の頭を両手で挟み、顎を膝で蹴り上げ、更に無防備となった喉へと足のつま先をぶち込んだ。

少女の口から再び奇音がもれた。

そして、蹴っても吹き飛ばさずに足先を少女にひっかけ地面に叩きつけた。

「俺の能力が戦闘系ではないと油断したか？それでも殺し屋としての経験があるのだからね」

そう言つて幻惑者は少女を持ち上げようとすると、視界がぶれた。

足を払われた、と気づいたときには既に体制を整え、起きあがつた少女と向かい合った。

「……ふん、普通ここまでやればオーバーキルものだが、さすが、というべきか。聞いてはいたが、頑丈だな」

少女は口から垂れた血をぬぐい、再び近接に持ち込む。

二人がぶつかり合うのを感じて渉は、ひたすら考えていた。

痛て……ただ蹴られたけなのに全然立ち上がれない。

でも、この状況、また見覚えがある。ということはこの後も見覚えがあるはず。だから思い出せ！この後どうなるのか……思い出せ俺！

渉は勘違いをしていた。そもそもデジャブとは、見たり体験した事を経験した『後』に感じるものであって、そもそも経験してないことは思い出せない。

渉はその事を分からずひたすら思い出そうとしていた。が、その間にも二人の戦闘は続き、段々と少女が追い込まれる形になっていた。端から見れば少女が猛攻撃をかけ、長身の男がそれ avoidance しながら合間に反撃をしているのだが、少女の攻撃はすべてかわされ、カウンターで男の蹴り、拳が重く決まる。そのため攻撃をしかけても後退してるのは少女だった。

少女の拳が幻惑者の耳をかすめ、引つ込めようとした時腕を捕まれた。少女が全力で離れようとするが、その前に幻惑者はつかんだ腕の肘を曲がらない方向へ曲がるように体重と力を掛けた。

腕を折られそうなのに気づいた少女は阻止せんと捕まれた腕に力を込め直すが、既にだいぶ反っており、うまく力が入らない。

「っ！このッ！」

少女の身体が赤い膜に覆われ捕まれた腕から赤い再び巨大な腕が現れた。

危険と判断したのか幻惑者は腕を離し少女から距離をとった。

赤い腕の大きさは肩から三メートルくらいと先ほどよりも小さいがこの距離であれば十分脅威となる。

少女はその場を動かず赤い腕で殴りかかった。

男はその攻撃を大きく回避した。

「くっ、まずはその腕をなんとかするでしょう!」

男は苛立ちの表情をし、懷から今までとは違う黒くこつこつい拳銃を取り出し少女に向け二発放った。その銃からは実弾が飛び出し少女は赤い腕でガードしたが、銃弾は赤い腕を通り抜け一発が肩に命中した。

銃弾は跳ね返らず、そのまま少女の肩にめりこんだ。

身体は仰け反ったが何とか悲鳴を飲み込んだ。しかし肩を押さえ動けない。

まずい…

涉はまだ思い出そうとしていた。彼女は先ほど撃たれてから肩を押さえうずくまって動かない。撃った側は腑に落ちない表情で自分の銃を見ていたが、すぐにその銃を少女に向けた。赤い腕はまだ残っているが、消えたり現れたり安定していない。

どうする…どうする!

自分は満足に動けない。ましてや相手は彼女と互角以上に渡り合った男。未だにこの先なにが起こるかもわからない。

だけど…このままじゃ、

くそ……！

自分の前でうずくまっている少女を見て幻惑者は考えた。

…聞いたところによれば実弾は効かないはず、だったんだが。

本当は実弾を種に幻惑にはめるつもりだったが…

まあ良い、同じことだと今の結果に納得し幻惑者は考えるのをやめた。

「まあ良い。次でとどめを刺し、目標を回収するでしょう」

そう言い少女に銃口を向けた。

「ほおずき！」

その時、横から叫び向かってくるものがいた。

「ほおずき！」

渉は少女の名前を叫び幻惑者に向かっていた。

無論、無駄なのはわかっていた。向こうもこちらをちらと見るが銃を構えた姿勢は崩さない。

無駄だとわかってても、彼女を見殺しにはできない…！

向かってくる渉に幻惑者は懷からもう一つの銃、銀色の銃を取り出した。

ここで渉は相手が銃を取り出すのがわかっていた気がする、と感じた。そして自分がその後になにをするのかも。

ああ…なんだ、わざわざ思い出す必要なんてなかったのか、結局思い出せたのは名前だけだし。
でも…

「おまえにはまた眠ってもらおうとしよう。次に起きた時には俺の部下になってもらうとしよう!」

そして、銃声が響いた。

そして、渉は、

幻惑者に近づきそのままぶつかっていった。

「なっ!?!」

幻惑者は驚き、銃こそ落とさなかったが、体勢が崩れた。

そこに渉が背中から飛び乗り腕と足を離すまいと絡めた。

「おまえ、どうして!」

「見てなかったのか?俺もなにも見てなかったし聞いてもいなかったからお前が何をしたのかわからなかったぜ」

渉は銃声になる前に目を閉じ、耳をふさいだのだった。

「催眠術つてのは5時にかわ見たり聞かされてたりでそれを『種』にしてかけるんだろ？ だったらあんたのその銃声、聞かなきゃいいんだ」

「俺の幻惑が、そんな適当な方法で…！ 離せガキ！」

「今だ！ 俺ごと殴れ！ ほおずき！」

幻惑者は涉とのやりとりですっかり少女のことを忘れていた。

はたして、そちらを見ると、既に赤い拳を構えた少女がいた。

「き、さ、ま、ら…！」

「はあああああ！」

赤い腕は幻惑者と涉二人を貫き、更に少女の伸ばした本物の指先が刃のごとく、幻惑者の左胸に刺さった。

「が！ がああああ！」

その瞬間幻惑者は狂ったように暴れ出し、少女は突き飛ばされ、涉も払い落とされた。

「痛っ！」

「大丈夫か！」

「なんとか。君は」

「大丈夫。でも、間に合って助かった」

「いえ、まだ油断できないわ」

「えっ？」

ほおずきの睨む先、渉は信じられないものを見た。

暴れたせいか、ほおずきの攻撃は胸の部分を広く深くえぐる形になってしまった。

普段そんな傷を見せられれば気分が悪くなるだろうが、それだけではない。

明かりはほとんどなかったが、それでも心臓に半ば埋まる形で試験管のようなものがあるのを渉は見てしまった。試験管からは中身が勢いよく蒸発したかのごとく煙が出て、中には透明なのに濁った液体が底にわずか残っていた。

「あ、あれって、」

「あれは彼らが自分たちこそが超能力者だと選ばれたものだという証、“フラスコ”よ」

「そう、この“フラスコ”は…はあ、はあ、能力を使う俺たちの命にして核。そしておまえのその腕……かつ、それは、我々の核であるフラスコのエネルギーを奪いとる力がある。そんな、危険な力を、俺たちが放っておくと思うかつ！」

「ならば、それを知っているあなたをこの場で倒す！」

ほおずきが幻惑者まで一気に近づく。

それに対して、幻惑者は、自分の頭に銃を押しつけ引き金を引いた。その途端、ものすごい光と爆発音が幻惑者の頭から放たれた。

「くそっ自殺!？」

「やられた！待ちなさい！」

ほおずきは光の中心に殴りかかるがしかし、空振りに終わった。

光と音が止むと、倒れた二人と幻惑者が消え、そこにはもう涉とほおずきしかいなかった。

『今回は引く。だがいつか、おまえらふたりは必ず殺すとしよう』

ただその言葉が響き残っていた。

その後はほおずきの仲間だという人が来て、更にはその人が呼んだ人や車などがたくさん来た。

夜も遅く大騒ぎになるはずだが、その騒ぐべき人がいない。その時には俺は治療を受け、半ば無理矢理に寝かされていて後から聞いたが、皆大きな公園や施設、またはデパートの地下駐車場などに倒れているのを発見されたそうだ。

また世間的にはこの事を集団失踪事件として注目されることになった。

なにせ一週間近くの間この町の人間は失踪していた事になっているのである。

つまり、奴らは一週間もの間、俺に幻惑をかけ、町規模で何らかの計画を行っていたらしい。

今もニュースでは現代の「神隠し」事件として、その手の専門家が熱く論じ合い、超能力者たちによる戦いがあった事は一言もでなかった。

そして、あの日の翌日、俺にとって事件は終わってなかった。むしろ、始まってしまった。

俺が仮説治療室から起きると、太陽の光がうすく出ていた。

俺は起きて外にでると、学校の校庭だったらしく、文化祭の跡が残っている中にいろんな人が忙しそうに動き回っている。

…そう言えば文化祭、本当の日付なら一週間前に終わってたんだな。

そんな事を考え、ぼーっと立っていると、後ろから声をかけられた。

「あ、起きたみたいね。ずいぶん早いね」

「……どうも」

昨日、俺のことを眠らした人とは違う女の人だが、白衣、という共通点から同じ医療班の人だろう。女の方は近づいてきて、俺の額に手を当てた。

「ちょっと失礼……ふんふん…心身ともに異常なし、と」

すると、どこかに電話をかけ始めた。

「うん、そう、彼目覚ましたわよ。…そう、わかったわ。じゃ」
といって電話を切り、

「今ほおずきちゃんを呼んだから中で待ってて」

「はい」

俺は仮説治療室の中でほおずきが来るのを待った。

ほどなくして彼女が来た。

「おまたせ。どう？調子は」

「俺は大丈夫だけど。ほおずきは？」

なにせ自分とは違いほおずきは撃たれているのだから。

「私は平気。まだ傷はあるけどもう痛くないし。それよりこれに目を通してくれない」

そいつって何か人名のリストを渡された。

「これは？」

「今回のことで、発見できなかった失踪者のリスト。君の学校の生徒とあと君と同じ名字、といってもそれほどいい名字だったんだけど……」

「まさか！」

「いや、君の家族は無事のはず。君と同じ名字の失踪者はいなかったら」

「なんだ…」

「でも一応見せといた方がいいかなって思って。友達が無事だといいんだけど」

俺はリストに目を通した。

全員で50名弱もの名前が載っていた。町全体の人口からすればほんのわずかだが、自分が狙われたせいでこれだけの人が巻き込まれたのだ。

そう思いながら見ていくと、そこで渉は二つの名前を見つけてしまった。

「嘘だろ…」

「まさか、リストの中に友達が…？」

「おい、これってちゃんと探したのか！町中くまなく探したのか！」

「探したわ。でもどこにも…」

「！俺のせいで、俺が狙われたせいでこんな……」

渉が握りしめた失踪者リストには“伊集院喜美”“佐藤賢二”の名前があった。

一人目

了

一人目「……ほおずき」（後書き）

ということで一話終了です。

改めまして、樹純我純といいます。

読みは、じゅじゅんがじゅんです。変な名前で失礼しました。

とりあえず、ここで書き溜め分が終わってしまいました。話の要所要所は思い付いてるんですが、このあとどう続けるかがネックでした。

でまあ、落ち的につきは涉くんが目的（ネタバレ防止）をもって動く感じで続けたいと思います。

今は暇なのでなるべくはやく載せたいですが、携帯から載せているので打ちづらいですね。

……では、またお会いしましょう!!（おい!!）

二人目「俺の能力は……」(前書き)

どうも、樹純我純です。

今回から二人目(二話目)という事で始まっています。

携帯小説の長さが大体どれくらいかわかってないですが、読んでくださってるかたはどうか長い目でみてください。

二人目「俺の能力は……」

朝、いつものように喜美が家の前で待っていた。

「おはよ、渉！」

「おはよう、相変わらず早いな」

「渉こそ最近はずっと起きてるじゃない」

「まあな、毎日家の前で待たせるわけには行かないからな」

会話をしながら俺たちは学校に向かう。早めに家を出ているため歩くペースは少し遅めでもかまわない。

学校が見えてくる頃二人で話していると、

「ようお二人さん、おっはよう！」

「おっ」

「おはようございます！」

後ろから佐藤が追いついてくる。

本当は声をかけるもつと前に追いついているのだろうが、気を使つて学校に近づくまでは話しかけてこないらしい。恩着せがましくも

本人が言ってきた

そして、学校の校門を三人で通る。

そんないつもの光景。

「……………ん」

渉は上下に激しく揺れるのを感じて目を覚ました。

今は夕方。

この季節、すでに空のほとんどが黒く染まり夕方チャイムは鳴り終わった後だ。

渉は今まで夢を見ていたのを思いだした。

今のは、普通の夢だよな……いや、本当なら今頃あんな風に過ごしてるはずだ。喜美、佐藤…

俺は五日前の朝方、友達二人が事件に巻き込まれ行方不明になったのを知った。

他にも行方不明者はいたため、二人だけに注目されることはなかった。ニュースではこの現代の「神隠し」を集団失踪事件として捜査することを警察が発表した^が、俺はその事件の真相を知っている。

行方不明者たちは皆“超能力者”と名乗る連中にさらわれたのだ。

俺もそいつらに狙われていた^が、そこを“超能力者”の少女―^{かみやま}神山^{ほみやま}鬼灯^{きとう}に助けられた。

彼女が奴らを倒したが、逃げられてしまい喜美と佐藤、他50名も^もの人がさらわれてしまった。

正直、まだ喜美たちをさらった超能力者と鬼灯たちの超能力者がどう違うのかわからない^が俺は喜美と佐藤を捜しだすために鬼灯たちについて行くことに決めた。

「あ、起きてた？」

一つ前の席から神山がのぞいてきた。

「あ、ああ」

顔が近い…。

今まで気にしてる余裕がなかったけど、鬼灯がもしうちの学校の生徒だったら人気になっただろう。特に佐藤とか。

渉はそんな事を考えていたのでつい生返事になってしまった。

「もうそろそろ着くから降りる準備しといてね」

といって、座りなおす。

渉たちは現在鬼灯たち超能力者所有のバスで移動していた。渉たちの他にも数人乗っていたが、どの顔も疲れ眠そうにしている。

目的地に着いたのか、バスは右折し建物の中に入っていく。建物は普通のどこにでもあるビルでバスはそのまま地下駐車場へと入り停車した。

「ここが目的地？」

「そ、私たちの秘密基地、なんてね」

鬼灯は冗談めかして言って先にバスを降りた。渉も続いて降り見回すが、まさに普通の駐車場。

あるのも守衛室の隣にある駅の改札のようなゲートだけである。

しかしバスを降りた人は全員そのゲートに向かつてる。

「あそこから入るんだよ。ちょっと待ってね、今カード借りてくるから」

そういつて鬼灯は守衛室に向かつていく。

中にいる人と話し、戻って涉に免許証サイズのカードを渡した。

「とりあえずそれを使って。明日には自分のカードができあがるから」

「わかった。でもなんていうか思ったより」

「思ったより普通？」

「ああ、なんていうか、もっと秘密組織っぽい物を想像してた」

そう言いながら涉はゲートを通りその先の扉を開けた。

扉の中は広い空間だった。

まず扉の先、飛行機の搭乗口のような壁の部分がガラスになっている廊下がのびていた。

まるでなにかのSF映画で見たような場所だった。

扉を入れて右側にはロングテーブルがたくさん並び左側はカウンターやロッカーらしきもの、更には大きな電光掲示板などがある。

そして壁はもはやエレベータで埋められ、そこかしこにガラスの柱が数本たっている。人が少ないせいかな余計に広く感じる。

「想像してたとおりのような場所でしょう？」

渉が絶句してると後ろから鬼灯が声をかけ渉を抜かして行く。

廊下の先はガラスの柱の一つにつながっているらしい。

「……」

俺はさっきまでの駐車場と今の光景とのギャップに声が出なかった。

他の人は既に下へと降りている。どうやらガラスの柱はエレベータだったらしい。

思わずワクワクしてしまった。

エレベータはすぐに着き改めて空間を見回す。すると後ろから声をかけられた。

声の人物は眼鏡をかけていて、幻惑者と同じくらい長身だったがこちらの方が細長い感じの体格だった。

「やあ、ご苦労様。ここまでの長旅大変だったね」

男は笑顔で話しかけてきた。

「あ、皆堂さん！バスに乗ってないと思ったら先に帰ってたんですか」

「そう、いろいろと準備があつたからね。
君が渉君だね。僕は皆堂満、一応ここの責任者、ということになるから今後ともよろしく」

と言って、渉に手を差し出す。

「どうも、土岐野渉ときのわたるです。こちらこそお世話になります」

といって渉は手を取り握手した。皆堂は申し訳なさそうに、

「すまなかつたね、先日は間に合わなくて危険な目に遭わせてしまつて。鬼灯くんから連絡をもらつてすぐに向かったんだけど邪魔が入つてね」

「いえ、俺はほとんど何もなかつたから大丈夫です」

「私も何だかんだで無事でしたよ。それに自分の能力も発揮できたし」

「いや、鬼灯君は結構な重傷だとおもうよ…？」

とりあえずこれから当分、渉君にはここに住んでもらい自分の能力^{ちから}について学んでいってもらってから何かわからないことがあったらいつでも相談に乗るからね」

「あの、まずはつきりさせておきたいことが。俺、ここへ来たのは友達を捜すためなんです。だから都合がいいのは承知なんですけど」

「超能力については関わりたくない？」

「友達のことは聞いてるよ。もちろん、その事に関しては協力するし友達と再会できたらここを去るのも君の自由だ。ただ、友達が見つかった場合、君はどうする？」

「それは」

「もしピンチな状況だったら助けたいよね？」

「渉は迷うことなく頷く。」

「けど、その時本当に助けられる？」

「は？当たり前です！なにいつ」

「本当に？君はもう見たよね？僕たちがどんな存在か、どんな戦いをしてるか。君はその中に飛び込んで行ってさらわれた友達二人を救い出すことができる？」

「っ！……………」

「さっきも“なんにもできませんでした”って言ってたけど、救いた
い人が目の前にいるのに“なんにもできませんでした”の君で助けら
れるのかい？」

「……………」

「でもね。僕はまだわからないと思う。そんな君はこないだ、鬼灯君を助けたいと思って結果的に助けられた。そして君自身の能力^{ちから}をわずかながらも発揮してね」

そこまで言うとは皆堂は鬼灯の肩に手をおく。

「まあさすがに鬼灯君みたいに強くなれーっとは言わないよ？それに君が超能力についてよく思っていないのもわかっている。それでももしもの時、君が悔いることがないよう能力を発揮できるようになつた方がいいかなーとお兄さんからのアドバイス」

渉は軽く考えていた自分を恥じた。

なんでそんな簡単なことも考えなかったんだ…

渉が何も言わないので鬼灯が助け船を出す。

「渉くん！そんなに重く考えなくても良いんだよ！？別に皆堂さんだつて責めるつもりで言つた訳じゃないし」

「そ、そうだよ！？鬼灯君の言つた通り責めたわけじゃないしむしろ巻き込んでしまったこっちも悪かったしね？」

「それでも、俺、全然考えも覚悟も足りなかったです。俺の方こそすみませんでした」

渉が頭を下げると、

「そうだ、渉くん。啓大さんに会おう」

鬼灯が思い付いて提案した。

「啓太くん、いるかな」

そして広間の奥、どうやらロングテーブルの辺りは食堂として使われるらしかった。

「ここは食堂ね。このテーブルが全部埋まることは滅多にないけど、食事の他にちょっとくつろぎたい時とかはここがおすすめだよ」

と、鬼灯が補足をいれる。

皆堂が名前を呼ぶと、調理場のような場所から一人の青年が出てきた。

見た目は二十歳くらいで場所にふさわしくコックの姿だった。

「あ、皆堂さんお久しぶりです。夕飯にはまだ早い気がしますけど何か作りますか？」

「いや、それはまた今度で。こちら、今日からここに加わるメンバー、ときのわたる土岐野渉君」

皆堂は大げさに両手をぱらぱらと振る。

「土岐野渉です。よろしくお願いします」

「よろしく、僕は春原啓太^{はるのけいた}。今はまだ見習いだけど小腹が空いた時とかここに来れば何か作ってあげられるよ」

「彼はいわゆる火炎操作^{パイロキネシス}だけど、別に戦ったりしてるわけじゃなくてこうして料理を作ったりしているんだ」

「僕の炎はそんなに大きくできないですから。でも料理したり作り置きをすぐに温めたりするのには便利なんだ」

「といって指先に火をつけて見せてくれた。」

「そういうこと。ここではこうして皆自分にあった能力の使い方をしながら学んでいくんだ。だから涉くんにしても急に未来予知をしるーとか言わないからさ。どう学んでいくかは君次第」

「私も自分から戦い方やこの能力の訓練を受けたんだよ」

「そうだったのか。てつきり日々能力の開発とか鍛えたりするのかわかっていた」

「能力の開発ね、できたら便利だよー」

「そう言えば頼貴もそんなこと言ってませんでしたか？」

「あ、そうか。涉くんを見てるとなんか似てるなーと思ったら頼貴君に似てるんだ！」

「誰がどう似てるって」

二人目「俺の能力は……」（後書き）

ということとで続きます。

二話目では新キャラをどんどん出していくことになりますがここで区切ると二話終わりまでかなり投稿数増えますね…。

あんまり多いと飽きられてしまうと思うのでなるべくまとめて投稿しますが、最後までついてきてくださると嬉しいです。

読んでくださりありがとうございました。

二人目続（前書き）

どうも、樹純我純です。

久々の更新です。読んでくださっている方お待たせしました。

二人目続

突然不機嫌な声が割り込んできた。

声の方を見ると、男の割りには髪は長く、キーチェーンにピアス、指輪などたくさんのアクセサリーをつけた男子がいた。

年は渉と同じくらいみえる。細いがそれなりに筋肉のついた体格で身長は高くないが髪型のせいで高く感じる。

「やあ、頼貴君！ちょうど君のことを話そうとしたんだよ。渉君、しばさきよりたか彼は柴崎頼貴君。君の一年下かな」

笑顔の皆堂に対して頼貴は全く表情を変えず、渉を見ている。

「おまえが渉か？」

喧嘩腰な言い方に少しむっとした渉は

「そうだけど」

何だ、と言おうとすると、いきなり紫色の光に囲まれた。

渉は触れないようつま先立ちできょうつけの姿勢をとらざるを得な

かった。

「な！」

「よくも鬼灯を突き飛ばしやがったな。許さねえ」

「ちょ、頼貴！涉君動かないでね！頼貴！今すぐ止めなさい！」

「できねえな。こいつは助けもらう立場でありながら助けようとした鬼灯を突き飛ばしたんだぜ」

「あんなことで私が怪我する訳ないでしょ、それよりも何で知ってるのよ！また勝手に人の記憶履歴レポートみたでしょ！」

「鬼灯の記憶履歴なんだから俺が毎回チェックするのは当たり前だろ」

「もうやめてって言ったでしょー！だいたい見たなら状況ぐらいわかってるでしょ！」

「もちろん、鬼灯が逃がそうとしているところを…」

「そうじゃなくて」

「おい！いい加減何とかしてくれよ！」

揉めているうちに涉はつま先立ち状態で限界が来て足が震えていた。鬼灯は紫の光の根本を蹴り飛ばした。

一瞬、バチィ！とはじけるような音がして光は消えた。
はあ、と息をつき涉は座り込んだ。

「ごめん、大丈夫？」

「はあ、何だったんだ…てかいきなり何すんだよ！」

「それはおまえだ！鬼灯を突き飛ばしておいて。おまえがここで暮らすなんて絶対許さねえぞ」

「あれは俺も悪いと思ってる！」

「思ってるならなおさら許せるか！一回落ちろ！」

と、頼貴は渉に対してまた紫の光を放とうとする。

「なにを騒いでいる」

大きくはないが低く落ち着いた声が響いた。

頼貴が動きを止め、皆がそちらを見ると、先ほどの声に似合わない金髪碧眼の小柄な少女が立っていた。

「ずっきー！帰ってたんだ、おかえりー」

と言って少女は鬼灯に抱きついた。

「ベック！久しぶり、こっちに来るって聞いてたけどホントだったんだ！」

きゃー、と二人は再会を喜んではねている。

「鬼灯、久しぶりだな」

「^{マスター}師匠！お久しぶりです」

「もうマスターと呼ばなくていい。最後の訓練でお前は一人前だということを実証した。だから師としてではなく対等の立場だ。敬意は要らん」

「そうでしたね。ウォルフさん、改めてお久しぶりです！」

ウォルフはうなずいた後、渉と頼貴の方を見た。

「ライキ、その辺にしておけ。加減のわからん相手にうっかり死なれても困る」

さらっと怖いことを言ったウォルフ、という男がさっきの声の主だった。

身長はやはり高くスーツを着た上からわかるほどに筋肉のついた体格で、短めの茶髪であり目が細かった。

「渉、といったか」

「はい！」

「すまん、ライキは短気な奴だが仲間としては頼りになる。仲良くしてやってくれ」

「は！？誰がこんなヘタレ卑怯者と仲良くするか！」

「なっ！こつちだつてそこまで言われてわざわざ仲良くしてやれるか！」

「んだと、上から目線で上等じゃねえか」

「男だつたら素手でこいよ、能力に頼らずに」

と、売り言葉に買い言葉となつてにらみ合う二人。

「…仲良くしろとは言わん。せめて信頼できるようになるんだな」

ウオルフはそんな二人を見てぼそつと言ひ直した。

「はいはい！喧嘩はそこまで。四人は明日朝早いでしょ？渉君もこれからやることからそこまで」

と、皆堂^{かいどう}は渉と頼貴の間に入り込み、二人を押し止める。

と、そこへ鬼灯とはねていた少女、ベックが来た。

「ラーイキ、イライラしてると放電してばてちゃうよ？」

「しねーよ！しかも“らいき”じゃなくて“よりたか”だつて何回言えばわかんだよ！」

しかし、彼女は無視して、その碧い目で渉を見つめ、話しかけてきた。

「渉っていつの？」

「あ、ああ。ときのわたる土岐野渉」

「トキノトキノ……じゃあトツキーだね！これからよろしくねトツキー！」

「トツキー?!」

「ベックはね、必ずニッケネームを付けてくれるんだ。ここの人みんなにつけてくれるよね」

「そつだよ。だから今日からここで暮らすトツキーもよろしくね」
そう言つて渉とベックは握手した。

「こつちこそよろしく。日本語ぺらぺらなんだな」

「うん、日本大好きだったからいっぱい勉強したんだ。ライキにも教わったんだよ」

「へえ、意外だ」

渉は横目で頼貴をみる。

「何がだ」

再び喧嘩になりそうになるが、皆堂が言葉を挟んだ。

「じゃあ自己紹介が一通り済んだことだし、夕飯前に渉君の部屋に案内しようか」

「じゃあ私も」

「鬼灯、お前は俺たちと明日のことについて静婆^{しず}様の所に行くぞ」

「えっ今からですか…分かりました。じゃあ渉君、また後で」

そして鬼灯はウォルフたちと一緒に、渉は皆堂の案内でエレベーターへ向かった。

「生活エリアはこのすぐ下の三階分が全部。専用のエレベーターがあるからそれを使ってね」

そういつて皆堂は三階のボタンを押す。エレベーターはすぐにつきちン、と音とともに扉が開いた。

開いた途端に明かりがついた。廊下はV字型になるように左右へと広がっていた。

「ここが男子フロア。三階が女子フロアで、二階が共通フロアになっているから。えーっと、渉君の部屋は、と、こっち」

皆堂は右の廊下へと歩き、渉もついて行く。

エレベータから五番目の扉の前で止まった。皆堂は鍵を取り出し、扉を開けて渉に鍵を渡す。

「はいこれ鍵渡しとくね。何かあったら中に電話あるからそれで連絡してね。とりあえず荷物が届いてるから確認とかするといいよ」

じゃあねー、と皆堂は手を振りエレベータへと向かった。

部屋はベッド、本棚、机が既にそろっていて、部屋の奥にトイレ、風呂があるらしい。

部屋の中央には自分の荷造りした段ボール箱が積んであった。

「さてと」

渉は一番上の段ボールを開けた。

「村の神様？」

「そうだ、いわゆる“現人神”あらひとがみ”というやつだ」

薄暗い部屋の中、鬼灯の疑問にウォルフが答える。

部屋は四隅に紫色のカーテンが垂れており、真ん中にはテーブルが一つ、そしてその上にはプロジェクターがおいてあった。壁には農村の様子がわかる映像が流れていた。

鬼灯、頼貴、ウォルフ、ベックの四人に対してテーブルを挟んで座っている老婆が座っていた。老婆が目を閉じたまま語る。

「左様、年は分かんが、若い娘の姿をして、頭と腰にそれぞれ獣の耳と尻尾を生やした者が人々に崇められておる」

老婆はそこで口を閉じ、代わりに部屋の暗闇から現れた若い男の助手が続ける。

「そこで調べたところ、穂路端村^{ほろはた}という場所が浮かび上がりました。ここは、山と山とに挟まれた場所で片方の山、鷲尾山^{わしお}は登山でそこそこ有名です。

が、その登山口の反対側にあるらしく人も少なく閉鎖的な村でした。また、古くから耳と尻尾のついた獣の神を祀り、狐や狸、イタチなどを信仰の対象としていたそうです」

「んー、でも神様として扱ってもらってるなら平気そうですね。静婆様の目って“助けを必要とする者が見える”んですね？」

「まあ。いつものごとく、どんな危険かはわかんが。あるいはこないだの少年のように…」

「確かにここ最近日本での『彼ら』の活動が活発になっています。なので今回も『彼ら』が関わっている可能性があります」

「そしてそのために俺たちが呼ばれたんだろ。鬼灯を守るために」

頼貴が言葉を挟む。

「ええそうです。あなた方には鬼灯さんの村までの護衛と村近辺の調査、そしてそのまま他の任務へと向かってもらいたいのです」

「望むところだ」

「では必要な物はこちらで準備します。何か質問はありますか？」

すると、静婆の手が上がる。助手の男は一拍空けた後、

「はあ…なんですか」

「気に入らん」

「何がですか」

「この機械じゃ」

と言って、テーブルの上のプロジェクターを指さす。

「せっかく部屋を占い師風にしたのにこれがあって台無しじゃ。普通は水晶を置くもんじゃ」

「…後で置きますよ」

「今置かんでどうする！鬼灯たちがおるときに置いておかなきゃだめじゃ。のう？」

と静婆は鬼灯に同意を求める。
急に振られて鬼灯は、

「あつえ、ええとその…（でも静婆様には水晶なんか必要ないけれど本人のモチベーションや気分によって能力が左右されることもあるからってプロジェクターは確かに不釣り合いだけど…）」

考え込んでいた。

「シズ婆様って形からはいるんですね」

ベックが相づちにならないような相づちを打つ。

「そうなのじゃ！だからのう、本当は始める前に言っておきたかったんじゃない…」

「では、解散で」

静婆が助手に文句の続きを言ってる所をウォルフが会議を閉じた。

若い助手はいつものことらしくウォルフに一度目を向け苦笑し静婆の対応に戻った。

「これで全部か」

最後の荷物を出し終えた涉はふう、とため息をついて部屋を見渡した。

荷物はそう多くはなかったが部屋の家具の位置なども少し変えてい

た。

時計を見ると案外時間が経っていた。

「そろそろさっきの場所に向かうか」

部屋を出ると、隣の部屋からもちょうど人が出てきた。

向こうも気づいたらしくこっちを見てくる。

身長は160もないくらい小柄で肌は白く中性的な顔立ちな少年だった。男子フロアで会ってなかったら間違いない女の子と思っていただろう。

「えっと、今日からここで暮らすことになった土岐野涉っていうんだ。よろしく」

「……よろしく」

声も声変わりはまだらしくやや高めな感じであった。

「名前はなんて言うんだ？」

さかがみかある
「…坂上薫」

もう話す気はないのか、坂上は渉の前を通り過ぎ廊下の奥へと向かっていく。

「エレベータに乗るんじゃないのか。そっちは行き止まりだろ？」

「別に、下に行くだけだから階段を使っただけ」

「下っていつと…」

「共有フロア」

「なら、俺も一緒に行つていいか。見学ついでに」

「まあ、いいけど」

二人は並んで廊下の奥にある階段を降りていった。

下のフロアはソファ、テレビ、自販機などがそろっていてテレビ前にあるテーブルの上には誰かが置いていったのか雑誌があった。

「なんていうか、くつろげそうな場所だな」

「そういう場所だし、ここは。意外ですか」

「いや、まるでどっかの寮みたいだと思って」

ふーん、と坂上は適当に相づち、スナック菓子の自販機に硬貨を入れる。

二人は向かい合って座った。

菓子のサクサクと食べる音が続く。

「坂上君は」

「君つけないで。呼び捨てでいいから」

「あ、ああ」

「それと僕の名前は名前で呼ばないで」

「わ、わかった。…それで坂上は何の能力をもってるんだ？」

坂上が手の動きを止めて渉を見る。渉はその年下の少年の目線にたじろいだ。

「いや、ここにいるなら能力者なんだろうなあ、と思って答えたくなければ別に…」

「……わかんない」

「は？」

「僕の能力は、よくわかんないんだってさ。まだ能力も不安定だし」

「そうなのか。俺もさ、自分の能力がわからないどころか本当に超能力者なのかさえわかんないうちにここに来てさ」

「……………」

「まあさすがにこれで勘違いでしたって事はないと思うけど」

「仕方がなく連れてこられたとか」

「あー、少しそうかな。できれば自分の能力がどうとかがってのは巻き込まれなくなかったけど。けど、俺のせいで巻き込まれた大切な友達がいるんだ。その二人を探し出すまではここに居続ける」

「……………」

「って急になに言っただろうな俺」

坂上は何もいわず立ち上がって今度はエレベータへ向かっていく。

「食堂、行く？」

渉もエレベータへ乗った。

「あ、渉君！」

食堂へ来ると先に来ていた鬼灯が渉たちに気づいた。

「今呼ぼうかと思ってたんだけど坂上、と一緒だったんだ」

「部屋出るときにちょうど会ってたさ」

「…ども」

「でも珍しいね、食堂で食べるなんて」

「いや、冷蔵庫空だし買い置きもなくてそれで仕方がなく」

仕方がなく、と言った坂上に鬼灯は、

「そっか……………」

「さ、坂上の部屋には冷蔵庫があるのか」

「そうだよ、坂上さんは自分で料理してるんだよ。だから滅多に食堂に来てくれないし」

「…あんまり騒がしいのは苦手ですから」

「そっか…………でも今日は一緒に食べようね!」

坂上はうなずくとカウンターに並びに行く。渉も並ぼうとするが鬼灯に呼び止められた。

「渉君、その坂上さんについて聞いた?」

「ん?ああ、自分の能力がわかんない事なら本人から直接聞いたけど」

「そう…」

「なんか俺と同じだな、って思ったんだけどさ。それがどうかしたのか?」

「なんでもないの。あ、ちなみに坂上さんは渉君と同年だからね?」

「えっ、そうだったのか。てっきり小学生くらいかと思ってた」

「それ、本人に言っちゃだめだよ…」

鬼灯の会話にどこか引つかかる所があったが渉は同い年だという方が気になって気づかなかった。

その後は頼貴、ベック、ウオルフを加えた六人で夕飯を食べ、少し話したり（喧嘩しかけたり）して過ごし、そこでそれぞれの部屋に戻ることにした。

「じゃあまた明日ね」

「鬼灯、明日は早いからこいつには会わねえだろ」

「別にいいだろう、また明日」

鬼灯、ベックとはエレベータで別れ、頼貴に嫌みを言われたが無視し、頼貴、ウオルフとは廊下で別れた。

「じゃあな、お休み」

「お休み」

坂上とは部屋の前で挨拶をして別れた。

部屋に帰ってやることもなかったので風呂を浴びてさっぱりした後、眠れるとは思わなかったが、早々に布団に入った。

意外なことにすぐにまぶたが重たくなってきて夜はあっさりと一日目を終えた。

次の日。

朝に電話で皆堂さんからのモーニングコールをもらい、教えてもらった部屋の前についた。

時間は10時5分前、渉はノックしてから部屋に入ると、すでに二人がすわっていた。

男女一人ずつで二人とも渉と視線があった。

「ここって、説明会みたいな場所であつてるかな」

渉が聞くと奥に座っている男子が笑って答えた。

「そう、今の状況とこれからのについての説明会”であつてるよ」

短髪を金髪でたたせているが常に笑顔で好青年の印象を与えていた。年は自分と同じくらいか、と思っていると、

「俺は水無瀬宗次^{みなせそうじ}、ここへは一週間前に来たばかりなんだ。よろしく」

「よろしく。俺は土岐野渉、昨日来たばかりなんだ」

「そうなのか。なら」

その時扉が勢いよく開かれ壁にぶつかってバン！とものすごい音がした。

三人が三人ギョツとしてみると、少女がひとり。

「すいません！遅れました！！」

それだけ言うと少女は膝に手をつきゼエ、ハア、と息をつくだけになった。

「いや、まだ遅刻じゃないと思うよ」

渉がそれだけを言うと、声が出てないが、うそ？なんだあゝ、と言ったと思われその場にペタンと座った。

「や、みんな揃ってるね」

「はひっ！」

続いて皆堂が到着して説明会が始まった。

四人の男女が山道を歩いている。二人の少女に一人の青年、そしてスーツ姿の男が一人。風景と組み合わせがちぐはぐな四人だがそれを気にする者はいない。

青年、頼貴と同じくらいの年の少女、鬼灯がウォルフに尋ねる。

「本当にこの先に村があるんですか」

「そのはずだ。多分、この道は狭く車も通れんから普段は使われてないのだろう。都合が良いと言えば良いが」

「？都合って」

「つまり、あいつらのことでしょ」

と、ベックが言うと四人の前に男二人が現れた。

二人は中華風の装束のようなものを着ていて、片方は白一色、もう片方は黒一色という明らかに浮いている格好をしていた。白い方が口を開く。

「俺たちに気がついていたか」

黒い方が口を開く。

「さすがだ、と言いたところだが」

白い方、

「お前らはすでに袋のネズミ」

黒い方、

「おとなしく降参してもらおうか」

ここで頼貴がイラついた声で口を挟んだ。

「ったく、白黒白黒…うるせいやつらだ。交互にしゃべってんじゃねえぞ」

「条件は」

「はあ！？何相手に会わせてんだよ」

「待つてライキ。相手は後三十人くらい隠れてる。こんな人数を動かすってことは何か目的があるはず。それが何か聞かなくちゃ」

ベックは小声で頼貴に理由を話した。

ち、わかったよ、と頼貴が黙ったところでウォルフの問いに白が答える。

「条件はただひとつ。その娘、ほおずきとやらをこちらに渡せ」

「そうすれば他三人は生かして返してやろう」

黒が引き継いで答えた。

「私？」

「そういうことが」

「やっぱりね」

「諸々引つくるめて言いてえことはあるが、ウォルフ、もういいよな？」

「無論断ればどうなるかはわかつ」

「断らせてもらつ」

ウォルフが白い方の言葉を遮っていった。

再び白、「いいだろう。なら」

黒、「全員ここで殺してやる――！」

周りの茂み、崖から炎、氷、雷が一斉に飛んできた。

「さて、まず自己紹介からしようか。じゃあ宗次くんから」

「俺は水無瀬宗次。高校一年、さっきも言ったがここには一週間前に来たばかりだ。改めてよろしく」

宗次が自己紹介をしたあと、渉の先にいたもう一人が立った。

「次は私ですね。はじめまして、私は風間愛風かざまあいかけといいます。高校で

は三年生で多分、この中では一番お姉さんですね。
名前の通り風が好きで少し操れるんですよ。これからよろしく願
いしますね」

と言って席に着いた。髪は茶色。今は制服を着ているが雰囲気落
ち着いていてどこにもくお嬢様っぽい感じがする。

「じゃあ次は涉くんで」

「はい、俺は土岐野涉。とぎのわたる 水無瀬と同じ高校一年でここへは昨日来た
ばかりだ。あとは、自分の能力とかよくわかってないけどこれから
よろしく」

「うん、そうだね。君たちの能力についてはこれからだからね。ま
あ心配することはないよ。最後にかなちゃん、よろしく」

はい…、と自信なさげに立ち上がったのは先程ドアを思いっきり開
けた少女。眼鏡をかけていて髪は結わいて二つに分けている。そし
て眉毛が申し訳なさそうに下がっていた。涉と目があつたがすぐに
そらした。

「えと…名加那かなです。なかな 中学二年です。………よろしく願
います！」

「はい、じゃあ自己紹介も終わったとこだし今度は僕達について、
簡単に説明するね」

「なっ、ばかなー!!」

「ありえん…」

その場に立っていた六人の内、白と黒の中華風装束の二人が愕然と
していた。

若い男女の集団、総勢三十名が倒れていた。

そして、その中心に四人、鬼灯たちが立っていた。

「これで全部か？」

「あとはあいつらね」

「すごい…」

鬼灯は今見た光景に改めて仲間たちの強さを感じた。

数分前！。

鬼灯達めがけて様々な攻撃が飛んできた。

しかしこれは四人ともかわしきった。が、すでに一人一人が五、六
人の敵に囲まれていた。

これはやるしかないわね…鬼灯が構えると、

「鬼灯には手を出させはしねえ」

と、鬼灯を囲んでいた敵が紫電に包まれた。

「頼貴！？」

と頼貴の方を見ると、頼貴の周りの敵も倒れて痙攣していた。

と、次は目の前をがたいの良い男性が吹っ飛んでいった。

そつちを見ると他もまとめて飛んで倒れていて、ウオルフが左手を突きだして止まっていた。

「左拳『シヨットガン』…この程度とはなめられたものだな。」

ウオルフが睨むと、たじろいた白い方が叫ぶ。

「くそ、そのチビだけでも捕まえろ！」

ベックを囲んでいた敵が同時にベックへと距離を詰める。

「そんなんじゃないよ」

するといつのまにかベックは鬼灯のとなりに来ていた。お互いの顔を付き合わせる事になった敵を頼貴がまとめて紫電に包む。

「くつ、話が違っ！所詮ガキのお守りばかりしている集団ではなかったのか?!」

「確かに俺達は身寄りのない子などを引き取る慈善団体でもあるが、それだけだと思ったのか？」

「まあ二ホンは最近戦力増大したばかりだしね。私たちもそのために来たし」

「…そして、その中で君たちのような超能力者をみつけるのが目的でもあったんだよね。ここまでで何か質問ある人はいるかな？」

はい、と宗次が手を上げる。

「その割りには人が少なくないですか？もつと色々な超能力とか見れると思ったんですけど」

「それはそういった子が見つかるのは希だし、なにより問題がなければこちらからは干渉せずにそのままにしておいたんだよね。頼貴君や鬼灯君なんかは逆に珍しいんだよね」

「それは俺、達もですか？」

渉は自分がここへ来た理由を思いつつも訊いた。

「君たちの場合は状況が状況だからね。最近はそうもいけなくなっただんだよね」

「さて、他にも聞きたいことがあるんだがな」

白と黒は目を閉じ静かに笑いだした。

「……ふっ」

「ふっふっふっ……」

「まったく気持ちわりいやつらだぜ。今度はなんだ」

『やはり、奥の手はとっておくものだな!』

ハモった…

と、鬼灯が思うと、地面が盛り上がり人らしきものが出てきた。

そいつは全身包帯だらけての先からそれぞれ三つ、両手で六の鉤爪^{かぎ}がついていた。

二人目続（後書き）

とまあいかがでしたか？

相変わらず区切る場所が下手ですね。

登場人物が急に増えた感じになっていると思います。

更新は不定期となっています。

ただ、そのうち他の話も同時進行させていただければと思っています。

それでは、ありがとうございました。

二人目続2（前書き）

前回に続き二人目（2話）の続きその2です。

こちらを読む前に前のお話を読むことをおすすめします。（
うか読まないとわかりません）とい

二人目続2

「また変なのが出てきたぜ」

頼貴があきれ気味に肩をすくめる。

「余裕があるのも今のうちだぞ？」

“マミー”！お前の能力を発揮しろ！

「こいつも超能力者か！」

包帯人間はその六爪を地面に突き刺した。

同時に地面から包帯が飛び出て周りに倒れていた敵能力者の体に巻き付いていく。

「うあ……………」

「あああ……………」

包帯に巻き付かれた者たちがうめきながら次々と立ち上がる。

「げっ、ゾンビか！？」

「頼貴、どちらかっていうとミイラよ。でもどちらも死者から蘇っているわけだしはっきりと区別する基準でいうとやっぱり包帯が巻

いてあるかそれとも…」

「鬼灯よ、考え込むのは後にしたらどうだ」

ウオルフの一言でハツと鬼灯が自分の思考から戻ってきた。

「どうだ！これがマミーの超能力、アンデッド・マーチ不死者行進だ！」

「けつどのみち雑魚は雑魚だろうが」

頼貴が再び紫電を包帯集団に放つ。が、

「むだむだ」

「こいつらはマミーが操っているから例え貴様らに攻撃されようと
も何度でも襲いかかる」

「さすがに無限に湧き出る雑魚には勝てまい」

「今さら後悔しても遅いがな」

と、白黒白黒と交互にしゃべり四人をニヤついた顔でにらみつける。

一方、鬼灯たち四人は一ヶ所にまとまり動かない。いや、すでに立ち上がった不死者たちに囲まれて動けない。

それを諦めととったかの、白黒揃って腕を振り上げ、

「マミーよ、」

「やつらにとどめの合図を」

と言って同時に振り下ろした。

そして、包帯人間、マミーは頭からのけ反り吹っ飛んだ。

場が沈黙に包まれる中、ウォルフが構えたまま口を開く。

「右拳『マグナム』：不死身だろうが操っている本体を倒せば意味がないだろう」

その言葉と同時に包帯が緩み操られていた敵達が再び倒れた。

白黒の二人組は今度こそ策が尽きたのか四人に背を向けて逃げ出した。

「はあ……しかたがない。頼貴、白い方を頼む」

「りょーかい」

返事をする、頼貴は指輪を一つゆつくりと振りかぶって投げ、ウォルフは体が地面と平行になるまで片足を上げ、その場で蹴りを放った。

紫電の槍と蹴りによる衝撃波が逃げた白黒を追い、槍が白に、衝撃波が黒に、それぞれの背中に直撃した。

ウォルフは何事もなかったかのように足を下ろし、

「さて、ここからは別行動を開始する。頼貴とベックはここに倒れている敵をまとめておけ。俺はあの白黒を拾ってくる。鬼灯はこのまま村に向かい例の少女のもとへ迎え」

「わかりました、じゃあねベック、頼貴」

「おう、気を付けてな」

「またね、ズッキー」

鬼灯は頼貴、ベックとハイタッチして一人、穂路端村ほろはたへの道を走った。

「やつらと戦ってるのはなぜですか？」

説明が一段落ついたところで再び宗次が質問する。

「それは、自分達の身を守るため」

「身を守るため？」

「そう。彼らの目的を果たす上で僕たちが邪魔だから、らしい」

「彼らの目的？」

渉以外も首をかしげている。すると、階堂が苦笑気味に答えた。

「世界征服、だよ」

「せかいせいふく、ですか？」

名加那かながあまりにも予想外だったのかそのまま棒読みで言った。

「そうだよ。今時小さい子ですら言わないようなことを彼らは本気でやろうとしている。しかも、困った事に彼らにはそれを成すだけの力があるんだよね。」

これは最近手に入れた情報なんだけどね、これから仲間をどんどん増やし、最終的に人工的に造り出した超能力者達をまとめ上げその頂点に君臨するつもりらしい。

「といっても彼らの下っ端からの情報だから信憑性は低いんだけどね」

渉はそれだけが目的じゃない気がすると思った。なら、二人がさらわれた理由は一体…？

「さて、眠くなる説明会はこれで終わり！次は体を動かそうか！」

次に涉たち四人は階堂のあとについていき、一通りの体力テスト、そして心理テストを受けさせられた。

体力テストに関しては宗次が一番で涉は運動不足を感じた。

心理テストは四人とも体を動かした後だったので終わった後更にぐったりしていた。

「ふむふむ、ほうほう……」

階堂は答案用紙を見ながら何やら呟いていたが、見終わると顔を上げ、

「お疲れさま、じゃあ最後に皆がどんな能力を持ってるのか、確認しようか」

「ここが穂路端村……」
ほろばた

鬼灯は単独行動を始めて目的の村に着いた。

隠れつつ様子を見ようとしたが、村には人のいる様子が全くなく、道は舗装されてなく土道で、あるものと言えば田んぼと数えられる程度の家だけだった。

目立つものと言えば村の中心に一際大きい家、というより屋敷が建っているだけだった。

…家があるということは完全に無人というわけでもないはず。

となると一番怪しいのはあの大きな屋敷。
一番立派だし、よく見ると屋根が少し沿ってとがっているのが耳、
にも見えなくない。

まるで昔話に出てくる村みたいな場所ね。もしかしたら村人全員が
頭には獣耳、おしりには尻尾が生えてたりして。

鬼灯がそこまで考えているとちょうどその家からぞろぞろ人が出て
きた。

そのほとんどが年寄り、せいぜいが働く盛りの男の人しかいなく、
子供、又は若い成人がほとんどいない。

人が出てきたのに気づいた鬼灯は近くの木に飛び移った。

どうやらそれぞれの家に一度戻って行くらしい。が、数人は家の前
に留まり話し合っている。

「侵入するなら今ね。そういえば別に皆耳をつけてるとか、頭にリ
ンゴをのせてるとか、そういうことはないのね…」

余計なことを考えつつも木から移動を始めた。

「やっぱり屋根から侵入できたわね」

鬼灯は屋敷の床に静かに下りた。

この屋敷は特別なのか、村の様子に比べれば遥かにきれいで質素な
装飾もほどこされていた。

中は薄暗く、電気ではなく燭台が置いてあるだけだった。そして、
獣耳少女は目の前の障子戸の向こうにいるらしい。

戸を開けようとする中から鬼灯にかかる声があった。

「なんじゃその者、用があるならはよ入らんか」

ほおずきがなぜ、と動きを止めると、

「灯りで影が浮き出ているのじゃから当然である。それも、見知ら
ぬおなごの影ではの」

「私は敵じゃないわ。あなたを傷つけるつもりはない」

「そんなことはどうでもよい。それより早くこっちに来てしゃべりたまえ」

その一言ではおずきは障子戸を開けた。

そこは豪奢な造りになっていた。

紅の柱、金の布で部屋中が装飾されて、畳には傷一つなかった。この部屋の主は明らかに祀^{まつ}られていた。部屋の奥、部屋の主がいた。

部屋の主はうつ伏せで両手で頬杖ついてこちらを見ていた。

顔は大人びていてややつり目、金、というよりは狐のような黄色に近い髪の色だった。

やはり、頭にはとがった耳が生えており、きれいな背中ラインに続く柔らかそうな臀部^{でんぶ}には先が白くなっている尻尾が…

「ってなんで裸なのよ!」

「ん?わざわざ羽織る必要もあるまいて。それよりそちはどこから来たのじゃ!そこはどんなところなのじゃ!」

「ま、まずは服を着るー！」

いくら女の子同士とはいえやはり気になる。

特に胸とか…いやいや別に大きいなあとかじゃなくてそんな見たつていうかちらつとしか、しかもうつ伏せだからきつとそう！寄ってるだけ寄せて上げてるだけ…！

「ったくしょーがないのう。と、？そち、さつきから何をぶつぶつ唱えておるのだ？」

「！別に、なんでもないなんでもない！なんでもないよ？」

狐少女は着物の袖を通すだけで、再びねっころがる。

「一人でぶつぶつ唱えるだけなら村人達と同じでつまらん。せつかくなのだ、そちの話を聞かせておくれ」

「あなた、」

「金穂様かなほと呼ばれておる。そう呼ぶがよい」

「金の麦穂でかなほさま………かなほちゃんはそのやってしゃべるように言われてるの？」

「いんや、言葉は適当に村人がしゃべっておるのを聞いておぼえたのじゃ。そう言えばそちはしゃべり方も村人達と違うの？」

「自分で覚えたの？誰も教えてくれなかった？」

「ジブン、そうじゃ！じぶんでおぼえたのじゃ！村人は自分がしゃべると臭くそうな顔をするので。だから、滅多にしゃべることもなくて暇なのじゃ」

「じぶんで言葉を覚えた…？しかも村人達は彼女が話すのを臭くそうな顔、て事は話すのを嫌がった？不気味に思った……つまり、同じ人として扱ってないのね」

「だから、一人で唱えるでない！自分としゃべりたまえ」

「かなほちゃん、自分、じゃなくて私、っていうのよ」

「自分はワタシ、なのか？なるほど、ワタシとは自分の事なのか！そちとしゃべると面白いの！」

「そちじゃなくて鬼灯ほおずき、鬼灯ほおずきって呼んで」

「そちはほおずき、ほおずきじゃな！よし、ほおずき！もっともっとしゃべるのじゃ！」

その時、外から人の歩く音が近づいてくる。鬼灯は緊張して、

「そうしたいけど、時間がないの。かなほちゃん、ここから逃げましょ」

「ほ、ほおずき…？」

「いや、一回隠れなきゃ。今逃げたらすぐにはれる。ごめんね、ちよっとやりすごすね」

「なあ？今話し声が聞こえなかったか？」

「ああ、……………またあの狐の独り言だ。しかも着物まで羽織ってるぜ。わざわざ」

「にしても勝手にしゃべりだした時はびびったぜ」

「俺もさすが神様、て思ったぜ」

「でもやつぱ不気味だよな」

「ああ、早く“渡し”の儀”がおきねえかな。このままじゃ俺たちもこんな村でじいさんになっちまうぜ」

「“この世の終わり”なんて来ないだろ。さっさと見張りに戻ろうぜ」

ああ、と二人の若者は部屋から去り、歩いていった。

ほおずきは天井の柱から手を離し降りてきた。

「……………あんな感じなのね」

「ほおずき」

「かなほちゃん、渡しの義って聞いたことある？」

「……………」

「かなほちゃん？」

「今のほおずきはいやじゃ」

「いやって……」

「いやな臭いがする。さっきまで楽しかったのに、急にほおずきがいやじゃ！」

「いやな臭いつてなに…？」

鬼灯がそう訪ねる前に屋敷の外からうめきのような雄叫びが響き渡った。

「ごめんね、かな君の用意がまだ出来てなくてね」

「いえすみません……あの、その、お氣遣いなく……」

「謝らなくて良いんだよ。じゃあ最後に涉くんだね」
俺たちは順番にそれぞれの超能力を見せ合っていた。

最初は水無瀬宗次^{みずのせむねつぐ}。宗次は汚れた水を清めることができ、そして清めた水を操ることが出来た。

次は風間愛風。^{かざまあいかげ} 風間は自分で言った通り風を操り、空中散歩をしてくれた。

そして、渉の超能力だが、

「俺、自分の能力なんて分かんないですよ？」

「その点に関しては大丈夫。こっちである程度見当はつけてるからそこへ、部屋にエプロンをつけた女性が入ってきた。

「どうも、はじめまして！私は元木菜子^{もとぎななこ}です。よろしくね」

「彼女の能力を利用して涉くんのパワーアップしたいと思います」

「私の能力は皆を元気にする。お花だったりふさぎこんだ人を元気に出来るんだよ」

「元木くんは普段はガーデニングショップで働いていてね。自分の能力^{ちから}を活かした仕事をしてるんだよ」

「確かに今の渉は疲れてますけど、元気なすることと超能力って関係があるんですか？」

「それは元木くんから説明してもらおうか」

「私の能力は超能力者にはもう一つ効果があるの。それは能力を強くする力、つまりその人の能力も元気にする事が出来るの」

「元木さんの能力で俺の超能力をパワーアップしてみると」

「まあ一時的だからずっとパワーアップしてる訳じゃないらしいからね。せめて半日は続くかな」

「なんだ、じゃあ俺たち全員パワーアップみたいな事にはできないのか」

宗次が残念そうに言う。

「そうだね、漫画みたいにそう簡単に強くはなれないからね。さて、じゃあ渉君、さっそく始めようか」

渉と元木は向かい合い席についた。

「じゃあ、渉くんだけ？はい、手出して」

と、元木が両手を差し出す。

渉も一瞬照れたが、手を握り返した。

「それで、どうすればいいんだ？」

「渉君は予知系の超能力だと思うんだ。だから何か考えてみて」

「何か、って言われても……」

「なんでもいいよ、人とか将来の事とか気になること」

気になることか、そう言えば鬼灯達はどうしてるだろうか。

次の瞬間、渉の意識が急速に飛んでいく。

本当に意識が飛ぶ、というより車に乗って加速したみたいだ。

体が置いてきぼりになる感覚。実際、意識が体から離れていた。

しばらくするとその感覚も落ち着き、意識がはつきりする。

ここはー？

渉の体は浮いていた。見下ろすと、林の中だろうか、木や植物が生えていてその中を人が歩いている。

あれは、おれー？

と気づいた瞬間、意識が再び加速し、

なんだ、どうなっているー？俺が走りながら、その俺を見下ろしている！？ー

つまり渉は今、林の中を走っている自分の視点とその走っている自分を見下ろしている視点、二つを同時に見ている状況だ。

渉は走り続け、やがて開けた場所に出た。

どこかの村のようだったが、すでに炎に包まれてもはや村とは呼べなくなっていた。

そこには人影が二つ。

そしてその一つは、鬼灯。

鬼灯ー！

渉の口がそのように動く。鬼灯がこちらに気づき口を動かすが、炎の波へと飲まれていった――。

二人目続2（後書き）

今回も続けて読んでくださっている方、ありがとうございます。

ふと思ったのが投稿する量。これ大丈夫ですかね？一応削ったり調整はしてるんですが多いんですかね？少ないんですかね？

もちろん一般的な小説に比べれば少ないはずですが。

そこで評価順で参考にならないかとチェックしたところ、いやファントジー系はやっぱり気合い入ってますね。面白そうだなあとか言ってるうちに結局チェックすることを忘れ、参考にできませんでした。

とまあここまでズラズラと書いた辺りでひこうかと。

ここまで読んでくださってありがとうございます！

二人目「……………未だ、役立たず」(前書き)

今回で二人目です。大変お待たせしました！

二人目「……………未だ、役立たず」

「鬼灯！」

渉が叫ぶと同時に立ち上がった。

「渉、大丈夫か？」

そう言つて宗次そうじと皆堂かいどうがカーテンの向こうから入ってきた。

渉はいつのまにかベッドの上に寝かされていた。

「何もなくて良かったな。あの後渉が気を失うから俺と皆堂さんでここまで運んだんだ」

寝てた……？

「皆堂さん、鬼灯はどうしてます？連絡つきますか？」

「それが、鬼灯君たちから連絡がないんだよね。最初の定時連絡は受けたんだけど」

「てことは鬼灯がどこにいるかわからない……」

「いや、鬼灯君達は任務でとある山奥の村に行ってるはずだよ。着いたって連絡は」

「山奥の村!!」

「なんだよ、急に大声出すなよ」

偶然か、いや……

「実は……」

渉は鬼灯の事を考えて意識が飛んだこと、そして先程自分が見た事を皆堂と宗次に説明した。

「うーん……」

渉の話を聞いた皆堂は腕を組んでうなった。

「鬼灯達と連絡がとれない事といい無関係とは思えないんです」

「俺もそう思います」

宗次も渉に賛同する。

「確かに、しかも元木君^{もとぎ}の能力^{ちから}も借りて見たことだからね。ただ、そうすると……… 渉君もその場にいたんだよね？」

「はい。なんていうか、夢みたいに走っている自分をもう一人の自分が上から見てるっていうか。でも走っている自分の目線も見えてる」

「つまり、その場には渉君も居合わせていたんだ」

「あ」

そうか、もしあれが本当の事ならば渉はその村にいないかならな
い。だったら今渉がここにいるわけがない。

「だって、走っていった君は村にいる鬼灯君を直に見ているんだか
ら」

「ってことはやっぱり夢なのか？」

「ただ、元木君の能力は本物だからね、それに渉君の超能力は予知
系のはずだから起こる可能性の方が高い」

「じゃあ渉がその場にいたってというのは……」

「それも多分本当に起こるんだよ」

「でも、だとしたら俺はどうやって鬼灯に会いに行けばいいんです
か」

「それだったら」

と、皆堂が携帯で誰かに連絡を取る。そして、携帯を閉じ、

「よし、渉君、動けるかい？」

皆堂について行き、渉と宗次はある部屋に来ていた。

そこは、特に何がある部屋ではないが、芝生やタイル、石などどれ

もきれいな円形にくりぬかれたような様々な床になっていた。

部屋の隅に地図を持った少年がいた。

「皆堂さん、遅いつすよ」

「ごめんごめん。急いできたんだけどね」

「後ろの二人は？」

「ああ、こちらが水無瀬宗次君でこっちが土岐野渉君」

「自分は猿渡綱翔さるわたりのつなとびツス。綱引きの綱に飛翔の翔でつなとびつす、よろしく」

「猿渡君は瞬間移動ができてね。正確にはある地点とある地点を入れ換える、という超能力なんだけど。こういう急ぎの時には移動手段として手伝ってもらっているんだ」

「で、皆堂さん。今日はどこまで行くんすか？」

「えーとね、ここなんだけど」

と、皆堂が日本地図の一部を指差す。

「その辺、ていうと……この地図っすね」

と言って、猿渡がより細かい地形の地図を取り出した。

「この地図でいうと、ここ」

「ここっすか。えーっと、そうすると……………」

猿渡はしばらく地図を眺め、

「今何をやってるんだ？」

宗次が我慢できずに質問する。

「今はどういうルートで目的地に向かうか、決めてるところだよ」
皆堂が地図から離れこちらを向く。

「実はね、猿渡君の移動法だと一つ欠点があってね」

と言つて部屋の様々な床を指す。

「移動した先の地面ともいた場所の地面を交換してしまうんだよ。だからあまり目立った場所や迷惑のかかる場所へは移動できないんだ。」

例えば、とある草むらからコンクリの道路へ猿渡君が瞬間移動すると、草むらにコンクリが、コンクリの道路に草が、ていう風になつてしまうんだよ。だから、その地面が交換しても平気なところを何回も経由して目的地に行くわけさ」

「ルート決まつたっすよ」

説明が終わるとちょうど猿渡の方も終わつたらしい。

「まず、誰を運ぶっすか」

「まずは、渉君から。その後に僕を」

「俺も行きます」

「宗次くんは危ないからここに残って」

「渉の話によれば村は火に包まれているはず。だったら俺の能力が役に立つはずです！」

「……わかった、その代わり僕のそばを離れないこと。渉君もだよ」

「わかりました」

「じゃあ行くつすよ。これに乗ってほしいつす」

猿渡は野球のホームベースのような正方形の板をマンホールの上に置く。

渉はその上に乗り、猿渡が渉の肩をつかむ。

「一瞬で移動するつすよ……3、2、1、ゴー！」

ゴー、と猿渡が言い終わる前にはどこかの路地裏にいた。

「うわっ」

全然わからなかった。

「次はこっちつす」

板を持って数メートル移動する。

「続けて行くっすよ！…3、2、1、ゴー！」

再び景色が変わる。

移動、景色が変わる。移動、景色が変わる。移動、景色が変わる。

六回ほど繰り返したところで林のような場所に出た。

「着いたっすよ、ここで合ってるっすよね。待ってるっすよ、今皆堂さん達つれてくるっすから」

そう言つと猿渡は消えた。

渉は自分の斜め後ろを見た。

―あそこから見ていたのか―

皆堂が来るのを待っていると、恐らく村がある方から一瞬熱気と光が涉にぶつかった。

「まさか…！くそ、間に合えよ」

渉は熱気と光が来た方向に走っていった。

― 渉が来る少し前―

「なっ！またゾンビ！？」

ミイラだっけ？

と鬼灯が屋敷から飛び出すと、村中で包帯人間が村人や家などを襲っていた。中には明らかに超能力を使っているゾンビもいた。

「出たぞー！死人が出たー！」

「この世の終わりだあ」

「何をしておる！はやくわしを金穂^{かなほ}さまのところにつれていくのじゃ！」

この混乱の最中、村人達は一斉に屋敷に向かってきた。鬼灯も巻き込まれ、再び屋敷へと入る。

村人達は鬼灯に気づいていない。皆金穂ばかり見ていた。

村人の中から一人、老婆が進み出てしわがれた声で叫ぶ。

「おお金穂様！とうとうこの世の終わりの時が！今こそ渡しの義を執り行うときが来ましたぞ」

「渡しの義？」

「あなた、渡しの義も知らないの！」

隣にいた女村人が話し出す。

「渡しの義とはこの世の終わりが来た時、金穂さまがこの村の大尾おおびへと飛び込み、吠えろと、そこから金の光が溢れ、死が遠ざかり、村中には枯れることのない麦穂が宿……ってあなた誰！！」

今更…と鬼灯が思ったが、女の最後の一言で村人全員が鬼灯に気づいた。

「誰だおめえ」

「村のもんじゃねえぞ」

「そんな小娘に構うことはない！それよりも渡しの義を始めるのじや！」

その言葉に村人達は従い、金穂と鬼灯を屋敷の裏手に連れ出した。

屋敷の裏手には大きな尻尾があった。高さはほぼ屋敷と同じで、全体が麦のような色、先端が白くなっている、金穂に生えている尻尾と同じ色だった。

しかし、そこにはすでに人がいた。その人物は尻尾の建物を手でさわり見上げている。背が高く、ほっそりとしている男性だった。

「皆堂さん!？」

「おや、その名字を知っている人間がこの村にいたのか」

男が振り返る。結論から言うと皆堂ではなかった。ただ、後ろ姿だけでなく、顔もどことなく似ていた。

しかし、雰囲気だけは全く違った。なんていうか、皆から、この世から存在を否定されたような、そんな顔をしていた。

「何者じゃ、まさか主らよそ者のせいで村が？」

「そうだね、ある意味そうじゃない?けど、僕としてはもうどうでもいいかな。目的のものも見つけたし」

「なんじゃと?」

「!金穂ちゃん!!」

鬼灯は自分をつかんでいた村人を突き放し、金穂をつかみ、村人達から一気に離れた。が、間に合わず二人とも熱気に包まれる。

男の正面から出た炎が村人と二人、更には屋敷と後ろにあるはずの尻尾の建物までも飲み込む。

「これで終わりつと。あとは……………おや？」

「けほつ、はつ、大丈夫金穂ちゃん……………」

「ほおずき……………」

二人はなんとか炎から抜け出した。しかし、金穂の髪や、尻尾の毛などが燃え縮みあがっていた。金穂は気を失い鬼灯は金穂を火の手が届いてない安全地帯に下ろす。

しかし、

「よくあの炎から抜け出せたね」

「あなたは！」

「にしても随分ジャンプできるんだね。そんな人は今まで見たことがないよ」

「なに、ジャンプって……………それよりなんでいきなり！関係ない村人もいたのに」

「そう！それより、だ。その子を渡してくれないだろうか。僕の目的はその子だけなんだ」

やっぱり、と鬼灯は身構える。

「お？僕と戦うの？止めといた方がいいよ。僕はこんなでも強いんだ。

誰も信じてはくれないけどね」

パイロキネシス

「火炎操作よね、しかもあんな大規模な炎を出せるなんて」

「まあね、君が僕たちについてどれだけ知ってるか知らないけど、あれでも本気の僕よりほど遠い」

そう言つて男が息を吹くと、一瞬にして景色が炎へと変わっていく。

「！」

鬼灯は炎に巻き込まれそうになった金穂を抱き上げる。

「よく気づいたね。あくまでそっちが本命だからわざわざ戦うまでもないと思っただけ」

「この子がそんなに重要なの！」

「んー、重要つてほどじゃないけど、今殺せるのはその子だけだから」

「……どういうこと」

「さすがにそこまでは言えないなあ。さてどうする？その子を抱えたまま戦う？こちらとしてはその方がやりづらいんだけど」

鬼灯は迷い金穂を見る。が、男を一度睨み付けると振り向き、抱えた金穂を放り投げた。

「…え、なぜ？」

はてと首をかしげる男に鬼灯は速攻で拳を叩きつける。が、その拳が届く前に炎の壁に現れる。

それによつて鬼灯は自ら炎に飛び込む形になった。なんとか体を引くが、右腕が肩まで炎をあぶられる。

「くっ、こないだの溶岩^{メルト}操作の比じゃない…！」

鬼灯の腕はわずか数瞬で服は灰と化し、重度のやけどとなった腕をさらしていた。

「んーんーんー、あ、そうか！邪魔になるからと安全そうな林に投げ込んだと。なるほど、これは一本とられた…って、ひどい火傷だね、どしたの？」

どうやら本人は無意識でやっていたらしい。

「…本当に勝ち目がない」

余裕がないのか、普段の独り言も出ず、言葉少なげである。

「ということは君を倒さなきゃあの子のところへ行けないと。いやーこれはなかなか」

と、先程金穂が落ちていった林が炎に包まれる。

「大変なんじゃない？」

「なっ」

「君、ばかじゃない？あんな燃えやすいところじゃ意味ないでしょ？まあ一応？助けられるように徐々に火が回るようにはしてあるけど。それには、僕を倒さなきゃいけないわけだし。大変なんじゃない？」

鬼灯が眺めているうちにも火の手が回っていく。その時、

「ほおずき！」

「ほおずき！」

渉が叫ぶと鬼灯がこちらを見る。

「渉君！？…して、渉君！あそこに…ちゃんが…、わた…の代わ…に助けて！」

鬼灯が叫ぶが渉には所々しか聞こえない。次の瞬間、鬼灯が炎の波に飲み込まれる。

くそ！ここまで見た通りになっちまってるじゃねえか……！

「どうする……」

鬼灯が言っていた事も聞き取れなくて意味がわからない。どうした

らー

渉が動けずにいると、

「ほおおおおお」

と、高く、どこか人っぽい獣のような雄叫びが響いた。

そちらを見ると、炎に包まれた場所から狐が飛び出していた。その狐はこちらの方を見ると、全力でかけてきた。そしてそのまま鬼灯がいる炎の中へ飛び込んでいく。

「なっ」

狐がどうして……？

やがて炎の中から気絶した鬼灯を背中に乗せた狐が出てきた。

「鬼灯！」

渉が鬼灯の名を叫ぶと狐は渉の横に鬼灯を下ろしてくれた。

よく見ると、狐は普通より明らかに大きかった。狐は四つ足で立っている状態で渉と同じくらい高さがある。

「へえ、本当に狐に化けられるんだ。尚更殺しなくなっちゃうね。狐狩りってあつたっけ？」

炎から緊張感のない声がその人物と共に出てきた。

「誰だ」

「生憎あいにく名乗る名前はないんだよね。まあこの村を燃やした張本人って言えば十分だよな？」

「おまえが…？」

「そ。で、助け出したばかりでなんだけど、三人一緒、いや二人と一匹で燃えちゃってよね」

男がこちらに手をつき出す。

その時には、炎が目の前で氷の彫像になっていた。

「大丈夫かい二人とも！」

「皆堂さん！」

皆堂が渉の来た方向から追い付いてきた。

「一人で行っちゃダメって言ったのに……鬼灯君は」

「気を失ってますけど多分大丈夫です。この狐、みたいな動物が助けてくれて」

「狐…？いや、君は」

皆堂は何かに気づいたみたいだが、はっとして氷の先にいる男を見る。

「いやあ、まさか、こんなところで再開するとはね」

「！……………噂は聞いていたけどまさか本当だったなんてね」

皆堂と炎の中の男が睨み合う。

「そんなんで僕の真似でもしたつもりかい」

「いや、これはほど遠いよ。そう兄さんのちょーのーりよくに比べればね」

「にいさん…………？」

にいさんって、兄弟の兄さん？

確かに、背格好は同じくらいだしどことなく雰囲気似ていなくもない。

「けど、この程度の火炎操作は本気じゃない。知っているかい？兄さん。僕たちは強くなるとあの人からもう一つ、オリジナルの超能力を“もらえる”のさ。つまり、超能力を二つ持っているのさ」

「！！もらっているって…！」

「だから火炎操作他にもうひとつ。けど、ちょっと使いづらいし今日は疲れたからね。この辺で切り上げるよ。そのペットも諦める。じゃね」

皆堂を兄さんと呼んだ男がしゃべり終わり手を振ると、それを合図にか地面から手に鉤爪をつけたミイラのようなやつが出てきて穴に落ちるかのように二人揃って地面へと消えていった。

村から少し離れた山の中、頼貴達はミイラ相手に戦い続けていた。

「くそ！こいつら最初に倒した時より全然強え！！」

「急に消えたと思ったら今度は超能力まで使ってくるし。さすがにマズイ？」

そう言い、ミイラ達の攻撃を不思議な動きで避け続けていくベツクの額には汗が浮かぶ。

「村で何かあったのだろう。最初の接触は凶、そして次には本気を出しての時間稼ぎか」

「てことは鬼灯が！あの本体の爪ミイラはどこにいきやがった！」

頼貴が放った紫電によって数人のミイラが倒れる。が、やはり立ち上がってそれぞれ、炎、雷、氷の塊を飛ばしてくる。

「さすがにきりが無い。これでは……ぬ？」

ウオルフが両腕を腰だめで構えると、ミイラ達がまるで糸が切れたみたいに倒れて包帯がほどけていく。

「はあ、はあ、…終わったか。てか鬼灯は！」

「……………わからん。携帯は繋がらん」

「見て！」

ベックが指差す方を見ると、村が燃えていた。いつから燃えていたのか大分火の手が回っている。

「くそが！さつさと向かおうぜ！」

頼貴が走り出そうとすると、ウォルフの持っている携带着信が鳴った。

「鬼灯か！」

「いや、…皆堂か？……………ああ、こっちは無事だ。そちらは……………。わかった、鬼灯も無事なんだ？……………では、こちらから合流に向かう」

「鬼灯は無事なんだな！？」

「ああ、火傷はしているが無事だ。なんでも狐に助けられたらしい」

「きつね？」

「渉がそう言っていたと皆堂が」

「なんでまたあいつがいやがんだ？」

「とにかく、合流しに行くぞ。詳しくはあとだ」

頼貴達と合流するまで皆堂は村の炎を消し、鬼灯の手当てをしていた。手当てといっても火傷の部分に軽く触れるだけで、火傷が治っていく。

「皆堂さんって何者なんですか」

「いやね、まさかあの子が敵側にいたとはね。しかもこんな形で会
うとは僕も思っていなかったんだよ」

「あ、いや、そっちも気になるんですけど一体何の超能力なのかな
って。あの氷も皆堂さんがやっただんですよね？」

「ん、ああそつちか。……そだね、僕の能力はなんていうか、僕が
頭中で思ったことをそのまま現実に行けるんだよね。よく、漫画と
かの言霊使いと間違われるんだけど、それよりは複雑で不便なんだ」

「じゃあ火を消したりっていうのは」

「僕がそう思ったからだね。炎が凍ったのもそのように想像したか
らなんだ」

「すごいじゃないですか！ 万能みたいですね！」

「実際はそうでもないんだけどね。でも、やっぱり今回で一番すご

いのは渉君だよ」

「俺、ですか？」

「うん。君がこの事を予知してなかったら今頃鬼灯君もその狐も多分。渉君のおかげで助かったんだよ」

「…………でも、俺鬼灯が炎に飲み込まれたとき、何もできなかったんです。見た先のことがわかんなくて、ただ突っ立って……」

甘く考えてた。だから、

「だから、今度からこんなことがないように、ちゃんと今回の時のような場合で役に立てるようになりたいです！」

「渉君…………」

渉がそう言いきると皆堂が頷き、

「そうだね。その為には自分と向き合わないと、だね。しっかり能力を把握して、鍛えて、使えるようにね」

「はい！」

渉と皆堂が話終え、鬼灯に寄り添った狐を見ると、いつのまにか寝入っていた。

「そう言えば静ばあ様によればこの狐、女の子って聞いていたんだけど……？」

すると、狐の姿がどんどん小さくなっていき、少女の姿になっていた。

「うわっ、女の子になったっていうか、服！服はどこですか！」

「そりゃ狐の姿だった訳だし、当然着てたものは燃えちゃったよね」

「皆堂さん、服は作れないんですか！」

「だからそんなに便利じゃないって！僕の超能力は四次元ポケットじゃないんだから」

「あっ、皆堂とトツキーが裸の女の子の前ではしゃいでいる」

「……てめえら」

「皆堂よ、せめて服ぐらいかしてやれ」

タイミング悪く、頼貴達三人と合流した。

「いや！？誤解だつてウォルフ君！！今さっきまで彼女は毛皮に包まれていたわけで」

「トツキー、さすがにじろじろ見るのはイケないと思うよ」

「じろじろなんか見てないって！？」

結局、ウォルフの上着をかけてあげることと落ち着いた。

この後、更に猿渡と宗次と合流し（猿渡は連続の瞬間移動に疲れ、休んでいた）、皆堂さんの能力も借りて全員で瞬間移動で帰った。

了

二人目「……………未だ、役立たず」（後書き）

えー、今回まで読み続けてくださった方、また目に留まり、二話連続で読んでくださった方ありがとうございました。

本当はもう少し主人公の能力について詳しく書けたらと思ったんですが……ちなみにサブタイの二人目、とは主人公渉君の事です。（分かりにくかったですかね）

そうそう！この物語は携帯で書いているんですが、読みやすいようにと改行を多くした結果、パソコンで読むと逆に読みづらいことに

……………

まあ今度違う小説を載せることがあったらその時は気を付けます！はい！

次話からは渉君、転校生です。やっと学園成分を出せる。といったも学園ものは苦手なんですが…

三人目は誰にしようかと思いつつ、このあとがきまでしっかり読んでくれた方へ、ありがとうございました。

三人目「ええ、痛くないわ……………」（前書き）

今回は若干の短めとなっています。やっと学校に入りました…

三人目「ええ、痛くないわ……」

「では、土岐野くん。自己紹介お願いしますって先に先生が言っちゃったね。あははは。じゃ、改めてよろしく」

「……土岐野涉です。よろしくお願いします」

涉は教室の中、クラスメートとなる生徒達の注目を浴びる。

あの村から帰ってきた後、

「つまり、涉くんの超能力は、これから起こる未来をあらかじめ体験することができる、まさに未来予見ならぬ未来予験ってとこだね」

「未来予験……」

皆堂に呼び出され、涉の能力について話していた。

「まだどの未来を体験するか時間は指定できないみたいだし、発動条件もわからないけど、まあその辺はこれから鍛えていくしかないね」

「はい。頑張ります」

「いい返事だね。そうだ、実は今日呼んだのはこの事だけじゃないんだよね」

「この事だけじゃない？」

「そう。あと宗次くん達も関係ある話だからちよっと待とうか」

待つこと数分、部屋に宗次、愛風、かなの三人が入ってきた。

「今日みんなを呼んだのは学校についてなんだよね」

「学校ですか？」

「そう。かな君に至ってはまだ義務教育中だしね。君たち三人もなるべくなら高校に通ってほしいんだけど、どうかな」

「もちろん！俺は通いたいです」

「私も行きたい大学があったので高校で勉強しておきたいです」

宗次、愛風が答える。

「鬼灯たちはどうしてるんですか」

「鬼灯君は学校には通ってるよ。頼貴君はベック君やウォルフ君と一緒にあちこち飛び回っているからね。高校には行ってないんだ。渉君はどうする？」

「俺は、能力を鍛えるのに支障がでなければ通いたいです」

「それはもちろん保証するよ。ちゃんと学校に通いながらも練習できるようにしてあげる」

と、かながおずおずと手を上げる。

「それで、その、学校はどこになるんですか…」

「学校なんだけどね、こっちの都合で悪いんだけど『さいのう齋納高校』つて所に通ってもらうことになるね。中等部もあるからかな君も一緒だね。」

この学校は私立で僕たちの関係者が設立した学校なんだ。だからなにかと融通がきくんのだよね。ちなみに鬼灯君だけじゃなくて他の子達も通ってるんだ」

へえ（俺と宗次）、あら（愛風）、はあ（かな）、とそれぞれが反応する。

「しかし、時期が微妙じゃないですか。あと二ヶ月経たないで冬休みになりますよ」

「まあそこは慣れるという意味も含んでね。みんな結構の間学校に行っていないでしょ？勉強もそうだし、環境にも慣れないと。大丈夫、不自然にならないように配慮してもらってから」

と言われ、俺たちは齋納高校に転校してきた。

そして、準備して今日自己紹介をしているわけだが、

好意三、興味二、期待外れ四、無関心一、といったところか。適当

だけど…

まあ最初から嫌われているよりはましか。

「土岐野には席についてもらう前に。実は！もう一人転校生がいまーす！」

おお！？、とクラスが若干動いた。その反応を期待してたのか、この担任はふっふっふと笑い、

「じゃあ水無瀬！はいつてきてー！」

宗次が教室に入ると、きゃ、と一部女子から声が上がった（気がする）。

「水無瀬宗次です。趣味は体を動かすこと、スポーツ全般、特に水泳が好きです！微妙な時期の転校、じゃない転入ですが、よろしくお願いします！」

と、先程涉が挨拶した時よりクラスの反応がいい気がする（特に女子）。

「これでビックリすることなかれ諸君、最後に登場するのはー」

と、注目させようと担任が教室の扉を見る。が、誰も入ってこない。ステステと教室の外に出ていく担任教師。

「なんだよ、まだ転入生がいるのか」

「次こそは女子、次こそは女子…」

「ふおおおおバカな、占条の占いが現実になるとワアああ」

「甘いですよ科学さん、所詮^{しよせん}、えすぱーではその程度が限界ですよ」

ぬあにおーと教室は様々なざわめきが止まらない。

「さすがにこれは怪しいよな？」

「ていうか皆堂さん、不自然過ぎじゃないですか…」

「おまたせ野郎共！三人目の転校生は、この子だ！」

おお、と今度は男子から確かにどよめきが上がった。

「私は屋敷金穂^{やつきかなほ}という。ここで色々学べば一石二鳥と皆堂としゃべった！学ぶのは楽しいことじゃ！いっぱいしゃべってくれ！」

「金穂ちゃんは日本人だけど今まで、スロガリア？っていう国にいたからまだまだ日本語が不慣れらしいんだけど変な言葉教えないように」

「せんせー、スロガリアなんて国ありません」

「スロガリアはありますー。先生が中学生の時にできましたー」

『そりゃあんたの答案の上でだろ！』

クラス全員のツツコミが入るが、担任はいつものことなのかまるつきりスルーだ。

そういえば金穂の超能力について。

金穂はメタモルフォーゼ、簡単にいうといろんなものに変身できる能力らしい。

ただ金穂自身はあの狐以外の姿にはなった事はないらしい。そして、長年尻尾と耳を生やしたままでいたので、

「帽子かわいいなあ」

尻尾は制服の中にかくす事ができたが、耳はそうもいかない。なので、能力をコントロールできるようになるまでは帽子をかぶりごまかすことにしたのだ。

新たな転入生三人に教室が蜂の巣をつついたように騒がしくなった。

「俺の話を聞けー！ということで、三人とも席はまとまってわったしのまえ〜。はい、ここ三列一つ後ろに下がる」

ずるっ！と文句が出つつも涉達のためにスペースがあく。

「せんせー席ないです」

「お前ら三人今日は空気イスだ。机も空気です」

『いやムリだろ!!』

教室後ろの三人のツッコミが被る。

「なんだよ演劇部の見せどころだろ」

「先生俺演劇部じゃないですー。一緒にしないでください」

「俺も俺も!」

「おまえは助っ人やったんだからもう演劇部の一員だろ」

「いや、勝手に入れるなよ!」

「はいそこで小劇始めない。じゃああとで練習に使ってる教室から持ってきていいから」

「ココ二階!ココ二階!準備室五階だから!」

その時、一限目の始まりを告げるチャイムが鳴った。

「あーあ、間に合わなかったなお前ら。では授業始めます。一限目が担任の授業で良かったな」

結局、後ろの演劇部三人(?)は空気イス&机で授業をするはめになって、宗次と渉は思わず苦笑した。

担任の先生は大桃胡桃。おおももくるみ三年前にこの学校に来たらしい女性教師で、生徒への接し方と話し方、若さもあつてか生徒達に人気の教師らしい。

元々は演劇部はなかったこの学校で、今年から自らのクラスの生徒を部員にし立ち上げた。

行動力が何よりすごい。最初の授業も金穂が気に入ったのか、ほとんどが金穂と話すことで終わってしまった。

でもその行動力のおかげで、三人同時に転入、という珍事をクラスメートたちは不思議に思うことなく受け入れてしまった。

それから午前の授業が終わり昼休み、

「ねえねえ水無瀬くん、一緒にお昼食べよ!」

「水無瀬! 食べ終わったらサッカーしようぜ」

「屋敷さんて結局どこの国にいたの?」

「髪きれい。金穂ちゃんの髪の色って地毛なの?」

など渉の両隣では人垣ができています。その中には他のクラスの生徒も混ざっていた。

だから渉一人ぼつん、ということはなかった。

「土岐野、あたしらと昼飯食べようぜ」

「あー、俺も混ぜて有川氏。土岐野氏にはまだ聞くことが」

渉にも二人ほどではないがクラスの生徒が集まってきた。

有川、と呼ばれた女子が周りの机をくつつけ席を作り上げていく。

「はい、じゃあ食べようぜ！ほら、あんたはそっちに座る」

「あ、う、うん……」

「んじゃ改めて自己紹介するかな。あたしは有川恭ありがたやす。こっちの恭子きんこの親友、くらいに覚えてくれればいいから。よろしく」

と渉の正面、有川はさばさばとした口調で自己紹介をする。

「ほら、次々」

「あ、えと、高梨恭子たかなしきようこです。これからよろしくおねがいします……」

渉の右に座った、親友の有川につつかれながら高梨はおとなしく自己紹介をした。

「ちなみに趣味がお菓子作りだから仲良くなっておくといいことあ

るよ?」

「ちょっと、きょうちゃん、」

「いいじゃんヤス」

涉が一瞬混乱すると、

「あの二人は名前が同じ漢字なんですよ。けど読みがきょうとやす、だからお互いに読み方を交換して呼び合ってるんです」

と、涉の左に座っている男子が話しかけてきた。

「自分は文谷情事^{ぶんやじょうじ}。情報の情に事件の事、で情事です。名前の通り情報屋やってるんで何か知りたいことがあつたら教えますよ。そして土岐野氏についてなんですが他二人の転入生とはどんな関係ですかね」

と、自称情報屋、文谷は自己紹介だけでなく涉に質問までしてきた。

「こら文屋^{ぶんや}、土岐野をもつてきな。で、土岐野は甘いものは好きか」

「文屋、じゃなくて情報屋です」

有川は文谷の言葉を見殺し、涉の答えを待つ。

「え、ああ好きです」

「別に敬語とか使わなくていいぜ。甘いもの好きだってよ、よかったな」

「うん。…あの、今日は持ってきてないんですけどよかったら明日つくってこようと思っただけど？」

高梨は渉に聞いてくる。

「菓子ってどんなのが作れるんだ？クッキーとか？」

「はい。あとはケーキとかキャラメルとか」

「ケーキ作れるのか。すごいな」

「いえ、ケーキっていつでもショートケーキのようなものじゃないですよ」

「食べたことないかも」

「じゃあ明日ケーキ作ってくるね！」

高梨と約束した。その後も学校についてや文谷の話で盛り上がり気がつくとおつという間に昼休みが過ぎていった。

放課後、

午後の授業も終わり、渉は校舎の中を歩いていた。

有川たちに一緒に帰らないかと誘われたが渉にはやることがあったので断っておいた。

皆堂さんに聞いたところ、

「もし渉君が自分の能力を鍛えるつもりなら『自己探索部』に入るといいよ。あの部活は超能力者しか入れない部活だし、自分の能力を使いこなしてる子が多いからね。今の部長さんには僕から連絡を入れとくね」

と、言っていたので現在渉はその「自己探索部」の活動場所へと向かっていた。

宗次と金穂も来る予定だったが宗次は体育会系部活にも入りたいたらしく一通り見学してから来るそうで、金穂は教室で新しくできた友達と話していたので置いてきた。

「宗次は自分で来るだろうし、金穂はあとで迎えに行けばいいだろう」
渉が目的地に近づいていく程人影が減っていった。

「部室があるのはこの廊下か？」

「なにか用かね？」

振り向けばそこには眼鏡で長身の男子とまぶたを閉じた髪の長い女子がいた。

「おや、君は、君はたしか土岐野君、だったかな？」

「あ、確か同じクラスの」

「そういえばまだ名乗ってなかったね。僕は居能科学^{いのうかがく}。こっちは占条未来^{じょうみらい}」

よろしく、と占条が頭をこくんとさせる。そして、何やら居能に小声で何か言っている。

「科学さん。もしかしてとうとうあなたの予言が当たるんじゃない？」

「なんと！そうだったのか！」

居能は叫び、渉の肩をつかむ。

「土岐野君、ここへは何をしに……」

何やら怖い感じだが渉は引きつつも素直に答えた。

「えっと、部活を探しに」

「やはり！」

また叫ぶ。しかも目の前なので肩をつかまれていたが渉は思わず耳をふさいだ。

「ふっふっふっ。今度こそ……！ついに！きた！土岐野君！僕は君の存在を待っていた。」

なにやら誤解されていそうな雰囲気である。

止めてくれないかと占条を見たが、なぜか泣いてもいないのにハンカチで目尻を拭いていた。

「さあでは部屋に案内しようではないか」

「悪いけど、その手を離してくれる？」

三人目「ええ、痛くないわ……………」（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

最後が誰だよ、って感じですが、まあ近い内に次話がのせられれば、と……………

今回は一般人（？）の新キャラが出てきて、この後涉の学校生活がどうなるか（は未定？）

次の投稿は多分この作品じゃないですね、わざわざここまで読んでいただきありがとうございます。

三人目続（前書き）

まさかの二カ月ぶりの投稿orz
前のお話から読んでいただければ幸いです…（ていうか読まないと
わからないです）

三人目続

「げ、不知火……！」

「……………不知火さん」

渉が後ろを振り向くとそこに眼鏡をかけた女子生徒が立っていた。

「もう一度言うわ。その子から手を離しなさい科学」

今まではしゃいでいた居能がぐぬぬ、と渉から手を離し下がる。

「土岐野渉君、だっけ。さあそんな似非でこっこ遊びのやつらは放つておいてついてきなさい」

「だれが似非でこっこ遊びだというんだ！」

「あなたたちよ」

「ぐお……………だ、だがしかし、土岐野君は僕たちが先に勧誘したのだ。今更遅いぞ」

「半ば強制でしょ。土岐野君、あなた、何の部活に入りに来たのかしら」

「えっと、自己探索部を探しに…」

しらぬい、と呼ばれた女子に迫られ答えるのに詰まる。

「本人が自己探索部に入りたいって言ったの聞いた？これ以上の勧誘は必要ないわね、それじゃ」

と言って立ち去ろうとする。が、一度止まり、

「私が自己探索部部长代理の二年、不知火民^{しらぬいたみ}。よろしく」

「何もあんな言い方しなくてもよかったんじゃないですか？」

去り際に居能の様子を見たが、すっかり元気をなくしうなだれていた。

「昔からあなのよ。気にしないでいいわ」

「昔から？」

「そう。あの二人と私は幼馴染み。今でも家が近いからよく顔を会わせるのよ。…二人は私について薄々感づいている部分があるみたい。だから『ESP研究会』なんてつまらないものを…」

最後の方はつぶやきになって涉にはあまり聞き取れなかった。

部室についたらしく、部屋の前でとまって扉に手をかけ、

「ここが部室だから。誰でも入れるよう一人ずつ鍵を渡しておくから。そういえば他に三人、全部で四人転校してきたって聞いていたけど？」

「一人は他の部活の見学に行つて、もう一人はまだ教室にいると思います。後一人は二年生で、そうだ、風間さんはどうするんだろ？」

「風間さんは他に任せてるから大丈夫………なはず。じゃあ私はその教室にいる子を迎えに行つてくるわ。あなたは先に部室にいて」

渉は鍵を渡され、部室に一人残される。

部室はもとは保健室だったのだろうか隅はカーテンで覆われたスペースと視力検査で使われる機械などが置かれ、半ば物置部屋になっていた。渉がすることなくイスに座っていると、部室の扉が開いた。

「こんちゃーっす！つて、一人だけ？ああ！」

入つてきた男子は渉を見て叫んだ。

「どうもお久しぶりっす！猿渡っす！」
さるわたり

「確かこないだの金穂かなほの時の……」

「あの時はどうもっす」

「いや、俺の方こそあのときは助かった。猿渡がいてくれなかったらあそこに行けなかったからな」

「いやーそれほどもあるっすか」

そう言われて猿渡はへへへ、と笑う。

「そう言えば涉さんはなんでここにいるっすか？鍵かかってませんでしたか？」

「それは私が鍵を渡したからよ」

猿渡が振り向けばそこに不知火が戻ってきていた。後ろには金穂と宗次がいて、宗次が手を挙げ、

「よ、何か集まるみたいだったから一緒に来たぜ」

「それと、この子が部室の前でおろおろしていたけど？」

金穂に隠れるようにして名加那なかなもいた。

「そうだったっす！涉さんがいたからつい忘れてたっす！ごめんっす名加那さん！」

「あ、いえ、別にいいです……………」

名加那はわずかに聞き取れる程度の声で話した。

「はつきり忘れていた、なんて言うもんじゃないわ猿渡君」

「すみませんっす……………」

「そう言えばなんで名加那さんもいるんだ？」

「この部活は中高共通なのよ。珍しいけどその方が何かと都合がいいでしょ？私たちには」

そう言つて、不知火は携帯を取りだし、電話をかける。

「……安司君。^{あんじ} ええ、こっちは揃つてきたからそろそろ戻つてきなさい。………はあ、まあいいわ。とりあえず急いでくること。はい、じゃあ」

携帯をしまいため息を一つ。

「待つてるのも退屈だから先に自己紹介を済ませておきましょう。わた……」

「だから僕は言つたろう！例え世界のどこにしようとも君が退屈を感じる前に君の前に現れると。そうだろ！愛しのた・み！」

そんなことを言いながらいきなり部屋に飛び込んできたのは、風間をお姫様抱っこした男子生徒だった。抱っこされている風間は何が起きたか分かつていないかのようにきよんとしている。生徒、と言つには大人びいていて、何より制服が白い。見た目はモテそうだがどこか軽いイメージを感じる男子だった。

「あなたつてつくづくだめで役に立つに人ね」

「君の役にたつために生まれてきたといつても過言ではないよ！」

「はあ……まあいいわ、それより風間さんを降ろしてあげたら？」

不知火の言葉に今更ながら風間は顔を赤らめた。

「名残り惜しいけどここで降ろすね愛風嬢。疲れてはいないかい」

「いえ、こちらこそ校内の案内楽しかったです」

「それは良かった！まだ案内してないところもあるからぜひこの後
にでも！その時は君もどうだい！い・と・しの…」

「では改めて自己紹介を始めるわ。自己探索部部長代理二年の不知
火民。よろしく」

もはや普段のやり取りなのか、周りも突っ込まずに不知火が自己紹
介を再開した。その後、知っている人もそうでない人も簡単に自己
紹介した。次いで、不知火が自己探索部の説明をする。

「自己探索部、表向きは心理学なんかを独学している部として活動
しているわ。といっても何をしているわけでもないから研究会とか
愛好会とかと変わらない扱いね。」

「何もしていないって……………」

それでは皆堂かいどうさんの話と違う。

「表向き、よ。実際この中で心理学を学んでる部員はいない。それ
に今いないのも兼部しててこっちにきていないくらいだし」

一度言葉を切り、部屋の奥を隠しているカーテンの前に移動する。

「私たちの本当の活動は“有事に備えて自身の能力を磨きその時に
応じて正しく使えるようになるべし”。このために必要な場所を提
供するのがこの自己探索部。…まあ、ある人の受け売りなんだけど」

不知火が言い終わると、安司が意味ありげに肩をすくめる。

不知火がカーテンを開けた。本来ならベッドがあるはずの場所に怪しげな石が置いてあった。

「猿渡君、よろしく」

「はいっす」

猿渡はその石をつかみ、次の瞬間には消えた。と思いきやすぐ近くに現れた。

「実はその石、猿渡君の能力、位置交換エクステンジしか動かせないのよ。ただ重いだけじゃなくて、何かしらの力で動かないようになっていたらしくて」

渉は前にも自分自身を運んでもらったが、能力の名前を聞いたのはこれが初めてだ。

「じゃあ今まではどうしてたんですか」

「今までは部長がどかしていたのよ」

「その部長さんは今日は来てないんですか？」

「……とりあえず今は先に説明を済ませましょう」

石をどかすとそこには穴が開いていて、先は白くてよく見えない。その穴に向かって不知火が歩き出す。

すると、不知火の姿が消えた。壁を通り抜けたとか穴に吸い込まれたというよりは猿渡の能力に近い。

「じゃ、お先つす」

と言つて猿渡も穴に近づき消えた。

「君たちも入ったらどうだい？もちろん！愛風嬢は僕と一緒に！大丈夫怖くもないし痛くもないよ」

渉以下初めて来た五人がぼかんとしているうながと促された。

穴に近づくと、というより近づいたと思つた時には部屋ではない場所_にいた。

「これはまた、すごいな」

後に続いた宗次が思わずといった感じで呟く。

穴を通つた（？）先は広い空間となっていた。一面白く、壁天井は見当たらない。昔話題になつた映画に似たようなシーンがあつたなと渉は思つた。

「ここが本来の活動場所。ここではそれぞれに合つた、望んだ形で能力の練習ができるようになってるの」

再び不知火の説明。

「じゃあもし武器が欲しいって言つたら武器の並んだ棚が一斉に出てくるとか」

「必要なら出てくるけど、何のために？」

つい気になったことを言ったら変な顔をされた。

「私はこの後すぐに行かなきゃならないけどあなたたちはどうする？今日は場所見せだけのつもりだったけど」

「できればさっそく訓練したいです」

渉が意思を伝えると、

「猿渡君は？」

「自分なら今日は最後まで居られるっすから平気っすよ」

「そ、なら説明とか後は任せるわ。いつも通り戸締まりだけはしっかり。それじゃ」

と言って今度は黒い穴となっている場所で不知火が消えた。

「不知火さんは生徒会の会長さんでもあるっすから忙しいんっす」

「その通り！正に民こそ眉目秀丽、才色兼備ってやつさ」

さすが、愛しのた・み！となぜか無駄に決めポーズを取る。

「そ、それで自分に合った訓練って言うってたけど具体的にはどうするんだ？」

渉もなんとかスルーするのも慣れてきて、猿渡に質問する。

「ああ、それなら簡単です。ちょうどいいです宗次先輩、金穂先輩、名加那さんにも教えとくです」

猿渡が注目を集めるよう一歩前に出る。

「まずはって言っても一言いうだけです。…『訓練開始』」

猿渡がそう言うと、白かっただけの床に赤、青、緑、の色が浮かび上がった。四角に区切られて並び、それぞれ真ん中だけ丸く切り取ったかのように違う色になっている。

「このパネルの色と真ん中の色を能力を使って揃えるのが自分の訓練です」

説明しながらも猿渡は能力で移動を繰り返し次々と色を揃え続けた。全てのパネルの色が揃うと、レベルアップのような音が鳴り、枚数と色が増えた新たなパネルが現れた。

「これを繰り返しいくとだんだん難しくなっていくです。で、終えたいときは『訓練終了』って言えばいいです」

すると、パネルが消え、もとの白だけの床に戻った。

「他にも『修行開始』とかただ『終わり』って言っても平気です。えと、何か質問とかあるっすか？」

「なんだかゲームみたいで面白そうだな！訓練って聞いたからもっと違うのを想像してたが」

宗次が一番に感想を言う。

「ふええ…なんだか難しそうです……」

「その、これって実際訓練になってるのか？」

「もちろんっすよ渉先輩！これのおかげで能力の速さだけじゃなくてどうやったら最短距離で移動できるか、地形をおかしくせずに問題なく移動できるか、とかだいぶうまくなったんすよ。……まあ最初は確かに訳がわからなかったすけどね」

猿渡は思い出したのか苦笑を浮かべる。

「あ、もちろんこれは自分ので、皆さん一人一人違うものになると思うっすよ。けど絶対役に立つ訓練になるはずっす！」

と力説する。

「よし！これなら俺もやってみようかな。どんな訓練になるか気になるな」

「私も先ほどの猿渡くんのような訓練でしたらしてみたいですわ」

どうやら今のをみて宗次と愛風がやる気になったらしい。

渉もやる気は変わらないが、ちょっと肩透かし食らった気分だった。

「名加那さんはどうするっすか」

「え！えと、じゃあ、その……け、けん、見学、で」

「そうつすか……」

金穂は、と見るとどうやら疲れているらしくいつのまにか用意された白い机と椅子で船を漕いでいた。

三人目続（後書き）

読んでいただきありがとうございます、じゅじゅんがじゅん樹純我純です。

小説書くのをあきらめたわけじゃないです。ただとある検定に向けて勉強していたからです。

と、今のパートがあまり書きたくないっていうのもありました。けれど今度こそ週一くらいで定期投稿できればなと思ってます。気に入っていただけたらコメント、ご指摘お待ちしてます。

わざわざ最後まで読んでいただきあらがとうございました。では。

三人目続2（前書き）

サブタイのまんまです。

読まれる際には前のお話を読んでいただけたら幸いです（じゃないとわかんないです・・・）

三人目続2

「『訓練開始』！』』」

三人の声が同時に訓練開始を告げる。

その様子を金穂かなほと同じくいつのまにか用意された椅子に座り猿渡さるわたりと名加那なかなが見学していた。

まずは宗次そうじの訓練。

宗次の前に金魚鉢が現れた。その中は人魚の飾りに真珠ののつた貝、そして水が並々と入っていた。肝心の金魚がない以外変わった所はない。

変わっているのはその隣。分厚い黒い板のようなものが置かれていて、『水』と文字がくりぬかれていた。

「これは、…………謎解きってやつか」

とりあえずといった感じで宗次は金魚鉢の水に触れる。宗次の超能力は水を操る能力で、自分の触れた水を清め、操ることができる。

考えるように腕を組むがすぐに止め、金魚鉢の水を操って『水』の文字に移す。

レベルアップの音が鳴るか、と思ったがいくら待っても変化がない。

「そんな簡単ではないか……………としたら……………」

宗次は一度水を戻し、しゃがみこんで金魚鉢をいろんな角度から眺め始めた。

次は愛風。あいかぜ

愛風も同じく詰まっているようだった。

愛風の訓練にはフラフープのような細く大きいリングが使われていた。そのリングは自立していてまるでレースゲームのチェックポイントみたいに三個のリングがバラバラに浮いていた。

愛風は恐る恐るといった感じで一つのリングをくぐる。くぐったりリングは一度消えたかと思いきや、すぐに現れた。

「そういえば、風を全然使ってませんでした」

両手を合わせ肝心なことを言う。愛風は風を操る能力で本人はそんな自分の能力、風が好きだと言っていた。

「んー、くぐるのは当たりなんでしょうか？そうすると、」

愛風は風を起こし流れを作り始めた。

どうやら風でバラバラのリングを一つにまとめようとしているみたいだ。が、若干動じやつかんくもののリングは抵抗するかのようにそれぞれの場所に留まる。

「んんん……………はあ」

愛風は顔が真っ赤になるまで頑張ってみたが、リングは一つも動かなかった。

そして、渉は、というと。

渉の前にはひとつのベッド、そしてベッドを挟んだ向こうにはガラスなのか、透明なボックスが愛風のリングと同じく三つ並んでいる。

「これは、どうしろと……?」

ベッドには毛布も枕もない。

とりあえず寝ればいいのか……?

とりあえず寝てみようかとベッドに腰掛けた瞬間、渉の意識は落ちていた。

何かの衝撃で目が覚める。

「痛ってー……何だったんだ?」

なにか夢っぽいものをみた気がするけど全く覚えていない。覚えてるとしたら起きる前に、頭に衝撃が走ったことだけだ。

「んー、超能力の訓練なんだから今の間に自分を能力を使ったのか……」

渉の能力はいわば予知能力なんだが自分の意識がない時に未来のことを視ているらしくいきなりであつたりすると全然覚えていない。

もう一度ベッドに寝てみるが、眠くもならないし、意識もなくなる気配がしない。

「つまり一回きりってわけか」

とすると残ったのは三つのボックス。大きさは掃除用具のロッカーくらいで渉なら入れるだろう。そしてこの感じはバラエティーのテレビなんかでお馴染みのアレに非常に似ている気がする。

「さすがに気のせいだよな」

と、言いつつも右端のボックスに入ってみる。

中に入って閉めると開かなくなった。透明なので入っても猿渡たちがこつちを見てるのがわかる。

と次の瞬間、

「じあっ」

頭に鈍い衝撃とバン！と薄い金属を叩いた音がした。渉の頭に落ちてきたそれは間違いなくタライだった。

「あっはっはっはっ……いや、まさかタライとはね。そのセンスはさ

すがにないなあ」

「いや先輩笑っちゃ涉さんに悪いっすよ」

そういった猿渡も少し笑っていた。

「うう……痛そー」

名加那は思わず自分の頭をおさえつぶやく。

「いや、でもあれだね。土岐野君だっけ？彼はともかく愛風嬢とともう一人の方はコツさえつかめば簡単そうだね」

「そうすっね。自分のと似てる気がするっす。それを言ったら涉さんの先輩と同じ感じじゃないっすか？」

「どうせなら愛風嬢と同じになりたかったよ。しかしタイとは、くく、出来るようになるまで何回落とされるんだか」

涉が痛てー！と叫んで透明のボックスから出てくる。

「そっいえばかなちゃんも訓練、しないのかい？」

「ひっ、わ、私ですか……………」

名加那は涉の方をみて首をブンブンと横に振った。

「あははは、まあそんなに怯えることはないよ。無理に訓練なんてしなくてもいいし。今日はこのまま一緒におしゃべりしようか」

「あ、名加那さんを口説いてるといつかみたいに不知火先輩に『このロリコン！』って言われちゃいますよ」

「ふう、わかってないね猿渡。女性にロリもオバもないよ。あるのは美人が可愛いか、といつても！僕の周りの女性達はみんな美人が可愛いんだけどね！」

「そして先輩はモテモテっすね」

猿渡は慣れているのか決めポーズを取る安司に軽く合わす。

その後、「さすがに頭が痛い」と言った渉が最初に訓練を止め、宗次、愛風も訓練をうまくできずに終了した。訓練部屋から部屋に戻ると、すでに外は暗くなりつつあり、下校時刻が迫っていた。帰る場所は全員同じなのでそれぞれの訓練の事や猿渡のアドバイスなどを聞きながら帰った。

帰った後は夕飯を食堂で食べ、自室に戻ろうとした時に自販機の前で鬼灯ほおずきと会った。

「あ、渉君。今日初登校だったんだよね。どうだった？」

鬼灯も渉に気づき話しかけてきた。

「うん、まあ変わった連中が多かったけど」

担任とか。

「学校は楽しくやれそうかな。初日にはずいぶんフレンドリーだったし」

「そっか、転校して良かったね」

ふふ、となにか思い出したように笑う。

「あ、占条さんせんじょうと居能君いのうには気を付けてね。多分渉君や宗次君のこ
と、ESP研究会に勧誘してくると思うから」

「さっそく勧誘っていうかそれで一悶着あったよ」

そう聞いて再び鬼灯が笑う。

「あれ、鬼灯は今日学校でみなかったけど、どこにいたんだ？」

渉の疑問に鬼灯が笑ったまま止まる。

「え、あー……その、今日は休んだの。そう、えと、任務で。ごめんね一緒にに行けなくて」

鬼灯が珍しくはつきりとしないうべり方をする。鬼灯と会ってからだいぶ経ったけど初対面の時と比べると、印象が全然変わったんじゃないくて。

「そう言えば俺がこっち来てからも学校があるはずの時間とかにもいたよな」

思い出すと、平日の昼にみんなで一緒にお昼を食べていた気がする。

「それは、ほら私は任務優先にしてるんだ皆堂さんには話して納得してもらってるしだから学校は休みがちで決して行っていない訳じゃないんだよ！？そう言えば渉君自己探索部には行ったんでしょ。どうだった訓練？」

矢継ぎ早に言われて鬼灯が何を言ってるかほとんどわからなかったけど、最後だけ聞き取れたからとりあえず話題を変える。

「お、おう。……正直想像してたのと全然違う。宗次や風間さんはまだ訓練の内容がわからないらしい。俺の訓練は何をすればいいかわかるけど、間違えるとタライが降ってくるんだぜ？しかもまだ成功してないし」

「確かに、最初はちよつと戸惑うよね。けど必ず渉君のためになるはずだから諦めずに頑張つてね」

渉の話を聞いて落ち着いたのか、やはり猿渡と同じことを言う。

「猿渡もためになるつすつて言ってたんだけどな。鬼灯はどんな訓練だったんだ？」

「私のはなんていうか、気合いで割る、みたいな？うん気合いつていうか私自身から出ている念、ていうか見えない力を使って動かしたり割ったりする訓練だったの。けどその時はあの赤い腕は出てこなかったしいま比べてみてもやっぱり力の作用の仕方とか効果が違う気が、けどあそこでは対人で訓練した訳じゃないしそもそも対人の訓練や特訓であの力は使わないように言われていたから……」

「あの一、鬼灯さーん」

鬼灯の思考の眩^{くら}きが始まってしまった。こうなってしまうと今の涉では呼び戻せそうにない。

なので、鬼灯が持っているけどまだ冷えている缶を取って頬に当てる。

「ひゃあ!？」

鬼灯がびっくりした声を上げ背筋がピン!となる。

「戻ってきた？」

「……うん、戻ってきた」

なんで、俺が意地悪したみたいになってるんだ。その後も他愛のない話をしていたら、気がついたら遅い時間になってたのでお互いお休みを言って部屋に戻った。

それから二日後――

もう定番となりつつある有川、高梨、文谷、それに占条と居能メンツに今日は金穂を加えて机を囲みお昼ご飯を食べていた。

「つまり旧家の出なんですね。教育も学校には通わず自宅で家庭教師に教わっていたと」

「そうじゃ。旧家では専門の教育を学んでいてこういう学校で学ぶようなことはあまり教わってなかったのぉ」

文谷の希望で金穂を呼んだが、案の定質問攻めにあっていた。

しかし、金穂も嫌な顔をせずどんどん答えていく。

「そうじゃ文谷。鬼灯を知らないかの」

言葉使いは段々と普通になってきてるが、“そうじゃ”と語尾の“の”がまだとれていない。

「ほおずき？」

「神山さんの事ですか」

金穂が鬼灯に対して聞くと急に気まずい雰囲気になる。それに気づいていないのか金穂が続ける。

「そうじゃ。てっきり学校でも会えるかと思ってたのに姿を全然見てないの！」

渉も気になっていた。昨日会った時本人に聞いてみたが話をはぐらされた気がする。

「神山さんは一応このクラスの人なんですが事件といえますか」

「文屋」

有川がくぎを刺すように文谷を睨む。

「さすがに自分も事が事だけにゴシップ扱いするつもりはないです

よ。……さて、神山さんですが三週間前ですか、校内で喧嘩、それも手足が出る喧嘩をしまいまして、しかも男子数人相手に返り討ち。前々から武道の心得があるとは思ってましたが、今度は」

ん、と話が脱線する前に有川が咳払い。どうやら有川はみんなの仕切り役になるようだ。

「失敬。…で、男子数人を返り討ちにした際に一人病院送りにしてしまったのがまずかったです。一応学校側としては事を大きくしないよう本人たちの話し合いで解決しようと思っただけなんです。肝心の神山さんがその日以来登校して来ず、連絡も取れない状況らしく。そうなると必然、喧嘩した男子側からだけの証言となり、変な噂や混乱を招いてるわけです。男子側の言い分では神山さんの方から手を出した、との事ですが、はつきり言っただけの情報を集めるまでもなくそれはないと思います。が、最初から見ていた生徒など他に目撃情報もないので男子たちが嘘を言っていると断定はできない状況です」

「「鬼灯はそんなことしない!!」」

渉と金穂の声がシンクロする。

「そうだな。神山はそんなやつじゃないと思ってる。あたしも詳しくは知らないけど、少なくとも神山から殴りかかったとは思えない」

「私もそうだと思う。神山さん、普段はおとなしいしやさしい所があるし。学校を休みがちだったからそんなに会ってないけど」

有川と高梨がそれぞれに意見を述べる。

「神山君は我がESP研究会に誘ってみたけど。あいにく自己探索部に入っているというから思わず逃げ出してしまったが」

「ただ、それならなんで今も学校を休んでいるのかがあたしにはわからない。後ろ暗いことがないのなら学校に堂々と来ればいいものを」

「それはそうだけど……。もしかしてやりすぎたと思って学校に来れないんじゃないかな」

「そんなことで逃げ出すようには思えないんだけどね」

「別に逃げ出すとか、」

渉は金穂と目を合わす。さすがに金穂も分かっているらしく黙っている。渉たちには何となく心当たりがあるのだ。けどそれを言い出すこともできずにいると、

「そう言えばお二人は神山さんの事を知っているんですか。いや、親しいなら彼女が学校に行っていないのを知らないわけがないし……大体二人とも引越してきたばかりのはずでは？その辺、どうなんですか渉氏、屋敷氏？」

文谷に気づかれて欲しくない事に気づかれました。金穂はあまりピンと来ていないらしく、かといって渉もうまい言い訳が思いつかない。

二人の沈黙に机に揃っているメンツの視線が集まる。

その時、都合よくも昼休み終了を告げる鐘が鳴る。

「ほら、早くつていうかもうお昼食べてる時間ないぞ！」

急ご急ご、みんなを急かす。文谷は納得がいかないようにするが質問を止め、皆も机を片つける。偶然に拾われる形で何とかごまかせた。

放課後、担任の大桃先生に鬼灯の事を聞くと、「先生は待とうと思うの。神山さんは落ち着いたらきつと自分から学校に来ると思うし」と普段からは想像できない真面目な答えが返ってきた。涉や鬼灯の事を知ってるのか？とも思える発言だったが、「そのあれよ？生徒の自主性を尊重するという名の職務放棄！引きこもりの助長よ！ということ引きこもってくるわね」と言い残し去っていったため、結局知っているのかどうかわからなかった。

宗次と金穂は先に部室に向かったため、涉もいそいで廊下を移動する。

それほど複雑ではないといえ、まだ通って数日の学校ではどの道が近いのかわからない。とりあえず確実に知っている道をいそいで行くと、

三人目続2（後書き）

どうも読んで頂きありがとうございます。

大体この物語はこんなペースで進んでいくと思います。
次で三人目終わりです。

三人目「……ていうのが一番イタいのよ」(前書き)

今回で三人目(三話目)も終わりです。
てか主人公能力使ってない……

三人目「……ていうのが一番イタイのよ」

「……かみやま神山の奴はどうした？」

確かに、神山という声が聞こえた。

わたる 渉のクラスがある教室から部室棟に向かうためには一度一階におり、校舎外の渡り廊下を歩かなければならない。部室棟へは靴に履き替えてからも行けるが、主に運動部の倉庫となっている部室棟には靴を置く場所はないため渉は渡り廊下を通って向かっている。

気のせいかな、同じ名字の他人だろうとは思っけど、

「昼間の話が本当なら……」

今の声は鬼灯ほおずきと喧嘩けんかしたという男子数人のうちの誰かの可能性が高い。すでに部活は始まっている時間のため、こんな移動するだけの場所に誰もいない。

渉は渡り廊下から相手に見えないようしゃがみながら覗き様子を見る。

どうやら男子が三人だろうか。部室棟と高等部校舎の間で話してるため、声がよく聞こえてくる。

「その前に他の奴等はどうした？なんで高松と新垣だけなんだ」

「……木下、お前が入院してる間に色々邪魔があっただよ。それだけじゃない。ほとんどの奴らがお前が入院したあの騒ぎでビビ

「つちまっただよ。所詮、俺たちみたいな普通の人間が敵いっこないって」

「どうやら最初に聞いた声の男子が入院していたらしい。だが渉はそれよりも気になることがあった。」

「俺たちみたいな普通の人間？」

「…正直俺だつてもう」

「っざけんな！裏切んのかよ！」

「しょうがねえだろ！明らかに手加減されてたじゃねえか。それをお前が下手に挑発するから…」

「だからムカついたんだろ！女子だから甘くみてたがまさか手加減までされて。わざとカマかけたんだよ。そしたら案の定あの力だ」

二人が思い出して震えるのに対して一人が笑う。

「ぜってー潰してやる超能力者が」

「渉はその言葉を聞いた瞬間、立ち上がってしまった。別になにするわけでもなかったが、座っていられなかった。」

「あ、なんか用か」

「無論、三人に渉は見つかる。」

「これ以上鬼灯に嫌なことはさせない」

「あ？」

「おい、さっきの話聞いてたんじゃね？」

「今更この学校の生徒に聞かれたって問題ねえだろ」

高松と新垣が小声で話すが、

「“ほおずき”ってことはお前神山と親^{した}しいやつだよな。けどお前の事なんか俺は知らないぜ。どうなんだ？」

どうなんだ、が自分達に向けられていることに気づいた二人は慌てて渉を見る。

「言われてみれば見たことないな。あんだだけ調べたのに」

「あ、こいつ三人同時に転校してきた一人だ」

目の前の三人は同じクラスじゃないけど、さすがに他のクラスにも知られているらしい。

「へー、ってことは学校の外で神山の事を知ってるってことだよな」

木下の言葉に涉までもがハツとする。

「お前、超能力者だろ」

時間が止まったかのような沈黙。が、その沈黙も木下の笑い声によ

つてすぐに壊される。

「はっはっはっはっはっは、はぁ……………やれ」

その途端^{とたん}、渉は走り出した目指すは部室。と同時にやや速く高松、新垣も渉を捕まえようと走り出す。部室棟は一応土足禁止だが今そんなことを気にするものはいない。

二人分の足音が渉を追いかける。

部室には階段を上がらなければならない。

渉が階段に足をかけた時、後ろから襟首^{えりくび}を掴まれ引つ張られた。バランスをくずし、後頭部を勢いよく廊下にぶつけた。気絶するかと思ったが、目の前が一瞬白くなっただけだった。痛みを無視し立ち上がろうとするがその時、胸を思いつきり踏まれる。踏まれて咳き込むが、体重をかけられうまく咳き込めない。

「まさか、カマかけのつもりで言ったことが本当になるなんてな」

声は渉たちに追い付いた木下のもの。

「カマ……………かけ……………？」

「ああ。俺が入院するきっかけにもなった言葉。『お前が無理ならお前の仲間から殺してやる』ってな。そしたら神山のやつ、キレやがった。ほんとはまだヒビが入ってるんだぜ」

ほら、と腕を上げる。特に包帯が巻かれているわけでもないしわかるわけがない。そんな事は木下もわかつているんだろう。

「でもまあこうなったらお前を人質にして他の連中も潰す。そうすりゃ不登校の神山も登校してくんだろ」

「するわけないじゃない」

そう答えたのは涉でも他二人でもない。

階段の上から見下ろす影が二つ。

「不知火……生徒会長様までそっち側かよ」

答えたのは不知火^{しらぬ}。そしてもう一つの影は、

「男しかない状況で今の君はまるで陽の光のように輝いているよ、愛^{たみ}しの民」

不知火を褒め称える安司^{あんじ}だった。

「それは本当の陽の光のせい。…にしてもまさか彼女がそんな安っぽい脅しを気にしてたなんて、神山さんも本当に……。まあ彼女らしいわね」

「まあまあ、鬼灯^{ガール}はそれだけ僕たちを大切にする優しい子だってことじゃないか。むしろ純粋^{ペイビ}なくらいだね」

「むしろっていうなら私たちを信じてないんじゃない？いくら私たちでもこの程度の連中にやられるほど弱くないわ。余計なお世話よ」

「……言ってくれるじゃねえか。ならそれ以上無駄口叩くようなら

この人質を遠慮なく使わせてもらっぜ」

木下は渉の人差し指を両手で握る。指を折るつもりだろうか。渉がそれに気づく前に、

「安司君」

「さすが愛しの民。完璧だよ」

その二言で全てが終わった。不知火の言葉に返事をした安司は相変わらず彼女の傍^{そば}に立っているが両手にあるものを持っていた。

それはつまり、右手には踏まれていた渉を、そして左手には渉を踏んでいた高松、そして新垣の二名を持っていた。

今この場を支配しているのは木下から完全に不知火、安司に移った。

「助けるのが女性なら口説き文句も出たのにね」

安司が言葉を発したことでそれぞれがようやく反応を取り戻す。

「うわ」

「え、ちょ」

「????」

といつてもどれも要領を得ない反応だった。

「……んな、……っけ……っけんなっざけんなざけんな！」

木下が見上げ怒鳴る。

「殺す」

その一言を放ち、階段を登ってくる。安司が騎士のごとく前に出る。

「安司君、その二人をよろしく」

しかし不知火は、安司を退け、さらに安司の一步前に出る。

「っ、オーケイ、愛しの。僕はいつだって君の言葉を信じて生きてきたよ」

安司は涉から手を離し、人二人を片手で掴んだまま、目にも止まらぬ速さで階段を登っていく。

尻餅をついた涉が目にしたのは終わりのない決着。

木下は階段を登り、最後の一段と同時に勢いをつけて不知火に殴りかかる。

一方不知火は避けようと防ごうともしない。

木下の拳が不知火に当たる。が、不知火が倒れるどころか殴られた音も聞こえない。

チツと舌打ちし、再び殴る。殴る。殴る。殴る。

涉から見て、不知火の背中しか見えていないから当たっているのか

どうかわからないが、木下の殴り続ける動作だけが続く。

やがて、木下が汗だくになって動きが鈍^{にぶ}くなるがそれでも殴り続ける。息が切れ切れになりながらも睨み付け叫ぶ。

「くそ………なんで………なんで、当たらねえんだよ！」

その言葉に先程から殴られ続けているが余裕をもって不知火が答える。

「当たってるわよ。けれど私は痛くないし殴られた威力は届いてない。この際だからはつきりさせておきましょう。神山さんの事といい、今回の事といい、いい加減ウザいのよ。一体あなた達^{ふつうの一般人}が何様のつもり？」

不知火は一度言葉を切り、左手で木の下を突き飛ばす。階段の上で殴り疲れて油断していたのか木の下はあっさりと転げ落ちる。そして不知火は突き出した左手の制服の袖をめくり手首の部分を木下に突きつける。木下は何を見たのか、目を見開き怯むように後ずさる。

「わかる？あなたが殴っても殴っても傷つかない私が、そんな私を傷つけられるのは私自身だけ。この傷に触れることができるのも私だけ。つまり生きるも死ぬも私が自分で決めることができる。他のいかなるものも傷つけられない、私だけ。ましてやあなたごときにできる事はないのよ。」

これが私の能力『アンタッチャブル・ガール』^{アンタッチャブル・ガール}。不可侵処女^{アンタッチャブル・ガール}。

あなたがどうして私達を気に入らないか知らないけど、もし憧れの裏返しや興味本意だとしたら、迷惑よ。去りなさい。私達の前から」

そこまでをばーとした顔で聞いていた木下はゆっくりと立ち上が

り何も言わず走り去っていった。

「立てる？」

「あ、はい」

今まで屍餅をついた体制でいた渉は不知火の手をかりて立ち上がる。その時、手首に走る三本の切り傷が見えた。

渉の視線に気づいた不知火は苦笑し右手で左手首をさする。

「昔の事なんだけどね。ちょっとやけになってた時期があつてね。なんで生きてるんだろって。今まで何度も死にそうながあつても自分は決して死ぬことはなかった。ただ、周りの人間はそうじゃなかった。どうして私だけが、て考えてたのよ。色々やってみたのよ。飛び降りとか首吊りとか。でも死ぬこともなく、怪我することもなかった。この能力のお陰かげでね。だから私は自分の能力が大嫌いだった」

自嘲気味じちやうきみに笑い手首を見つめる。

「やっとうまくいきそうになったのがこれ。リストカットでも、結局は死ねなかった。流れる血を見てたらこんなことで死ぬのかって思ったらどうしても怖くなっちゃって。それでも諦められないというか半ば癖くせのように繰り返して。そして三度目の時に神山さんに発見されてね。あの時は彼女も自分の能力をコントロールできてないのに必死に私を助けようとして。……彼女のあの見えない力みたいので無理矢理私の能力を破って手首に包帯を巻いてくれて。包帯も血まみれでね、私の血だけじゃなかったと思う。気がついたときには彼女の手の方が真っ赤だった。多分指が折れてたんだと思うのよ。それからなぜ

か知らないけど二人で泣いてそれ以来、二度とこんなバカなことは止めようって決めた。

って何恥ずかしい事はなしてんのって感じなんだけど。さっきまで尻餅ついてた土岐野君もそこそ情けなかったのでオアイコで」

涉が何も言わなかったので変にとったらしい。

「迷惑だった？もしかしてドン引き？」

「い、いえ、ただ俺なんかが聞いてよかった話なのかなって思っ

「愚痴みたいなものよ。昔の事だし」

その時、階段の上の方から悲鳴が聞こえてきた。

少し前、屋上。

「やめろ！降ろせ！降ろしてくれ！」

「いいのかい？今降ろしたらこの屋上から飛び降りるとイコールだよ？」

「ひっ」

「まあまあ、僕は女性以外はお姫様抱っこしないことにしてるんだ。だって野郎を抱っこしてもお姫様抱っこにならだからないだろ？だからこのまま跳んでみようか！せーの、ブーン！」

「「うあああああ……」」

「どうやら安司くんも片付いたみたいね」

行きましょ、と部室へと向かう。

「そうだ。後から恩着せがましくなっちゃうけど、一つ頼まれてくれる？」

「緊張してる？」

「ううん。なんていうか、学校での私って多分涉君たちと話してる時とだいぶ態度とか雰囲気とか違うからどうしたらいいかわかんなくって」

「大丈夫！鬼灯はいつも鬼灯としてればいいのお！そうじゃそう、じゃ！今日は一緒に、えーと、らんちを食べるぞ」

「ありがと。でも金穂ちゃん、そのそうじゃって言うのは止めきやだめだよ。普通の女の子はそうじゃ、なんて言わないんだから」

「ぬー。わかっておる、じゃなかった、わかってる」

不知火さんに頼まれたのは鬼灯を学校に連れてくることだった。いわく、「もう変な問題も解決できたし神山さんにも君たちの訓練を手伝ってほしい」とのこと。

渉もちろんそうするつもりだった。帰った後、さっそく鬼灯が学校に行かなかった理由を知った経緯^{けいゐ}、学校であった事を話した。

原因は半分は正しく（もう半分は本当に任務優先のためだったらしい）、しかし理由は木下の脅しだけじゃなかった。鬼灯は鬼灯で自分の力不足で木下を入院させてしまったのを気にしていたらしい。らしいと言えばらしいがやはりいつまでも逃げていていいはずがない。

金穂や宗次にも協力してもらいなんとか説得して、さっそく次の日からこうして一緒に登校することになった。

「あれ、そう言えば鬼灯って二年生じゃなかったっけ？」

「え、ああ、それは確かに年は渉君たちより一つ上だけど学校は16歳過ぎてから通い始めたの。だから学年は一つ下にしてもらってるの」

てへへ、と照れ隠しのように笑う。

学校に着き、教室の前に来る。鬼灯は中々扉に手をかけようとしてない。その姿が以前の自分と被ってしまっただけだったので、その時、教室に中々入らなかった自分に親友にしてもらったように扉を開けて上げ、声を上げる。

「みんな、おはよう！」

三人目　了

三人目「……ていうのが一番イタいのよ」（後書き）

今回も、（多分この話を読んでいるということは初見さんではないと思うので）読んでいただきありがとうございます。

ここで一区切りついたわけで、怖いのがこの後の展開がまだ決まっておらず（話はあっても順番が決まらず）、また投稿が……になりそうです。

まあ勝手に投稿しているだけなので読んでいる人がいなければただの独り言なんですが。

よし、多分次は渉の目的に近づくお話っていうことで（一話参照？）
、という意味のない予告をしようと。

わざわざここまで読んでいただきありがとうございました。

四人目「キレイで、かわいくて、セクシー……………」（前書き）

これが四話目にあたります。

季節は真逆の冬のお話です。特に冬は関係ないです。

四人目「キレイで、かわいくて、セクシー……………」

『ハートロック』クリスマスライブ！！

ハートロック初のクリスマスライブ！！もちろん、今回も最後にロックのトークショーが行われる予定。果たして、聖夜に降りてくるのはサンタか、天使か――

チケット予約はこちらから――

鬼灯^{ほおずき}が登校しはじめて約二ヶ月――

最初の数日はクラスにギクシャクした雰囲気 flowed ものの涉、金^か穂^{なほ}、宗次^{そうじ}が積極的に輪に囲むことで段々と鬼灯らしさが出てきて、前以上にクラスに溶け込んでいった。

部活動も（部室以外では訓練、とは言えないので）一ヶ月以上続けられさすがにコツをつかんできた。訓練はそれぞれが自分に合った方法で超能力を鍛える事ができて、部室の壁にある謎の空間で行われている。

宗次の訓練は、水の入った金魚鉢と文字が彫られた黒い板を使ったもので、今まで文字を水で満たすだけかと思っていたが、さすが宗次と言うべきか、二日目に金魚鉢に入っている真珠が鍵だと気づき、水の中心に真珠をつかんで、そのまま文字を書き順通りに水を満たす事が達成条件だと気づいた。

宗次に言わせると、水で何かをつかんだまま操るのが難しいらしい。コツは真珠をペン先だと思って書く、というものだった。

訓練は一つ達成すると難易度が上がって同じようなのがまた出てくる。今では真珠が大きなあめ玉くらいあり、文字の画数もより多くなった。

愛風あいかぜの訓練は、自立浮遊するリングを三つ使った訓練で、達成するにはそのリングを足を一度も地面につけずにすべてくぐる、というものだった。そのためにはリングではなく、自分を能力の風で浮かし続けてくぐる必要があった。

一度それに気づいてからは愛風は楽しんで自分を浮かし、高い場所に浮かんだリングまで飛べるようになった。今ではスカートの下にジャージを履いて（スカートのまま飛ぶわけにはいけないので）訓練に励んでいる。多分、三人の中で一番上達が速い。

渉も上達しないわけではなかった。

渉の訓練は三つのボックスに入って、タライが落ちてこないボックスを予想するもので、そのためには用意されたベッドに横たわり、先にタライが落とされる未来予験みらいよけんをして避ける、というものだった。

渉は初日からその訓練内容に気づいていたが、なにせ未来予験するには意識を失う必要がある。その間に能力が発動するため、夢と同じようなものでその内容はほとんど覚えていなかった。

けれど、頭はが禿げる心配もしながらタライを落とされ続けるうちにようやく、起きて覚えていられるようになり、高い割合で達成できるようになった。そして、難易度の上がり方は能力発動時間、つ

まり意識を失う時間が短くなるのと、ボックスの数が増える事だった。更にそれだけじゃなく、失敗した場合、トライじゃなくてブリキのバケツが落ちてくるようになった。

こういったものは全て白い空間から湧き出るように用意されるが、未だにこの部屋（閉鎖空間って言うのだろうか）は謎が多い。

とまあこんな感じでこの二ヶ月過ごしてきた。

「訓練終了」

渉は今日の訓練を終えた。渉は同じ難易度の訓練を十回やってもできなかつた場合はやめるようにしている。（というよりもそれ以上何かが頭の上から降ってくるのに耐えられない）

今日は三回目まで達成することができたな。

「修行終了」

渉が終わると、鬼灯も自分の訓練（鬼灯自身は修行と言っている）を終えたらしい。

「お疲れさま」

「うん、お疲れ。はあ、疲れた。今日は結構集中できたかなあ」

鬼灯は軽く頬を上気させ額の汗をぬぐう。

「渉君はどうだった？」

「三回目までは行けたけど、また邪魔されてダメだった」

「また例の夢？」

「ああ、全然訓練の事と関係なさそうなんだ。内容が笑っちゃう話でさ。その、佐藤と再会した夢なんだけど、そいつがなんか派手なはっぴ、みたいな着ててさ。雰囲気がぶち壊しというか」

最近、渉は訓練中に関係ない予験をすることが希にあった。

「そつか。でも再会できてよかったね」

「え？」

「ほら、渉君の夢は必ず現実になったじゃない？だからさ、きっとその夢も叶うんじゃないかな」

鬼灯は佐藤が渉の行方不明になった友達だという事を知っている。思ったより気にしてくれているのかもしれない。

「そうだよな。ありがと」

「い、いや別に。汗かいたからのど乾いちゃった」

鬼灯はこちらに背を向け持ち込んだスポーツドリンクを飲む。

鬼灯の訓練は動きが激しく、汗をかくので必ず飲み物持って動きやすい格好に着替えてくる。もう冬なのにまだ薄着であるため、つい目で追ってしまう。が、首を振り視線を外す。冬でも夏でもこの環境は安定していて、これもまたこの空間の不思議のひとつだ。

スポーツドリンクを飲み干しこちらを向いた鬼灯に質問する。

「鬼灯、訓練って冬休みに入ったらどうなるんだ？」

「そういえばどうなるんだろ？夏休みの時は部室棟は解放されてたから同じだと思っけどでも冬休みは…」

「ストップ——ッブ！」

さすがに鬼灯のつぶやきタイムのタイミングがわかってきて先回りして止められるようになった。

「は、ありがとう。これじゃ金穂ちゃんに癖を注意できないよね」

確かに、といって笑い合う。

鬼灯と愛風の着替えが終わり、みんなで喋りながら下校する。

こうしていると、渉はどうしてここにいるのか、時々、自分の目的を忘れそうになる。今の生活はそれほど充実していた。いつかここに、二人の親友を混ぜて下校できる日が来て欲しいと思うえるようになっていた。

風呂上がり。まだ寝るには早いと思って二階の共有フロアに行くと、渉と同じ考えの人達が思い思いにくつろいでいた。

そんな中に宗次と猿渡の姿もあった。渉は声をかけようとする、後ろから服を引っ張られる感覚がした。

振り向くと、

「坂上^{さかがみ}か。何か会うの久しぶりだな」

体半分を壁に隠して手だけを伸ばし、渉の服を掴んでいる坂上^{さかがみ}薫だった。

坂上は部屋が渉の隣でここへ来た頃の渉と一緒に自分の能力が何だかいまいちわかっていないらしい。ちなみに小柄だが渉と同じ年でもある。

「ちょっと来て」

と来た方の廊下に引っ込む。こそそとしてるが、那加^{なかな}名とはまた違う。

人がいないとこまで来て落ち着いたのかこっちを向く。坂上は自炊もしていて部屋にこもりっぱなしの事が多く、人と話すのが得意じゃない。

「話がある」

「ああ」

「……………」

「……………」

前にも似たことがあり、その時急かしたら結局話してくれなかった。なので、今回は辛抱強く待ってみる。

「…………たしか、前、」

「前？」

なぜかムツとし、

「ここに来たての頃。話してた時」

「…あ、ああその時か」

「その時に言ってたよな。ここに来た理由」

……確か言ってた気がする。でも今はそれだけでここにいるわけではない。

「よく覚えてたな」

「つべ、別に覚えてたとかじゃなくて何となく引つ掛かっただけで言うか、大体あんまし聞けなかったし」

そこまで否定しなくても言いんじゃないのか？とは言えない。

「悪い悪い。そうだよな。あんまり聞きたい話でもなかったよな」

「いや、聞きたくなかったとは言っていないし……………まあ……………それより今皆堂が話していたんだけど。今まで探していた行方不明者が

見つかったって。確か、お前が探してる二人っていうのも行方がわからないんじゃない？」

「ほんとなのかそれ！！佐藤と喜美が見つかったのか！？」

それを聞いた瞬間、渉は坂上の肩をつかんでしまった。坂上の肩が一瞬跳ね上がる

「触んな！！」

坂上が顔を真っ赤にして叫び即座に叩かれた。小さな体に似合わない力で叩かれ、思わず数歩下がる。

「あ、ごめん……………」

なぜか坂上の方が渉に謝った。

「あ、いやこっちこそ急に肩つかんで悪い。それよりも今の話本当か」

「落ち着け。あくまで行方不明者を目撃情報だけでそれがお前の探してる二人とは限らない」

「……………そうだよな」

でももしかしたら下校の時に考えてたことが思ってたより早く実現するかもしれない。

「ありがとな、坂上。ちょっと皆堂さんに会いにいつてみる」

「あ、おい！」

坂上が何か言いかけたが、渉は聞かずにエレベータへと走った。

皆堂さんは忙しい人だけど、デスクワークだけは自室で行おこなっている。

渉の読み通り、皆堂の部屋をノックすると、中から返事があった。

「皆堂さん！行方不明者が見つかったのって本当ですか！！」

「何だい急につていうかどこからそれを！…まあちようど良いかな。いずれ言うつもりだったし」

「じゃあもしかしてその中に」

「残念ながらそこまでは分かってないんだ。まだこれから調査や搜索するつもりだし」

「なら俺も手伝います！」

「……そのことだよ渉くん」

まるで待ってましたかのようにため息を一つ。

「渉くんを搜索のメンバーには加えられない。悪いけど、何て言わないよ」

当然、というか今までだって渉はこういった任務には一度無理矢理な形でしか行ったことしかない。

「けど俺なら行方不明になった人の顔がわかります。俺の学校には他にも」

「その事なら大丈夫。鬼灯くんにも搜索チームに入ってもらうから。佐藤くんと伊集院くん、その他学校関係者の行方不明者の事なら鬼灯くんが知ってるから。それとも涉くんは鬼灯くんを信じられないのかな？」

今の涉にその言葉を卑怯と言うことさえできなかった。誰から見ても涉を止めている、か、涉が搜索の役に立たないだろう事はわかる。

「気持ちはわかるけどね。だからこそ今まで搜索してきたプロのメンバーに任せて欲しいし、佐藤くんと伊集院くんを知っているに鬼灯くんもメンバーに加える。それに、一番心配なのがこの搜索に涉くんを加えたことで涉くんまで行方不明になったらミイラ取りがなんとやら、だしね」

「はい」

「実は今回の目撃場所から推定するに、かなりの人数が見つかると思うんだ。今回の事がうまくいけば来年までにはまた一緒に学校に通えるかもしれないよ？」

なんだか最後の方はだだをこねた子供をあやされているみたいな言い方をされてしまった。

涉はそこで皆堂の部屋を引き上げた。再び坂上のもとに戻り目撃された場所について聞いてみたが、坂上はこれ以上は知らないと自分の部屋に戻っていった。

渉も仕方なく自分の部屋に戻りベッドに入った。

明後日は12月25日。

渉はクリスマスプレゼントを待ちきれない子供のように眠れなかった。

次の日、渉は授業に集中できなかった。だが、授業に集中してなかったのは渉だけではない。今日は冬休み前最後の授業。だから渉がぼーっとしていても注意されることはなかった。

気がつけば、あっという間に昼休みだった。

囲む机の数も占条せんじょうに居能いのう、宗次、金穂、そして鬼灯とこの二ヶ月でだいぶ増えた。

これも、今日が今年最後。そんなやりとりの中、

「そっいえば文谷ふみたにさん、例のモノは」

「はい。もちろん入手してありますよ」

「せええええんじょよおおくん！？また何か良からぬ事でも考えていないかね？」

「違いますよ科学さん。文谷さん、今持っているかしら？」

「もちろんです。今日渡すつもりでしたから」

文谷は占条に封筒を渡す。そしてついでとばかりに涉達にも一枚ずつ紙切れを配っていく。

涉が何かを確認する前に一番に声を上げたのは有川だった。

「これって『ハートロック』のクリスマスライブのチケットじゃん！」

その言葉に他に教室でお昼ごはんを食べていたクラスメイト数人が反応し、有川に集まっていく。

「あ、本当だ！よく手に入ってたな」

「いいな、私は結局予約できなかったし。どうやって手にいれたの？」

「いや、文屋が今あたし達に、今配って」

「文谷さん。これはどういうことですか」

この騒ぎに占条が文谷に説明を求める。

「いや、これがですね占条さん。頼まれたのが一ヶ月前だったので正直厳しいだろうとあちこちに網を張ったんですが、以外にもあつさり手に入ってしまったので、こうなったら手に入るだけ手に入れてみようとした結果、まあ、情報屋魂ですね」

「……まあいいでしょ。さすがに席は連番ではないですね」

「はい。さすがにそこまでは無理でした」

「って文谷さん！すぐ後ろの席じゃないですか！」

「いやあ、まさかここまでうまく揃うとは思ってもみなくて」

「占条君、別にいいじゃないかみんながいても」

「だめです！せっかく二人きりでデートだと思っていたのにー！」

「いや、どちらにしても周りに人がいると思うんだが………？」

などと文谷達が騒ぐ中、

「へえ、これって結構人気があるんだな。渉は知ってたか？」

「え、ああ。名前くらいなら知ってるよ。曲までは聞いたことないけど」

「金穂は……て知ってるわけないか。鬼灯は」

知ってるか、と聞こうとしたけど、鬼灯はチケットを睨みつけて呟つぶやいていた。その表情はどこか焦っているような、何か言おうとしているかのようにも見えた。

「……まあまあ。と、聞いてませんでした、皆さん予定は大丈夫ですか？」

「あ？なに言ってたんだ文屋。こんなにもらったら彼氏ほっぽりだし

たつて行くに決まってるぜ。……まあ、いないけど。ヤス子も行くよな」

「うん。私も特に予定なかったし大丈夫だと思うよ」

「神山は行くか？行くよな？行こうぜ」

有川が鬼灯に寄りかかると、やっと気づいたのか驚いて有川を見る。

「な、なに？」

「だから、行こうぜクリスマスライブ。一緒に！」

「…………ごめん。この日はアパートの住人でクリスマスパーティーやるから行けないんだ」

ちなみにアパート、とは、渉達が住んでいる場所の事。

なぜ渉と金穂が鬼灯を知っているのか、と以前文谷に聞かれた事がある。その時はなんとかごまかせたけど、再び聞かれた時、そう鬼灯が答えた。どうやら皆堂さんが鬼灯にごまかす設定を教えていたらしい。

渉、金穂、そして宗次の三人は鬼灯が暮らしているアパートに引っ越してきて、そこで知り合った、ということになったらしい。

アパートでクリスマスパーティ。

「なあ宗次。そんな話聞いてたか」

「ん？いや、俺も初めて聞いたぜ」

大人数の行方不明者が見つかりと予想される目撃情報

任務には鬼灯を参加させ、来年には一緒に登校できるかもしれない
と言つ皆堂の言葉

チケツトを睨みつぶやく鬼灯

鬼灯のいうクリスマスパーティ

渉の頭で言葉が繋がっていつてある予想がひらめいた。

「え。べ、別にいいだろアパートのパーティなんてさ。学校の外ま
で欠席しなくていいんだぜ？」

「ううん。本当は私も行きたいんだけど、ほら今年は、土岐野君達
が引越してきたから、大家さんが特別にやりたいんだって」

「変わった大家だなあ」

「ごめんね。文谷君せつかくだけどこれ」

「いや、俺は行くよ。せつかくだし」

「!!!!!! 渉君！」

渉が行く、と言つた瞬間の鬼灯の顔を見て渉の予想が確信に近づく。

「ごめん鬼灯。大家さんに伝えといて。宗次はどうする」

「俺か？あー、参ったな。……まあ、チケットを無駄にするのも何だしな。俺も行くよ」

「でも、」

「何、皆堂さんだつて話せばわかるだろ？正月とかに祝ってもらえばいいさ」

宗次は気づいてないかもしれないが、鬼灯はやはり焦っている。

「なら神山も行くこうぜ。祝う本人達がいらないんじゃパーティの意味なんてないだろ」

「……………うん。そうだね。なら私も行くかな」

「よっしゃー！じゃあ決まりだな！」

鬼灯が来るのは予想外だったけど、それでも予想は外れてないと思つた。

「アパートの大家の名前はカイドウ、と」

そんな渉の心の中に関係なく文谷はメモをしているのであつた。

四人目「キレイで、かわいくて、セクシー……………」(後書き)

続けてか、暇つぶしでか、は分かりませんが読んでいただきありがとうございます。

今回は前の話も関わってくるので一話目をね、えー、読みたくないと思いつつも一度読み返してから書いてます。

前回、あとがきに書いたとおりの内容でかけてると思いますが、せめて、今回くらいは主人公涉に活躍してもらいたいです。自信ない……

わざわざここまで読んでくれたから改めてありがとうございます。

四人目続（前書き）

12月25日。ライブ会場で佐藤と喜美を探す。
佐藤を発見するがその時……

四人目続

放課後、渉わたると宗次そうじはいつもの通り部室へ向かう。が、猿渡さるわたりはまだ来ていないらしくやることがない。

「なあ、渉。鬼灯ほおずきが言っていたクリスマスパーティーって本当にあると思うか。それとも任務ってやつか」

「俺は任務だと思っている」

「やけに自信ありそうだな。なんか知ってるのか」

渉は昨日の夜、皆堂に聞いたことを宗次に話した。

「それでか。けどこのライブがそうなのか、確証はないんだろ？」

宗次が文谷ふみたにからもらったチケットをヒラヒラさせる。

「その割りには昼間の鬼灯の様子がおかしかった。少なくともなにか関係があるのは確かだと思う」

「んー、クリスマスパーティーってのも初耳だったしな。ま、これがただの勘違いだったらパーティーには出れないって皆堂さんに謝ればいいしな。いや、茶化す気はないぜ？ 渉の友達はいいては俺たちの友達にもなるんだからな。俺も手伝うぜ」

「ありがとな。宗次がいれば心強いよ」

宗次を自分の勝手な行動に巻き込むのは気が引けたけど、もしもの

事があつた場合一人でできることは少ない。渉は宗次の提案を受け入れた。

今年最後の部活も終わり（猿渡が年末年始は実家に帰るため）、帰った後、渉は明日の準備をしようとしたが、こういう時何を準備すればいいかわからなかった。

何時間も迷つたあげく、結局は何も思い付かなかったので早めに寝ることにした。

翌日、12月25日。

この日は授業もなく終業式で退屈な時間を過ごし、ホームルームで連絡事項を聞き（といっても担任の大桃先生も生徒と一緒に冬休み気分）、渉のクラスはどこよりも早く冬休みに入った。

まだ昼前だが、渉の中ではすでに一日近く経っているような、それくらい時間が経つのを遅く感じた。

「よーっし！じゃあ帰ったら昼飯食べて、そこで、学校前で集合な」

「そうですね、できれば各自でコンビニとかで食べ物飲み物買っておいた方がいいですよ」

有川、文谷が今日の事について言って、

「神山ー！ドタキャンはなしだぞー！」

校門前で有川が叫び、それぞれが一度家に帰る。

涉達も今日は部室に寄らず帰った。

「のう、鬼灯。らいぶつてどんなところなのじゃ」

「うん。私も行った事ないからあまりわかんないや」

金穂は鬼灯相手だと言葉使いが戻ってしまう。いつもは注意するけど、鬼灯は考え事をしているのか上の空な感じだ。

「そうか！鬼灯も行ったことがないのか！同じじゃな、オセロじゃ！」

「オセロ？」

「うん！オセロじゃ！」

「もしかしておそろ、じゃないか？」

「おお！それじゃ宗次！おそろ！おそろ！」

金穂は帰り道中ずつとおそろ！と言い続けた。

「あのシャツいいよな」

「どれ？」

「あの、前列の方の人たちが着てるやつ。スタッフのと似てるんだけどさあどうやって手に入れるんだろうな」

「確かに気になりますね。チケット手にいれる際に調べた時にはあのＴシャツはどこでも非売品扱いでしたよ」

「つか、この季節にＴシャツ一枚って寒くないか」

「むしろ会場内は熱気で暑いくらいだと聞きましたが。所で水無瀬^{みなせ}氏。背中のリュックには何が入ってるんですか」

「これは、あーほら、待ってる時とか寒いかと思って余分に着るもの持ってきてたんだ。そうかあ暑いんじゃない意味ないな」

宗次が笑って答える。ちなみにリュックの中身は衣類ではなく、飲料水のペットボトルを四本分、計八リットルの水だった。渉もここへ来る途中で「役に立つから飲むなよ」となぜかラムネのビンを渡された。

渉達は余裕をもって開場一時間前から並んでいるが、それでも列の真ん中より若干前の位置にいた。あと数分で開場ということで周りの興奮が高まっていくが、それと同じく渉の緊張も高まっていた。

鬼灯を見ると、有川に話しかけられて返す程度には会話に参加しているけど、これといって動きはない。まだその時じゃないのか、はたまた渉の勘違いなのか――

いや、勘違いじゃない。

予定の開場時間を少し過ぎて列が動き出す。列が動き出してからも

時間が掛かったがやっと会場内に入る。

会場に入ったらさっそく自分達の席に向かう。

場所は会場案内図で見ると右ブロックの後ろの方と、正直ハズレに近い席だが、文谷によると、もうここ位しか空いてなかったそうだが、渉としては鬼灯が動き出す、又は自分から伊集院と佐藤を探しにいくのに都合がいい。

会場は二千人が入れるらしいが満席で、それ以上の人数がいるように感じられる。

やがて、時間が来たのか、会場が暗くなる。と、客席から歓声が上がりと同時に舞台にスポットライトが一つ。

そこに人の姿はない。だが、声だけが聞こえてくる。

『みんな　メリ————クリスマス　』

メリークリスマス！

『今日は12月25日、クリスマス………そんな聖夜の夜に降りてくるのはサンタ？それとも天使？いや、悪魔だって降りてきちゃうよ——』

その声は舞台の天上、そこから聞こえてきた。

現れたのは声の主、ハートロック。その姿は悪魔を連想させるような衣装で爪のグローブにドラゴンのような翼、更には尻尾までつけ

るこだわり。しかも、翼がちゃんとはためき、尻尾も動いているため本当に飛んでいるかのように見える。

着地すると同時に曲が流れ出す。曲名は『DRAGON TAIL』。まさに衣装に合わせた（この場合、曲に合わせたの方が正しいか）選曲だった。

歌が始まると有川はもちろん、それまで興味の無さそうだった占条と科学までもが立ち上がり盛り上がった。周りの客達も総立ちで、みんな怖いくらい熱っぽい目でハートロックの歌を聞いている。

『みいーんな 今日もノリノリでありがとう じゃあこの後はお待ち ちかね トークの時間だよーー けど、その前にブレイクタイム みんな、ちょっと待っててね 』

その言葉で第一部が終わったことに気づく。

ライブ中、少しでも抜け出して探しにいかうと思ったけど、気づけば誰も雰囲気飲まれていた。

「トイレなら急いでいった方がいいですよ」

と文谷の言葉に涉達もトイレに行くが、というか客のほとんどが既に動き出していた。

再び人混みが発生し、流れは大抵トイレに。涉、宗次、科学も一番近いトイレに並ぶが、中々順番が来ない。しばらくしてやっとトイレ

レの入り口まで来た時、何人目か、またトイレから出てきたＴシャツファンが通りすぎる。

！今のって…………

「おい、どうした渉！」

「渉くん！せっかくここまで並んだのにどこにいくのかねー？」

宗次と科学が急に列を抜け走り出した渉に叫んだが、渉は聞こえていないかのように人混みに消えていった。

一瞬だけど、間違いない！今のは佐藤だ…！

佐藤だと気づいた瞬間には追いかけたと思ったのに、人が多いせいでもう姿が見えない。それでもなんとか佐藤の向かった方へ追いかけた。

段々と人の流れとは違う方向に向かっていた。どうやら座席に戻ったわけではないらしい。

「ここは…………？」

やけに人気ひびけが少ない廊下で今では涉しかいない。これ以上先は立ち入り禁止で「STAFF ONLY」の看板が立てられていて先は暗い。周りにはファンどころかスタッフもいない。

「佐藤、佐藤！」

いないとわかっていても渉は叫んだ。

「土岐、野、か……………」

「佐藤……………」

まさか返事があるとは思わなかった。

佐藤はいないと思ったその先、立ち入り禁止側の廊下から歩いてきた。

感動の再会、のはずだが、佐藤は例のシャツだけでなく、頭には黒のハチマキ、さらに両手には派手なピンクの団扇うちわを持っており格好はあまりにも似つかわしくなかった。

「こんなところで何してたんだよ！大体その格好はなんだよ！こっちはすげー心配したっていうのに…」

佐藤はそう言われぼんやりとした目で自分を見下ろす。

「なんじゃこりゃ！てかなんだこのオタク丸出しの格好は!!」

どちらかというとその格好が似合っている佐藤が大声で叫ぶ。

「佐藤！」

「土岐野か？ここは？っていうかあれっ？今何時だ……………」

「今は12月25日だ。お前は今まで行方不明だったんだよ」

佐藤に簡潔すぎるくらいに伝える。

「ゆく……？んなラノベ的な展開があるわけが………」

否定しかけたが、そこで、佐藤は黙り込む。

「どうした」

「いや、よくよく思えばお前と今会う前に何してたかわかんね」

「だろ？お前と喜美は二ヶ月近く行方不明になってたんだ」

「二ヶ月！？そついや、12月って言ったな」

「そつだ、喜美は、伊集院はどこにいるんだよ」

「伊集院？いや、待つてくれよ俺は自分がどうなってるかもわかんねえのに。大体なんで行方不明になってんだよ」

「そつか……いや、それは話すと、長い。ていうか俺一人からは話せない」

二人は一緒にいると思ったんだけど、違ったみたいだ。

「涉お前一人か？それとも他に一緒に来たやつがいるのか？」

「あ、ああ。とりあえず佐藤だけでもそつちに行ってくれ。このチケットの席に行って鬼灯か宗次に俺の友達だって言ってくれ」

涉は佐藤に自分の半券を渡す。

「行けっ たっ て、お前は」

「この先に行ってみる。お前と同じように喜美がいるかもしれない」

「おいおい。わざわざ伊集院を探すために行くのかよ？」

「当たり前だろ！それに、他の行方不明者が喜美を見たかもしれない」

「他つてあと誰だ……？」

「わからない。けど、大勢って言ってた」

「マジでか………」

渉の言葉に佐藤が凍る。

「とにかく俺はこの先に行くから」

「待てよ。だっ たら俺も」

「おーい、そんなとこで何やってるんだ、トーク始まるぞ。さっさと準備を……」

「渉！」

佐藤と渉を挟んで両側から声がかかる。立ち入り禁止側からはＴシヤツを着たスタッフが二人。渉が来た方からは宗次と鬼灯が駆けてきた。

スタッフが渉と佐藤を見比べて渉に言う。

「すみませーん、スタッフ以外はこっからは立ち入りぎんっ……！」
言い切る前に鬼灯が割り込んできた。話しかけてきたスタッフを殴り飛ばす形で。

な、と渉が思う前にもう一人のスタッフが鬼灯に何かを投げつける。それを鬼灯は後ろに跳び、避ける。

鬼灯を外れたことにより廊下が削れ、破片が飛び散る。

「おわっ、ちょ、」

渉は佐藤を突き飛ばしつつも自分も伏せる。立ち上がろうとするが、渉が動き出す前にはスタッフが渉へと攻撃してきた。

「あぶない！」

渉の目の前で水が勢いよく弾ける。見事にずぶ濡れになるが、攻撃を受けずに済んだ。

カラン、と音のした方を見ると、宗次に渡された瓶が空になって落ちていた。

「渉君！今のうちに！」

鬼灯の声で止まっていた体を動かす。が、その時廊下からもう一人現れた。

「あれ、やだあ この状況って何ー？」

この場にいてもおかしくないが似つかわしくない人物、ハートロックだった。

どうやら、この廊下は彼女の控え室と舞台を繋ぐ廊下だったらしい。

涉がまずい、と思う以上にこの場全体に更なる緊張感が広がる。

「あれえ？私のファンの新人君じゃん？どしてここに？」

佐藤の方を見て可愛らしく首をかしげる。

「申し訳ありませんロック様。まさかここに来るとは思っていませんでした」

「どうやらこいつら、NPです」

スタッフがハートロックを様呼びをして、涉達からかばうように立ちふさがる。

「まさか……………」

「もしかしたら、とは聞いていたけど。行方不明者はあなたのファン、そして拉致していたのは、ハートロックあなた自身」

「え？」

どうやら涉一人が状況に置いていかれているらしい。

「やだあ 拉致だなんて みんなあたしについてきてくれてるだけよ？現にその新人君だって今日のライブ来る？って聞いたら喜んでたんだから」

「ほんとだよ、佐藤」

「ごめん、土岐野。今思い出した。俺、この人に一生ついていくんだった。そう誓ったんだ」

佐藤がロックの方を熱っぱい見て言う。

「ほらね じゃあおいで佐藤くん あくあんずは、残ったNPのお子達の始末、お願いね」

「わっかりやした！」

「絶対トークショーに間に合うようにします！」

「よろしくね」

ロックが佐藤を引き連れ廊下の先へと進んでいく。渉も追いかけたいが、あくあんず、と呼ばれた二人が立ち塞がる。

「くっそ……………佐藤！」

せっかく見つけたっていうのに！

「渉、落ち着け」

「でも……………！」

「相手は水使いが二人だ。だったら俺に考えがある。俺が隙をつくるから鬼灯と一緒に後を追え！」

それを聞いた鬼灯が驚きあくあんずがあきれるように笑う。

「お前、さっきラムネのビンの水操ってたな」

「自分で水を作れないやつがでかい口を叩くな」

宗次はリュックを降ろし、ペットボトルを四本取り出す。

「たかだかハリットル程度の水で」

「話になんねえな」

「そんなのやってみなきゃわかんねえぜ？」

宗次は水を廊下に広げるように流していく。その間にもあくあんずは一人は槍のように水を構え、もう一人は水球をいくつか作り出す。

「先手いただき！」

「宗次君！」

「！！！！」

さっき廊下を砕いたであろう水槍が宗次に向かう。宗次は両手を交差させて顔をかばうが、

「無駄だ！腕ごと貫いてくれる！」

水槍が宗次の腕に当たる。

「な、に……………」

「何をしやがった？」

宗次は水槍に貫かれることなく立っていた。水槍は姿を失い、宗次の持ってきた水に混じる。

「やっぱりな。ぶつつけだから焦ったけど、成功したぜ」

宗次の能力は純粹^{ビュアウオーター}精製。触った水をきれいにし、操ることができる。つまり、敵の水槍^{みず}を触って無効化したのだ。だけでなく水の補充もやってのけた。

「今度はこっちだ！」

宗次は腕を振って水を操る。動きは鈍いが、水はカーテンのように隙間なく動く。

「これならどうだ」

水のカーテンは二つに別れ、それぞれが廊下に立て掛けてあるパイプイスを取り込み、あくあんずに向かっていく。

「ちっ、面倒な。はぜろ！」

今度は水球が宗次の操る水の前で爆発する。しかし、表面が波打つ

だけでそのまま向かっていく。

自分の攻撃が通らず油断したのか、動きの遅いパイプイス入りの水があくあんに直撃した。

「くっ！」

「なんだこの水は！」

「今だ！」

宗次が叫び、先に動いたのは鬼灯だった。

「早く！」

渉も後を追いかける。

四人目続（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

週一更新目標ですが、学制的なアレがあったので、間が空きました。これからは時間があるのでできれば他のも載せられればと……。以上です。ありがとうございました。

四人目「……………そんなあたしっておーっってもすてき」(前書き)

四人目今回でラストです。今回は短いです・・・

四人目「……………そんなあたしつてとおーっってもすてき」

「鬼灯！」

「本当はライブが終わって皆が帰ってから搜索するつもりだったけど外で待機してるメンバーに来るよう連絡した！」

鬼灯はペースを合わせて走ってくれてるだろうけど、正直ついていくのにいっぱいだった。

「もう！何で任せてくれなかったのよ！皆堂さんに聞いたでしょ！」

どうやら意外にも怒っていたらしい。

「だって……………いてもたっても……………」

「それはわかるけど。けど、もっと信頼してくれても」

どうやら涉がほおずきを信じてないと思っているらしい。

「そうじゃないんだ」

涉は一度止まる。鬼灯もそれに気づき止まる。

「鬼灯が、とかじゃないんだ。自分でも正直鬼灯たちの邪魔をして何してんだ、と思うよ。けど、俺はここに来なくちゃいけなかったんだ。訓練の時話した夢の話、覚えてる？」

最近、訓練の時見た夢の場面が先ほど行われたばかりだった。涉の

夢は未来のことを先に経験することができる未来予験^{みらいよけん}になる。

「そのせいもあるけど、多分^{よけん}予験してなくても来ていたと思うんだ。なんていうか、任せちゃいけないんだ。俺も、俺も何かしなくちゃいけないんだ！」

勝手な言い分だというのは分かっていた。けど、二人は渉が巻き込んでしまっただけだから。なのに…

「渉君………。わかった、そのためにまずは追いかけてくちや」

鬼灯は何か言いたそうにするが、今はハートロックと佐藤を追うことを優先した。

立ち止まったりもしたため見失うかと思ったけど、意外にも向こうがこちらを待っていた。

ハートロックの後ろには大きな扉。多分、その先は舞台になっているはずだ。

「あれ あたしはくあくあんずを待ってたんだけどな」

「彼らなら当分来ないわよ」

「そつかあ、そっちにいた金髪イケメン君に足止めされてるんだ」
ハートロックは顔を下に向けながらしゃべる。次に顔をあげた時、

「はあああああああ！　たくこれだから下っ端は使えねえんだよ

！このあたしの護衛ならあたしと互角かそれ以上の奴つけろってんだよ。たくよ〜」

今までのしゃべり方とは明らかに違っていた。

「あくまでもファンの前ではネコかぶるのね」

「ああ？ああ、それがあたしのプロ意識？ってかテメーらは違うからどーーーーでもいいし」

はあ、と大袈裟^{おおげさ}にため息をつく。

「まあいいや、気分ワリいからおまえらぶちのめしてトーク終わったら遊んであげるわ。そうね、新しくできたファンの子達の前で赤っ恥トナカイにしてやんよ」

「新しいファンって、まさかこのライブのための！」

鬼灯が気づき、ハートロックがニヤリと笑う。

「そう、あたしはライブでかわいくて、キレイでセクシーな姿を見せてみいいんなあたしの下僕^{とろこ}にしてあげるの。んふふ、ほとんどの人が喜んであたしの下僕になり果てるのよ」

あっははははは、と高らかに笑う。

「……………最低」

「は、なんてとでも言いなブッチャイクちゃん オラ、さっさとかかってこいよ」

鬼灯が吐き出すようにいうが、どこ吹く風で逆に挑発する。

鬼灯がハートロックに一瞬で距離を詰め殴りかかる。鬼灯の本気の
一撃を避けるかと思いきや、

「なあに？この程度？」

片手で受け止めた。

そんなばかな、とでも言いたげに鬼灯が目を見開く。

「そんなに意外かしらこの脳筋ブスが！」

手を放し、衣装の尻尾で鬼灯の横腹を叩く。鬼灯は勢いよく飛び、
壁にぶつかる。

「ぶっ！ざまあ！」

ロックが追い打ちをかけるように足をあげる。

「させるかよ！」

戦闘に向いてないのはわかってているが涉は体当たりをしかける。が、
ロックの方が速く動きかわされ涉はバランスを崩し転んだ。

「ナニナに今の？ハズ？」

その代わり鬼灯が体勢を整える。時間稼ぎ程度にはなっただけ。

「渉君は下がってて！この人、強い」

「なーにがこの人、強い、よ。当たり前じゃない。そうだ、あたしの能力教えてあげる」

「え？」

自分から能力をばらす？だいぶ前に戦った敵も能力を自慢げにしゃべっていたけど、それほど自信があるのか？

「あたしの能力は『偶像崇拜^{アイドル}』。あたしはね、下僕^{ファン}の分だけ強くなる力。どう？まさにあたしにぴったりの能力でしょ。ちなみにこの会場にはあたしの下僕五千人を連れてきてまーす」

五千対二。普通なら勝ち目はない。さつき鬼灯の拳を受け止められたのもそのファン五千分分の力があつたからか？

「ま、知ったところで詰んでるわ」

今度は翼を動かし、ワイヤーを使わずに宙に浮く。

「どこみてんだよ」

「！」

次の瞬間には鬼灯の後ろにいて、蹴りをかます。

涉はともかく鬼灯もハートロックの動きが見えていなかったらしくギリギリのところで蹴りを受け止め距離を取る。

ここからは完全に鬼灯の防戦一方だった。鬼灯の攻撃はほとんどがかわされ、ロックの攻撃は見えない動きで死角から攻撃がくる。その度に鬼灯はギリギリでかわすか受け止めていた。

結局見ていることしかできない涉だが、この戦いに違和感を感じていた。

なんだか、鬼灯の動きが変だ………？

確かに敵の動きは速いし攻撃も当てられている。しかし、さっきみたいに瞬間移動みたいな動きはしていない。なのに、鬼灯にはまるで相手の動きが見えていないかのように戦っている。

そもそも、いくら鬼灯でも五千人数の蹴りや拳を受け止められるのか？

と考えていると、ある感覚が涉を襲う。

この感じは………！

鬼灯と涉がいた。

視点は相変わらず空中に漂っているかのごとく見下ろしている。と同時に鬼灯と一緒にいる自分の視点からも見えていた。

廊下は天井から雨のように水が降り、水浸しで二人も水浸しになっていた。

「くそっ、くそ！」

「……………」

渉は膝を付き、拳を廊下に叩きつけた。

鬼灯はそれを何も言わずただただ見ているだけだった。

渉は廊下にいる渉の方の気持ちがあった。

それは、どうしようもない悔しさ

まるで、見つけたものをあと一歩という所で逃したような、どうしようもない悔しさ

時間にしてほんの一瞬。だが、渉は確かに自分のみた光景を覚えていた。

今は、このあとに起きる出来事だったのか。

多少の立ち眩^{くら}みを感じながらも渉は冷静に考える。

もし、あれがこの後の出来事ならそこにハートロックの姿はなかった。なら、倒したのか、少なくとも退けたはず。

一体どうやって……………？

「いい加減しぶといわねえ。もう時間ないんだからさっさとくたばれ脳筋ブスが！」

また口汚く鬼灯を罵るハートロック。彼女の動きは疲れてきたのか段々と遅くなってきた。それでも鬼灯は動きが見えていないのか、戦いにくそうだ。

そこで、渉はふとひらめいたことを試した。

廊下にある赤いコーンを拾い、鬼灯に当てないよう投げつける。

鬼灯の速攻ですら避けていたロックに弛く^{ゆる}投げたコーンが頭に命中する。

「あて……………？」

その事により両者の動きが止まりロックが渉の方に振り替える。

「て、て、てめえ！」

今まで遅く動いていたロックが顔を真っ赤にして急に渉の目の前に現れ、渉の腹に蹴りを叩き込む。

「がはっ」

「ふざけた事してくれんじゃねえか、あんん！？」

ロックが渉に気を取られている隙に今度は鬼灯の攻撃があたる。

「っち！」

ハートロックは腕でガードして鬼灯から距離をとる。

「鬼灯！そのテーブルを投げるんだ！」

渉が叫ぶと鬼灯は廊下で畳まれていたテーブルを片手でつかみ、口ツクに向かって投げつける。

「えっ？きゃあ！？」

自分に向かって飛んでくる物体に驚きしゃがんで避ける。

テーブルは斜め上へ逸れ、回転しながら天井にぶつかる。そして天井から大量の水が雨のように吹き出してきた。

「うわっ！冷たっ！つめたーーーーい！」

どうやらこの水の正体は天井についていたスクリンプラーの水だったらしい。

「渉君？これって一体……………」

「ああ、あいつの偶像崇拜^{アイドル}って能力、多分嘘だ」

今まで見ていた戦闘の違和感がそれだった。

偶像崇拜。その力は自分のファン、つまり自分を崇める者の力を自分のものにするができるという能力、とハートロックは言っていた。

今回は五千人分といていたが、それならそんな力で殴られたさすがに鬼灯でも受け止められるはずがない。

「そして何より今ので確信した。鬼灯ですら片手で投げられるテールをわざわざ避けた」

五千人分の力があるのに普通に避けた。これはつまり、

「偶像崇拜の能力は嘘……？」

「あるいは本当は別の能力なのか」

冷たい冷たい、と連呼して悶えていたハートロックの動きが渉の言葉に反応して止まる。

「……………ふ」

「ふふ、ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

何がおかしいのかハートロックが突然笑いだす。

「ばっかみたい。もしかしてあたしの言ったこと馬鹿正直に信じてたわけ？ 敵に能力教えるわけねーだろばー……か。……………はあ、ずぶ濡れだしやる気マジ失せた。このままじゃ風邪引くし。今日はおしまい」

「待てよ！ 佐藤は、喜美はどこ行っただよ！」

渉の言葉にハートロックは何の反応もせず、背を向け一瞬のうちに消えてしまった。

『ご来場のお客様にご連絡いたします。ロックの体調不良につき本日
のトークショーは中止とさせていただきます』

その放送が流れた時、客席からは不満の嵐が起きた。有川ありかわも不満の
声を上げる。

それにも関わらず、係員は放送と同じことを繰り返し出口へと誘導
している。

意外にも最初に出口へと向かったのはいつの間にか装備も変えてい
たあの限定Tシャツを来ていたファン達だった。彼らは何も言わず
まるで行進のごとく出口に向かうのでいつしか不満を上げていた客
達も係員に従う。

占条せんじょう、居能いのう、そして文谷ふみたにも帰る準備を始めたので有川も仕方がなく

「そうだよ！神山はどうしたんだよ！」

「神山さんですか？」

「そう言えば水無瀬くんも土岐野くんを追っかけてどこかに行った
ままだぞ」

「あたしは神山達が戻ってくるまでこの席で待ってるからな」

「しかし放送を聞いて先に会場の外に出てしまったのでは？」

「だって荷物を置いたままだぜ？普通取りに戻ってくるだろ？」

「では電話かメールしてみましよう。誰か知っている方は」

「ごめんね、心配かけちゃった？」

「神、てか神山！何でずぶ濡れなんだよ！風邪引くぞ」

「これは、その、さっきスクリンプラーの誤作動に巻き込まれちゃって。それでハートロックさんのトークショーも中止になったんだって」

「なるほどなるほど」

「なるほど、じゃねえだろが文屋！お前その服貸せ！てかあたしの服に着替える神山」

「いいよいいよ！大丈夫！」

「ぜってー大丈夫じゃねえだろ！」

「ううん、本当に大丈夫だから！もうタクシーも呼んであるし。涉君達も一緒に先帰るね」

じゃ、と鬼灯は荷物を持って先に行ってしまう。

少し前、

廊下は水浸しで鬼灯、涉も水浸しになっていた。

「くそっ、くそ！」

「……………」

渉は膝を付き、拳を廊下に叩きつけた。

鬼灯はそれを何も言わずただただ見ているだけだった。

こうなるとは分かっていたけどやはり渉の中に悔しさが残る。佐藤とせっかく再会したのに結局はまた見失ってしまった。

「渉……………」

そこに宗次がやってきた。あくあんずとの戦いで怪我をしたらしく腕をおさえていた。

「佐藤はどうなったんだ？」

「佐藤は……………だめだった……………」

「だめってなんだよ……………まだ会場にいるはずだろ。探せるならだめなんて言って……………」

『ご来場のお客様にご連絡いたします。ロックの体調不良につき本日のトークショーは中止とさせていただきます』

宗次が渉に叫んでいる時、放送が流れる。

「これって……………」

「こうなるのはわかってたんだ。今の自分の姿を俺は先にみていたんだから」

「渉君……………」

「佐藤が見つかってせっかくのチャンスを取り逃がして。…結局俺って何一つ変わってない！」

「そんな事はないよ！渉君のおかげで佐藤くんは見つかったし、何よりさつきハートロックの能力を見破ったのだって渉君じゃない！だから、」

「いや、渉は確かに変わってない。役立たずだな」

「水無瀬君！」

「だってそうだろ？じゃなきゃ佐藤だって今ごろここにいて、伊集院さんだっけか？も一緒にいたんだ。何もせず何もしなかった渉が全部悪い」

渉が立ち上がり、宗次を見る。

「じゃあ…………じゃあ何をすればよかったんだよ！あの時見た未来から結局こうなるってわかってて何をすればよかったんだよ！」

「今はもうその未来も過去だろう！その時の未来にできた事^{かこ}もしてやれることもない！」

「だったら、」

「だから、こんなところでいつまでもこうしてないで今からの事に考えて行動すればいいじゃねえか。またチャンスがやって来る。その時に今と同じ結果にならないよう渉が頑張って、頑張っていけばいいじゃないか」

宗次が渉の肩に怪我をした方の手を乗せる。その怪我からは血が流れるが、すぐに水に流されていく。

宗次の言うようにそう簡単に今回のようなチャンスが来るとは思えないが、今は宗次の言葉を信じたかった。

「外で待機しているメンバーに連絡した。戦闘に入った人もいたけど手が空いている人にシャツを来たファンを片っ端から保護するように、言ってみた。渉君と水無瀬君は会場の外に車が来ているからそれに乗って」

「鬼灯は……？」

「私は事後処理をしないと。今日って有川さん達と一緒に来たじゃない？それから金穂ちゃんも迎えにいかない」と

「だつたら俺も行くぜ？」

「水無瀬君が来たらその怪我の説明がつかないでしょ。それに二人とも早くしないと風邪引いちゃうよ？」

鬼灯に言われて体の末端の感覚がなくないくらい冷えきっているのに気がついた。きつと唇も紫色になつてるに違いない。

それから、宗次の助っ人に来たメンバーの人と一緒に（先にあくあ
んずを捕まえて運んでいたらしい）車に乗り、帰った。

帰るまでずぶ濡れで帰ってすぐに風呂に入れられたけど色々重なっ
て長風呂になった。宗次は「こりや三人揃って明日は風邪だな」と
言って自分の部屋に戻って早々に寝てしまったらしい。

時間はクリスマスをとくに過ぎていたけど、聖夜のに涉にプレゼ
ントは送られてこなかった。

四人目「……………そんなあたしってとおーーーーってもすてき」(後書き)

ここまで読んでいただきありがとうございます。

今回は短めとなっています。お話も今とは逆の季節なので何とモだからなんだ、ツて感じなんです。

五人目「とほほ……………」（前書き）

ふつか—————っ！

ということで五話目、皆さんも風邪には気をつけてください。

五人目「とほほ……………」

痛い、苦しい。

あれからこの言葉を何度繰り返しただろうか。

傷が、胸の傷が心臓が脈打つ度に血と共に体全体へと痛みを送る。

あれからこの苦しみがなかった日は一度もない。

あれからいつ終わるのか、またはこのままなのか。もはや数えていない。

あれから……………あれから？

あるからとは、いつからだ？

……………そうか、あの時か。

あの、二人。殺そうとしたが逆にこちらが敗^まけ、この傷と苦しみを背負ったあの日。

あれから、あの二人。

殺す。あの二人を殺せばこの痛みと苦しみも殺せる。

ころす、ころす。

……………

クリスマスの一件から六日後。

渉は風邪を引いていた。^{わたる}

そりゃ冬にずぶ濡れでいたら風邪を引くよなあ……………

あのライブ会場から車で帰える途中渉は寝てしまい起きた時には体がだるく布団の中だった。

宗次^{そうじ}はというと…………と、渉の部屋に人が入ってきた。

「よ、渉起きてるか」

宗次だった。宗次と鬼灯^{ほおずき}も渉と同じ状況にだったにもかかわらず風邪はひかず、渉だけがベッドで寝込んでいた。

「だいぶマシにはなったか？」

「ああ、さつき熱を計ったらやっと7度まで落ちてたよ」

「それでもまだまだだな。こんな風邪くらい超能力でちょちょいと治してくれりゃいいのにな」

「まあ、自業自得だからな…」

皆堂^{かいどう}さんいわく、「これを機に渉君には少し反省してもらおうかな」らしく、こうして自室のベッドで寝込んでいるわけである。

「そういえば鬼灯はどうしたんだ。つきっきりで看病してなかったっけ？」

「さっき俺がもう大丈夫だって言ってなんとか自分の部屋に帰らしたよ」

どうやら鬼灯は俺が寝込んでいる間中看病してくれたいらしい。責任を感じているのか休むよう説得するのに随分苦労した。

「そうか。いや、大変だぞ渉。さっき廊下で頼貴らいきに会ったんだけどさ。見た目も中身もぴりぴりしてたぞ。まあ見た目はどちらかというとビリビリしてたけど」

頼貴、本来はよりたか、て名前だけど、おれたちの間でもすっかりあだ名が定着した。頼貴は紫電しでんを使う超能力者で鬼灯と仲良くする渉の事を気に入らないらしい。

風邪が治っても頼貴に再びベッドに送り返されそうだと渉がうんざり思うと、

コンコン、と控え目に部屋のドアがノックされた。

「お久しぶりです、戸保とほさん」

「どうも、お久しぶりです皆堂くん」

渉の部屋がノックされる少し前、皆堂の部屋に一人の男が訪ねてき

ていた。

歳は中年を通りすぎ定年間近。髪は丁寧^なに撫で付けてあり着ているスーツもシワひとつなく身なりは整っている。が、姿勢が猫背で眉毛が常に困っているかのように下がっているため情けない印象を与えている。

そして極め付きとして鼻の下に見事なちよびひげが生え揃っていた。

「ここに来るのは半年振りくらいですか」

「そうだねえ、その時も色々お世話になりました。お陰でクビにならずに済みました」

「いえ、こちらこそ戸保さんが来てくれて助かりました。捜査資料ご提供ありがとうございました」

「いえいえいえいえ！こちらこそ犯人逮捕、とまではいきませんが無事、事件が解決しました。こちらこそありがとうございました」

互いが互いに頭を下げる。

皆堂が頭を上げてもしばらく戸保はそのままにいる。

「あの、戸保さん………？」

「はい？」

「今日も何か用があったんじゃないんですか？」

「ああ！そうでしたすみません！トホホ」

と慌てて頭を上げる戸保。

「まだ『トホホの戸保さん』は健在ですね」

「どうにも、つい出てしまって」

そう言つてトホホ、と苦笑する。

「先程その時も、と言つてましたがまた僕たち、あるいは彼らに係ある事件で？」

「はい、そうなんです……。こちらでは例のごとく『FP事件』と呼ばせてもらってます。もうニュースにもなっているんですが、連続してこのようなひどいことが」

と言つて戸保は『極秘 FP事件関連資料』と書かれた封筒から写真をいくつか取り出す。

写真は主^{おも}に真っ赤に染まつていてどの写真にも奇形^{きけい}と化した死体が撮られていた。

「これは、ひどい………」

「ええ、どの被害者もこのような姿で発見されています。第一発見者は今も重度のショックから立ち直れてません。もしかしたらこちらの先生の協力をお願いする事になると思います」

「ええ、その時はいつでも言ってください」

「はい、お願いします」

戸保はまるで神様に祈るかのように目を閉じ皆堂に手を合わせる。

「それで凶器などの見当は」

「ついていません。それから、もうひとつ気になることが」

戸保はまた先程の写真と同枚数写真を出す。

「血文字」

「はい。被害者の近くに必ずありました」

それは壁や地面が撮られた写真で赤い文字が書かれていた。戸保が写真を並べかえる。

左から1、と数字が振られ「今こそあの言葉を実現としましょう」「と書かれ、二枚目には「かならずさがしだしてころすでしょう」、「三枚目「ころす、ころす」、そして四枚目は血で文字が塗りつぶすされていて読めない。」

「四枚目、つまり四人目の被害者以降はこうなっていて文字が読めないんです。これは犯人が段々と正気を失っていると思われます。しかし、恐らくはここに名前のようなものが書かれていると推察できました」

「名前………ということは二枚目の『さがしだして』というのが犯

人の狙い」

「そうだと思います。だから亡くなった被害者はただ巻き込まれただけなんです……！皆まだ将来ある若い子たちばかりで………そう思うと私は………」

戸保は下を向き、体を震わせる。皆堂は戸保の性格を知っているの
で戸保が前を向けるようになるまで静かに待つ。

やがて落ち着いたのか戸保は鼻をヂーと音をたてかみ、顔を上げる。

「トホホ、すみません。みつともないところをみせました」

「いえ、戸保さんのそういう所を含め良いところだと思いますよ」

ありがとうございます、と戸保が苦笑する。

「戸保さん、僕にはこれらの事件に見覚えがあります」

「私もです。かつて捜査本部があんなにも混乱したことはありません
でした。まさかあのようなことがまた起きるとは。いや、犯人を
逮捕できなかったその報^{むく}いが今」

「戸保さん。あれは仕方がなかったんです」

「わかっています」

「それに今回の事は僕たちにも責任があります」

「責任………？」

「今回の犯人は殺し屋『幻惑者』。そして彼の狙いは土岐野渉と神山鬼灯の二人です」

「……………ということで渉に話を聞きに来た、と？」

「はい」

渉の部屋に訪ねてきたのは戸保だった。

「おそらく土岐野君と神山さんが幻惑者を最後に見たはずですのでできればその時の話を聞かせていただければ。そしてら神山さんはお休み中だったので先に土岐野君の方からと。そのー、具合は大丈夫ですか」

渉が寝込んでいたと言つのを皆堂は言つてなかったのだろう。

「大丈夫です」

渉が無理なくそう返事すると、宗次が席を立った。

「じゃあ俺、飲み物持つてくるぜ」

宗次が人数分の飲み物を用意して渉は戸保と宗次に鬼灯と出会うきっかけにもなった出来事を話した。

「…………なるほど。お話ありがとうございます」

「いえ、といっても俺に話せることはあまりなかった気がしますけど」

「そんなことは！今のお話から今回の犯人とその幻惑者が同一犯の可能性が強くなりました。……それから、その、辛いことを思い出させちゃってすみません」

「えっ」

佐藤と喜美の事は意識して話さないようにしていたけどやっぱり顔に出てしまったか。

「…………そんなことは」

「あ、本当にちよびひげがいる」

そんな時、空気を読まず渉の部屋に遠慮なく入ってくる奴がいた。頼貴だ。

「ああ、頼貴君ですね。お久しぶりです」

「おう、ちよびひげは相変わらずカツアゲにでも遭った顔してんな」

「確かに」

と頼貴の言葉に宗次が笑い戸保が苦笑した。

「何の用だよ」

「あ？………皆堂さんがちよびひげがここにいるから来るように言えって。ついでに、いつまでも仮病で寝込んでる貧弱を記憶部^{ライフ}屋に連れてけってよ」

相変わらず頼貴の渉への態度はひどい。最近では鬼灯が看病で渉の側にずっといたから特にだ。

「そうですね。私もお話が聞けたのでそろそろ行きます。何か他に思い出したりしたらお願いします」

戸保は渉に手を合わせお願いをするように頭を下げる。

変なお願いの仕方だが渉は断る気はしなかった。

「わかりました。また何かあったら。皆堂さんに伝えれば良いんですか？」

「そうだった。ここに連絡ください。私の携帯です」

と言って戸保が渉に名刺を差し出す。そこには、

「警視庁特殊事件・命令待機課………？」

と書かれていた。

「いや、それは便宜上^{べんぎ}の呼び方でして、あまり意味がなくて………」

「ちよびひげは警視庁の窓際族、だもんな」

頼貴のストレートな言い方に戸保が苦笑する。

それではお先に、と戸保が立ち上がりドアに向かう。

「あの、最後にいいですか」

「はい？」

「もし、俺が、あの時幻惑者を逃がさなかったら、倒していたら今回の被害者達は死なずに済んだんですか」

渉は戸保から事件を聞き、気になった事を聞いた。

「……………その事で君が責任を感じてるんだったら、その必要はありません」

戸保はしばらく間を開けて渉に答えた。

「本来なら私たちが捕まえるべきものを君たちに任せてしまった私たちが悪いんです。今回も被害者達を守れなかったのは私たちの責任です」

「けど、あそこでやつが死んでれば！逃がさずに殺せれば……」

「私には誰にも死んでほしくないし誰にも殺してほしくないんです。特に君たちのような若い子達には。もちろん、やらなければやられる、そんな状況が起きてしまうことだってあります。特に君達はすでにそういう場面を経験してしまっていると思うのであまり説得力はありませんが、実際私に出来ることはほとんどありません。お願いします。例えばどんな状況だとしてもどんな人でも殺さないでくだ

さい」

そう涉たち言つて戸保は部屋を出ていった。

薄暗い廊下に薄暗い部屋、灯りがない訳じゃないがそれもなんだかわからないもやもやしたものが不等間隔で並んでいるだけだ。

相変わらず薄気味悪い所だ……………

できれば来たくない、と思うが、今日は重要な案件で呼ばれているのでそれも仕方がない。

相方は、というと今日も機嫌が悪いのか目つきがいつそうきつく、金髪も相まって不良の見た目を通り越しチンピラっぽい。これで中学生なんだから変な貫禄かんろくがついてしまっている。

機嫌が悪いのは今日に限ったことじゃないか。

「おい、わかつてると思うが今日は価値ワースレスなしの親玉の呼び出しだ。くれぐれも態度に気を付けろよ」

「……………」

「そりゃ俺だつてこんなことで呼び出されるのは不本意だ。たがな、

」

「……………」

「おい、ハチミツ」

「……………お前に俺の何がわかったよ」

「あ？」

「お前に、徹夜のプレイ時間6時間全部合わせればほぼ一日のデータを一気に失った、俺の気持ちがあわかんのかよおおおお」

見た目不良ことハチミツが叫ぶ。

「……………」

今度は俺が黙る番だった。

「隠しボスが強いこたあわかってたんだよ。だから、今回も勝てなかったのはわかる。けどよ、今回はちゃんとレベル上げてしまかもレア装備ゲットしてたのにさあ。なんでセーブしないで切っちゃったんだよ俺のバカ！」

「おま、まさか最近機嫌悪かったのって」

「だから隠しボスが」

「んなくだらねえことで気を煩わすなこのアホ！」

「ああ！？くだらねえ！？くだらねえとはなんだよ！お前あの装備出現どれだけ条件厳しいのかわかってんのかよ！」

「知るか！そっちこそ俺がどれだけ疲れてんのか知ってんのか！」

「知るかボおケ！お前の疲れより隠しボス攻略の方がもつと疲れるわ！」

「んだとお！」

「やんのかリンゴ！」

「いいだろ。お前のラスボスが誰か教えてやる！」

「現実のボスの話をしているかな？」

既に臨戦状態だったリンゴとハチミツに声をかけるモノがいた。

声を聞いたただだったがその瞬間リンゴハチミツの二人は動きを止める。

「あんたは……………」

「価値なしの……………」

「そ。『サークル・ゼロ』の価値なしの『1』番だ。君たちを呼び出した件について話したいんだけどいいかな？」

場所は先程の廊下と同じく薄暗い場所。違うと言えば何の飾りもなく灯りもぼんやりとしていた廊下に比べカウンターやイスがあり、ひとけ人気のないバーのような場所だった。

「さて、君たちを呼び出したのは幻惑者げんわくしゃの件、なんだけどね」

席が空いているにも関わらず狭い丸テーブルに向かい合い話を始める。無論、バーテンダーらしき店員もいないので飲み物は出ない。

「とある仕事以降治療中だった彼は突如錯乱とつじょさくらんし、治療に当たっていた医師、作業員を狂死させ逃亡。現在行方不明で捜索中。………治療所がこの『パラサイト・シーイング寄生旅行』の末端部屋とはいえ仲間を殺して逃げだした。いくらうちの方針が自由とはいえこれはさすがに問題でね？」

と言って丸まった新聞を二つテーブルに転がす。いずれも猟奇りょうぎ的な殺人事件が一面に載っている。

「これもそう。逃げだした時の精神状態はかなり正気を失っていたけど、この手口は彼の能力に違いない。そして彼はおそらくだが」と、ここでためる。

「ある場所を目指してるんじゃないかなー、と」

「それは」

「君たちも知っている場所。『昇格』しての初仕事であり初失敗をした場所」

『1』番の言い方にリンゴは顔をしかめる。最近こんな感じの嫌味ばかり聞いていたがまだましなほうだった。

あの高校か……………

「で、結局俺たちはどうなるんすか？『降格』でもしてまた下端にでもなるんすか？」

「おいハチミツ！」

「まさかまさかそんなことはしないよ。それにこの組織に『降格』なんて都合のいいものはないよ」

軽口を叩くハチミツをリンゴがたしなめるが、『1』番は手を横に振る。

「実は君たちにも搜索に加わってもらおうかと思ってねえ。そのために今日はある物を渡そうとこうして直に呼んだわけ」

そう言つて『1』番は丸まった新聞をゆび指す。

「広げてごらん？」

リンゴ、ハチミツが顔を見合わせるが一つずつ丸まった新聞を広げる。

「これは……………！」

中身を見たリンゴが『1』番の顔を見る。

「プレゼント。我らが『希望の一片』^{ピースメーカー}からの君たち専用の『一片』^{ピース}だ。ちなみに『希望の一片』からのメッセージは『使い方は君たちが一番知っているはず』だそうだ」

リンゴとハチミツが自分専用の『一片』をそれぞれ手にする。

「では改めて。君たちの久々のお仕事は幻惑者の搜索。見つけ次第殺してもいいけど心理的にも実力的にも難しいかな。最低でも胸部の破壊だけしてくれれば良いから」

「胸部の破壊？それはどういうことですか？」

「それは見ればわかるよ」

リンゴの質問をはぐらかし、『1』番はバーを出ていく。

「いってらっしゃい」

五人目「とほほ……………」（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

今回は、まあいいや。本編の補足を一つ。

「希望の一片^{ピースメーカー}」という名前なんですが、このピースはP E A C E（平和）の方ではなく、P I E C E^{かけら}の方です。パズルのピースと同じ意味ですね。「希望の一片」は……これについてはまたいずれ。ここまで読んでいただいた方、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6832r/>

N . P . S

2011年11月16日18時26分発行